

五月雨晴也の野望

漆原 涼介

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

もしも『織田信奈の野望』で、良晴ではなく、現代の高校剣道児がトリップされていたら？

そんなお話です。

※SIDEを使うのは、序盤の少しだけです。そこ以外はやりません。

※処女作ですので、たくさんの方の（良いであれ、悪いであれ）感想をお願いします。

※主人公が自己満足の半ばチートキャラと化してしまっているのでご了承下さい。

※この小説は色々試しているのですが、前の話で会話と会話の間が空いていたのに、次

の話では空気が無くなっていたり、前の話と地の文の空き具合が違うなどが起こります。

目次

第一章 狂わされた運命

第一話 晴也と信奈 1

第二話 織田家の騒がしい面々

13

第三話 美濃の蝮 25

第四話 会見の結末 37

第五話 勝家の誤解 49

第六話 織田家、お家騒動 67

第七話 織田家、お家騒動・完

83

第八話 揺れる感情 103

第九話 美濃動乱 119

第十話 風雲、桶狭間！ 136

主人公&キャラ紹介 く壺の書く

163

第二章 美濃統一

第十一話 長政の秘密 174

第十二話 天才軍師調略 198

第十三話 天才軍師調略・完 218

第十四話 美濃統一 236

第十五話 未練は人それぞれだ

257

第十六話 天下布武の名の下に

278

第三章 天国と地獄の狭間で

	第十七話	織田軍、上洛	—	294
	第十八話	黄金の都	—	311
	第十九話	天下の大泥棒、参上!		
335				
	第二十話	五月雨晴也の憂鬱	—	356
	第二十一話	南蛮寺強襲	—	381
	第二十二話	清水寺の戦い	—	405

第一章 狂わされた運命

第一話 晴也と信奈

五月雨（さみだれ）晴也（はるや）は、走っていた。戦国時代の合戦の真ん中を、突っ切っていた。茂みから出てくる敵の剣や槍を弾き、後ろと前両方から来る矢を全て叩き落としながら。

「はあはあ……クソっ！」

手に持っている木刀をチラリと見て思う。

（いつも通り道場に向う筈だったのに……なんでこんな事になってんだ!?!）

彼は剣道をするために、道場に向かっていた。確かにその時の木刀だ。

証拠に頂天と言う文字が刻まれている。別にそういう痛い言葉が好きなのではない、高校の剣道インターハイの優勝商品だからだ。そう、五月雨 晴也は高校界N.O.

1の剣道選手だ。幼い頃、父親は流派・五月雨流を創り出し、そこで彼を鍛え上げた。

おかげで剣道で同年代に敵なしとまで言われた。

（どうにかこの状況から抜け出さねえと!）

とにかく晴也は走る。ここから抜けるために。しかし、足に何かが引つかかって転ん

でしまった。死体。それは戦国時代なら当たり前の光景だ。だが、あまりに晴也の現実からかけ離れていた。うつ、と晴也は口を塞ぐ。

(何なんだよ……これは!?)

風を斬り裂く音が聞こえた。近くの林の中から、弓矢な射かけられたのだ。

五本、十本、二十本。鏃は金属製で、胸に刺さったら即死モノである。

逃げなくちゃ、と五月雨は逃げようとするが足が上手く動かない。

死ぬ。そう思った瞬間。

「坊主、あぶないみやあー!」

助けられた。後ろから首根っこを掴まれ、そのまま引きづられ、間一髪。

さつきまで自分が居たところは矢が刺さりまくっていた。しばらくそのまま走って、

茂みの中に逃げ込んだ。

「だから！わしは一国一城の主になって、女の子にモテモテになるだみやあ！」
「はあ…」

(何だが、イマイチ戦国時代の足軽とは思えないような人だなあ。)

「坊主はいいのお…そんな美少年面だと、モテモテだにや」

晴也自身あまり自覚は無いが、パツと見は美少女と見間違うほどの美貌の持ち主である。それに、背中の半分は隠すほどの長く綺麗な黒髪を一つにまとめている。現代でいういわゆるイケメンの類に入る。

とにかく、ここは濃尾平野。旗印で分かっていたが、今川と織田が戦っているところだ。おっさんは今川方の足軽らしいが、隙を見て織田に寝返るつもりだったらしい。

「足軽のおっさん…俺も織田家に行くよ」

(ここでじつとしてても仕方ない…)

足の震えは、もう止まっていた。

「ありがたいにや坊主！ならば、わしの弟分になれみや！」

「えっ!? ……あ、ああ、なる!一緒に織田家に仕えよう!」

弟分つて………どういふ事だ……?とりあえず織田に仕官すれば、状況が変わるかもしれない。

「ふぐっ?」

小柄な足軽が、いきなり胸を押さえてうずくまった。

「どうした、足軽のおっさん?」

「……流れ弾に当たったみやあ……運がなかったみやあ」

たちまち、鎧の胸当てが紅い血に染まっていった。あまりに突然。

「えっ……」

マジかよ?人間つて、こんなにあっけなく死ぬのかよ?晴也の顔色がみるみる青くなっていく。

「坊主。わしはこれまでだみや。わしのモテモテの夢、頼んだみやあ……」

すでに心の臓が止まろうとしていた。

足軽の臉がゆっくりと閉じていく。

「お、おい待てよおっさん! まだ俺は、あんたの名前も聞いてねえ!」

「……………わしの名は……………木下……………藤吉郎……………」

……………木下藤吉郎……………? 木下藤吉郎って……………羽柴秀吉……………豊臣秀吉じゃ……………!

織田信長に仕え、農民の子から天下人にまで上り詰める男。日本史上最大の出世を果たした、英雄の中の英雄! 俺が尊敬する武将No. 1の秀吉さんだ! 言われてみれば、確かにサル顔……………。

「待てよ! おっさん死ぬな! あんたは織田信長に仕えて、この国を……………」

「……………信長とは誰じゃ……………織田の殿さまの名は……………のぶ……………な……………」

……………こときれた。晴也の腕の中で、天下人となり、さらに一代の英雄となる、晴也が最も尊敬して好きだった秀吉が、足軽のまままでひっそりと死んでしまった。

(ありえねえ……………こんなの、俺が習った知識と違う。あいつとやってたゲームだって、こんなイベントはねえぞ……………)

ポツンと、彼はまたひとりぼっちになった。

「はあ〜」

思わず溜息をついてしまう。まさかの秀吉さんの死亡。

やっぱ夢?と思ったが、秀吉さんの屍はあまりにリアルだった。

(俺……どうすりゃいいかなあ)

今、晴也はとにかく織田の本陣に向かっていた。どことなく足取りが重い。

(秀吉さんだったならもつといっぱい話したかったなあ)

しかし、そうしたら俺が秀吉さんの代わりをしなくちやなんないんじゃないか?

(……まさかな)

「やつと着いた〜ってあれ?」

すでに大将を守る近衛兵たちも前線へ出てしまっており、本陣はがら空きとなっていた。ところが、である。そこに、いずこからともなく急襲してきた今川方の決死隊が切り込みをかけていた。

(これ、ヤバイんじゃないか)

晴也の考え通り、織田信長とおぼしき格好をした人物が敵に、四方八方から取り囲まれていた。

(秀吉さん死んで、信長まで死んだら歴史めちやくちゃだつ！)

晴也は信長？へと飛んできた槍を、木刀で叩き落とした。

S I D E : 織田信奈

(これは絶体絶命ね……)

もはや大局では織田軍の勝利は必然。だが、総大将の自分がやられちゃ意味がない。(さて、どうしようかしら……)

信奈自体弱いわけではないが、勝家や犬千代には遠く及ばない。愛用の種子島に弾を込める前に恐らく斬り殺されてしまう。あくまで一般的に戦えるレベル。

相手が多数いる状態は、正直キツイ。すると、自分のもとへ頭めがけて槍が飛んできた。

「くっ！」

応戦しようとする前に、その槍は叩き落された。とつさに叩き落とした人物を見た。

(誰………いつ………)

私の兵？違う、かといつて今川でもなさそう。自分に負けず劣らずの奇妙な格好。肩の半分を隠す綺麗な長い髪を一つまとめて、木刀を握りしめている。チラツとこちらを見て、また敵に振り返った。一瞬だったのでハッキリとは顔が見えない。

「………ん？」

今度はこちらを凝視してきた。見ると、相手の顔も自分に負けず劣らず綺麗な顔をしていた。一瞬見惚れてしまうほどに。

(女の娘、かしら)

「な、なによ？」

「も、もしかして………え、えっと、名前は？」

声で判断すると、男だ。しかも、ありえないことにこの状況で名前を聞いてきた。

「は？」

そんなの決まってるじゃないと強く言つて、すうー、はあーと息を吸い

「尾張の大名、織田信奈よ！」

と言ひ捨てた。

SIDE：五月雨 晴也

(マジかよ、このちっこいのが織田信長、じやなくて織田信奈!?)

秀吉さんが言ってたことは聞き間違いじやなかったのか。容姿は煤で頬やおでこが若干黒いが、一目で分かる、美少女だった。服装はゲームでよく見かける、織田信長の若きファクションにそっくりだった。

(あいつとやったゲームがこんなところで役立つとは……)

「な、なんだこいつ!」

「新手の織田兵だ!」

「たった一人だぞ!先にやってしまえ!」

痺れを切らした今川の足軽達からが斬りかかってきた。

それを木刀で上手く受け流しつつ、

「おまえは隠れてろよ!」

と織田信奈に言い放った。

「なっ!?!お、おまえじゃないわよ!」

……ああもうめんどくせえ、速攻で片付けてやる。

俺は突かれた槍を掴み、逆にこちらに引き寄せ木刀で側頭部をぶつ叩いた。

もう、剣道の試合のようにしつかりと当てれば勝ちなんて簡単なもんじゃない。

やらなきや死ぬ。

(……かと言つて殺したくねえな)

ていうか殺せない。絶体人殺しなんてなりたくない。

それなりの手心を加えて、相手を倒していく。木刀より重い、刀を振るっているのだ。隙は充分過ぎるほどあった。鎧によって当てる所は制限されてしまうが、『現代の宮本武蔵』とまで言われた晴也の実力は伊達ではなかった。ヤケになった武将が、五月雨を真つ二つにしようと大きく刀を振りかぶる。晴也は姿勢を低くし、左手は前へ、木刀を持つている右手を矢を引くように後ろへ引く。ギリギリのタイミングで、後ろへ引いた腕を相手の顔面に突き出す。相手はなにか起きたのかも分からず、ぶつ飛ばされた。突きを繰り出すスピードが、まさに閃光と言われたことにより付けられた、その名を、『一閃』。

晴也のお箱芸である。突かれた相手はぐおおお!? 悲鳴じみた声を出しながら、顔を押し倒れこんでいる。

「大丈夫だ。顔が変形するほどじゃねえよ」

残りの足輕は、敵わないとみて逃げたした。

「ご主君、戦はお味方の大勝利です！ご無事でしたか！」

騎馬隊を率いて、馬に乗った鎧武者が駆けてきた。ん、なんか……

(胸が………おいおいこいつも女かよ……)

「私は大丈夫！このまま今川を追い出すのよ！」

はっ！と、鎧武者が駆けて行った。

「んで……」

「ん？」

「あんたは、なにこのわたしをおまえ呼ばわりしてんのよ！」

ガンツ！顔面めがけてわらじばきの足の裏が飛んできた。

「いつてえ！なにすんだよ!？」

「私のことも知らないの？あんた何者よ！」

「俺は……ツ!？」

種子島の銃口を俺の口に突っ込もうとしていた。銃口を掴んで上を向かせる。

「なにすんだよ!？」

「いいから、さっさと答えなさい！」

「俺は、五月雨晴也だ！」

「変な名前ね。……ハルでいいわ！」

（こいつ……勝手にあだ名つけやがって……助けた奴を蹴飛ばすし、なんなんだよ!）
「あんた、妙にちんちくりんな服着てるし、剣術はデタラメなほど強いし、どう考えても並の人間じゃないから、本当はサルにしようかと思っただけ……」

滅茶苦茶な奴だなあ。

「ま、顔だけいいからサルはやめとくわ」

「そうか? んじや、俺はおまえのことサルって呼んでやるよ」

「はあ!? 意味わかんないわよ!」

「いやだつて、サルって小さいし、その格好のほうがサルだろ」

「はあ!? 次言ったら、ここで打ち首よ!」

「そうか、サルは嫌だか。だつたらなんの動物がいい?」

「だから! 私は織田信奈! ノ・ブ・ナ!」

これが彼らにとつて始めての夫婦? 喧嘩になることは、誰も知らない。

第二話 織田家の騒がしい面々

「ええ〜！君があのだ柴田勝家なの!？」

「ああ、そうだと云っている」

（俺の歴史知識からすると、無精髭のジジイかと思った。）

今、晴也は織田軍の尾張帰還について行っている状態だ。どうやら先ほどの騎馬隊を率いた鎧武者は、この柴田勝家だったらしい。

「ふ〜ん……」

「な、なんだ？」

「いや、思ったよりかわいいじゃないかと思って」

まあ、俺の考えてた人物像と比べてだが。

「な、なななななんだと!？」

「いや、そんなに動揺すんなよ……」

勝家の顔が赤面したと思ったら、今度はなぜか胸を隠し、刀を抜いたって……っておい
!?

「こゝ、この無礼者!」

「はい!?ちよつと!?落ち着けよ!」

こちらにも木刀を構えたが、

「六、やめなさい。一応そいつは、命の恩人なんだから。」

と信奈が言うのと、勝家は渋々刀を納めた。

(なんなんだかなあ……)

尾張に着くと町民が意外にも、信奈に信頼を寄せていたことがわかった。

「おお、信奈さまのお帰りだぎや」

「今回も今川も追い払ってくれたのねえ」

「ありがたや、ありがたや」

意外に人気なのか、と晴也は呟いた。

尾張の本城、清洲城。織田信長……ではなく、織田信奈の本拠地だ。

今、俺はそこに居る。織田の重臣たちは、晴也を見てヒソヒソと話をしている。

「で?ハル、あんた織田に仕官したいわけ?」

信奈が切り出したことにより、場が静まる。

「ああ、ぜひ仕官させてくれ」

「……どうしようかしらね」

と、いじわるそうに信奈はニヤケながら言った。

（くっ！あいつ、俺がさる呼ばわりしたことまだ気にしてんのかよ）

「こいつ得体のしれないやつですよ！もしかしたら今川の間諜かも！」

勝家め、余計なことを……

「んじゃ六、ハルと勝負しなさいよ」

『えっ!?!』

二人が同時に声を上げる。

「それはいい提案ですね。六十点」

点数をつけている女性は丹波長秀。あだ名は万千代。しかし、なぜ点数をつけてるん

だろうか……?」

「しかし、それでは結果が見えているかと」

「そうですよ！こんなやつ、けちよんけちよんですよ！」

皆、圧倒的に勝家が勝つと予想している。まあ、普通に考えれば『鬼柴田』と呼ばれる勝家が、まだ若僧と言える晴也に負ける筈がないのである。

「よし、いいぜ！ だったらこの勝負、俺が勝ったら仕官させろよ！」

ということでは始まった、木刀を使つての模擬戦。城を壊されない様に、そ 外で行われることとなった。

皆、結果は見えてると思つていよう。勝家は『鬼柴田』と言われるほど、しかもひとたび槍を取らせれば敵う者がいないと言われるほどの剛将だ。

「まあ槍じゃないが、おまえ程度なら十分だろ」

「この野郎……」

晴也は女を痛めつける主義はないが、時と場合によると考えている。

信奈はおもしろそうに笑顔だ。勝家も余裕たつぷり言つたところ。絶対に吠え面かかしてやろう……

「それでは……始めっ!」

長秀の合図でスタート。

「うおおおおおッ!!」

いきなりの突撃。勝家の上段切りを受け止めたが……

(うおっ!? 重え!)

女とは思えないほど、劍撃が重い。

「ほら、どうした!」

「この野郎……おつらあ!」

上手く弾いて、今度はこちらの番だ。晴也は鋭く勝家の喉元に突きを放っていく。

「くっ!? あぶなっ!」

晴也の予想以上の突きのスピードに、驚きながらも全て叩き落す。

「意外と……やるな!」

「そつちも、男のくせに、なっ!」

思った以上の接戦に、見ていた織田兵たちが驚愕する。

「なっ!?! あの勝家さまと同等!?!」

「なかなかやるだぎや、あの二枚目!」

全くの予想外である手に汗を握る攻防に、ギャラリーである兵士たちは騒ぎ始めた。

「ほら、よそ見するなっ! 死ぬぞ!」

勝家の重い劍撃を受け流しつつ、

「おまえこそ、そんなでけえもんぶら下げてるからトロくて当たらねえんだよ!」

「なっ!?!」

勝家の動きが、一瞬鈍った。隙ありだ！と晴也はお箱芸『一閃』を繰り出した。常人では見えないほど早い突きが勝家に向かう。勝家はなんとかそれを受け止める。だが、圧倒的なスピードや重みに耐えられない木刀が折れてしまった。
(やべっ！止まれねえ！)

寸前で止めるはずが、スピードに乗りすぎてしまい、止まらない。このままじゃ勝家の顔面に……………。

「おおおおおっ！」

俺は無理矢理体を捻り、突きは勝家の頬を掠めた。

「おっしっ！……………つと、うあつ！」

しかしバランスを崩して、転んでしまった。最悪なことに、勝家も押し倒してしまった。

「つてて……………わりい勝家……………」

「ツ!!!」

どうした。そんな赤くなって。しかし、左手が妙に柔らかい。なんだろう、と思ってるけど信奈に頭を蹴られた。

「いつて!?! なにしやがる！」

「あ、あんたが、勝家の胸揉むからでしょ！」

「……………え？ は？」

「勝負には勝ったけど、男としての勝負には負けたわね」

「おい、どういう意味だっ！」

こうして、とりあえずだが晴也は信奈の草履取りになった。

え？ 足軽？ 無理無理。キレた信奈相手になんとかこじつけた結果が草履取りだ。

「晴也、珍しい服を着ている」

今、俺の住家に案内してもらっている。案内してくれるこいつは前田利家。あだ名を犬千代。

「ああ、学生服か？俺の世界じゃ普通だぜ」

「……………南蛮の人？」

「いや、未来の日本から来た」

「……………ほらふき？」

「違うっ！くそ、やっぱ信じろってほうが無理か？」

信奈、勝家、長秀さんの三人に、このことを言ってもまともに取り合ってもらえなかつ

た。まあ当たり前なのだが。

「……到着した」

犬千代が指さした先には、雑然とした長屋が広がっていた。

家と家の間には垣根などなく、かわりにモミジのような草を這わせた生け垣があらゆるこちらを覆い尽くしていた。

「こ、これが武家の住むところか？」

「こは、うこぎ長屋。下級武士が暮らしている」

「犬千代は？ 勝家は？」

「犬千代はこの隣。勝家は家老だから、立派やお屋敷を構えている」

「ふーん。ああ、食事はどうすんの？」

「……これ」

犬千代は、生け垣に茂っている葉っぱを「べりっ」とちぎってザルに集めはじめた。

「これは『うこぎ』の葉っぱ。お湯でゆでるとおいしい」

「自家の生け垣を食うのか、隣丸見えじゃないか」

「……？……犬千代は平気」

ああ、隣はこいつだったな、と晴也はうなづいた。無愛想だけど、親切なやつなのだろうか。

「よろしくな、犬千代。いっしょに頑張ろうぜ」

「……うん」

「だけどさあ、その虎の被り物は？」

「……秘密」

「そ、そうか」

なぜか、無性に聞いてはならない気がする。ていうか聞くと困るような気がするのは何故だろうか。

「おうおう。威勢がよい若者じやの。ねねを嫁にやりたいくらいじゃ」

枯れきった感じの好々爺が、話しかけてきた。ていうかさりげなく、無断で家に入らないで欲しい。

「……ねね？」

ねねって確か、秀吉さんの妻だったはず。秀吉さんが死んでしまった今、ねねはどうなるのだろうか。

「あの、そのねねって子は？」

一応歴史上では秀吉さんの妻、ということに興味があった。爺さんは「ねね」と細々しい声を上げた。

「（い）（い）におりますぞ、爺さまー」

そして……ねね？ が全速力で爺さんの膝元に駆け寄ってきた。

「この子がワシの孫娘のねねじゃ。八つだが、なかなかおりこうさんじゃぞ、おうおう」
「ねねにごさる！ 晴也どの！ どうぞよろしゅう！」

両手をばんざいしながら歓声を上げた。数えて八つ〓満七歳というが、この時代の子供は現代人と比べると小柄なせいだろうか、見た目にはほぼ幼稚園児だった。まあ、後何年か経ったら美少女の仲間入りだろう。確実に。

「ああ、よろしく……っていうかなんで俺の名を？」

「晴也どの、長屋中で評判ですぞ！」

「……どういふ感じの評判？」

「ええつと、信澄さまに負けないほどの美男子で、それに剣術が出鱈目な強さで、」

「……うん」

「……柴田勝家様を『陵辱』したと！」

「ガハツ！」

思わず口から吐血しそうになった。

「おまつ!? 意味わかって言っているのか!？」

「ねねはもう八つですぞ！ わかっておりまする！」

……こんな純水な笑顔を見せる子が、陵辱なんて言葉を知ってるはずがねえ。てかい

くらなんでも尾ひれ付き過ぎだろうが。後でこの変な噂を止めなければ。

なんて、わいわいやっているうちに、こっそりと犬千代が耳打ちをしてきた。

「……晴也」

「ああ、わかっている」

部屋の天井裏から気配を感じる。しつかりと木刀を握り、いつでも返り討ちにできるのだが、なにもして来ない。

「……ちよつと、行つてくる」

「……犬千代も」

「いや、いい。もしもの時のため、ねねたちを頼む」

「……わかった」

晴也の実力は、犬千代も勝家との模擬戦を見たので十分わかっている。晴也はさつと部屋を出て、山沿いに走った。そして、人気の無いところに出る。

「おい、そろそろ出てこいよー」

「さすが」

木の上に、鎖帷子と忍者服で全身真っ黒の忍びが腕を組んで立っていた。

「拙者の名は、蜂須賀五右衛門でござる。木下氏にかわりに、ご主君におちゆかえするといたちゆ」

口調は忍びらしかったが、最後はかみかみだった。

「や、失敬。拙者、長台詞が苦手ゆえ」

「秀吉さ……じゃなくて、藤吉郎さんの娘かなにかか?」

「相方にござる。足軽の木下氏が幹となり、忍びの拙者はその陰に控える宿り木となつて力を合わかちえ、ともに出世をはたちよう、そういう約束でござった」

「……三十文字ぐらいが限界?」

「う、うるさい。ご主君、名をなんと申す?」

「五月雨晴也だけど」

「では拙者、ただいまより郎党『川並衆』を率いて五月雨氏にお仕えいたす」

しばらく晴也は頭を抱えて悩んだが、この時代は味方は多い方がいい……という結論に至った。

「いいけど、俺は金なんか家にある数文しかねえ。給料は出ないぜ」

「すでに、五月雨氏は織田家の一員。あそこは給料の支払いがいい」

「まあ、まだ草履取りだな。要は俺が出世すればいいんだろ?」

そうすれば、五右衛門たちは晴也直属の正式な部隊として働ける、ということだろう。

「さようでござる」

「よし、わかった。待ってる、大出世してやるからな」

第三話 美濃の蝮

……ということ、舌足らずの忍者・蜂須賀五右衛門が仲間になった。

(あと、川並衆つつたつたっけか？そいつらも協力してくれんのか)

案外頼りになるのかもしれない。

あのチビ忍者、結構手練れっぽかったし。

その後家に帰ると、犬千代が俺の家に居座っていた。早速、さつき入れたうこぎの葉を水を入れた鍋でぐつぐつと煮ていた。

「……晴也、無事？」

犬千代はそれ程心配していないようで、こちらに顔を向けずに箸を動かしていた。

「ああ、まあな。『妖怪・舌足らず』に会ったただけだ」

「？」

「まあ、いいや。食おうぜ！」

茶碗にうこぎ汁をよそってもらい、「いただきます」と言ってから、おそるおそる口に

運んだ。

「お、思ったよりうまいな！」

「……よかった」

うごぎの葉っぱの吸い物なんて初めて食ったが、外見はともかく味は中々のものだった。食ってみるものだ。

次の日

晴也は着替えをしていた。

いつもの制服姿ではなく、今日はきちっとした武士姿。いつまでも制服を着ている訳にはいかないだろう。剣道で袴は着慣れているので、同じ要領で直ぐ着ることができた。最後に、木刀を腰に刺して帯刀完了。家から出ると、犬千代が待っていた。

「おし、行くか！」

「……似合ってる」

「そ、そうか」

正直恥ずかしかったが、犬千代がそう言ってくれたので、少し安心することが出来た。

「……犬千代、参った」

犬千代が、いつものカブキ姿の登場。

「あれ？ 犬千代、ハルは？」

「……町娘たちに捕まってる」

「……は？」

「だああああ！ わりいわりい、遅れた！」

「おそ……い？」

ハルはいつもの奇妙極まりない格好ではなく、きちんとした武士姿で現れた。正直、和風な長い黒髪にその武士姿はよく似合っていた。

「いやあ、こんなの初めて着たぜ」

見れば六も、万千代さえも彼の姿に魅入っていた。

「なんだよ、やつぱ似合ってないか？」

「ぜ、全然似合ってないわよッ！ サルがお化粧したようなものね！」

「くつ、さすがにそこまで言われるとへこむ」

晴也は本気で落ち込み始めた。「こいつ、本当に自分のことに関しては何となく並の理解力ね」と、信奈は思った。

「で、なぜ俺たちを集めたんだ？」

「俺たち、つていうか。あんたはただ私の草履取りだから呼んだだけけど」

「はいはい、どうせ俺は草履取りですよ」

それで、と晴也のことは無視して信奈は話を続けた、

「美濃の虻が、会見を申し込んできたわ」

「えっ!? 斎藤道三か!」

斎藤道三、と名を聞いた瞬間、晴也は飛び跳ねるように声を荒げた。

「しかし、美濃とは宿敵の間柄……」

長秀は織田家の参謀役だ。信奈の父親、織田信秀は何度も美濃に迫った。結局、勝つことが出来なかった……その虻の恐ろしさは、長秀もよく分かっているのだろう。

「それでもないわよ」

「な、なにゆえですか？」

勝家は疑問そうに質問する。彼女は戦術・戦略的なことに関してはほとんど話をしない。織田家きつての武芸家だが、頭脳労働は苦手なのだ。

「私が組むとしたら、やっぱり虻しかいないと思ってたもの」

そう、蝮である斎藤道三は、恐らくそうとう頭がキレル人物だ。京の油商人から立身出世した百戦錬磨の強者。しかし、そこまで至るのに彼自身の生涯を費やしてしまうほどの時間がかかってしまった。もはや蝮自身、このままでは天下は取れないと感じているはず。だからこそ、私との会見を申し込んできた。

「しかし、斎藤道三との会見かあ。確か正徳寺だったよな」

不意に晴也がそう呟いた。は？なにいつてんの？まだ、会見場所なんて……と信奈が話していた最中、小姓の一人が駆け込んできた。

「申し上げます。只今美濃より、会見場所を伝えに参りました」

「ど、どこ？」

正徳寺でございます、と小姓が告げると、勝家たちがざわつき始めた。

「これは驚きです。七十点」

「嘘だろっ!? なんでわかったんだ!？」

「ハル、なんでわかったの?」

「言ったと思うけど、俺は未来の日本から来たんだ。歴史……特に戦国時代好きの俺にとつては、知っていて当然だぜ」

信奈は一瞬、一瞬だが、ビビッと惹かれた……ような気がした。思わず、晴也のことをじつと凝視してしまっていた。ドクンと、鼓動が大きく鳴った気がした。

正徳寺。

ここは美濃と尾張の国境にある門前町（寺院勢力が治める町）で、両国の軍勢が立ち入れない非武装中立地帯である。

この対面の儀の結果いかんで、信奈が道三な娘を義理の妹として迎えることができないかどうかが決まる。しかし、正徳寺の門前に到着したばかりの信奈は、相変わらずのうつけ姿だった。馬上で憂鬱そうなしかめっ面。ふらふらと揺られながら、髪は茶筌まげ。縁日の夜店でも回ろうかという感じの湯帷子を着こみ、暑いのか片袖は外していた。肩には種子島を担ぎ、腰には縄をまいてひょうたんをたくさんぶらさげ、越しには珍品・トラの毛皮。そして「お前、時代まちがってるぞ」と晴也が突っ込みたくなることに、袖を外した側の白い胸元には、どうみても『見せブラ』にしか見えない布切れが。（おいおい……まさか、あの姿で会見はないだろうな）

相手は『蝮』と恐れられる百戦錬磨の狒々ジジイである。下手なうつけっぷりを見せれば、道三は失望して娘を渡すことを渋るどころか、この場で暗殺するかもしれないかつ

た。

「……姫さま、道三どのはすでに本堂へと到着されているとの由」

小姓らしき小柄な少女が、信奈に拝礼しながら報告した。

「リアルカ。わたしも着替えなくちゃね」

それを持つておきなさい、と信奈は脱いだわらじを晴也に投げつけて来た。

キャッチすると、はいはいと言いながら俺は頭を搔いた。

正徳寺の本堂。

両軍の兵士たちは、衝突を避けるためにこの本堂からはずつと遠ざかっている。本堂から丸見えになつてゐる広い庭には、晴也と犬千代。本堂内には信奈の護衛として勝家が付いていた。ちなみに長秀は尾張で留守番。さらに、おそらくは勝家と同じ任務を道三から言い渡されているのであろう、美濃の小姓らしき女の子侍が一人。

利発そうな美少女だが、妙におでこが広い。その侍とは軽く目を合わせただけで、会話はしていない。すでに本堂では、美濃の虻・齋藤道三が自分の席に腰を下ろしていた。老いてはいるがその体にたるみだところがなく、がっちりとしていた。歴戦の戦国大名らしく、堂々の貫禄、と言ったところだろう。

しかし、道三は重大な会見だというのに軽い着流し服装で現れて扇子をぱちぱちと開いたり閉じたりしていた。信奈が小汚い格好で来るのなら、自分だつて正装するのはバカらしい、とでも思っているのだろうか。そのまま小一時間が過ぎた。

「信奈とやら、遅いほう」

道三が退屈そうに大あくびをした、その時だった。

「美濃の蝮！待たせたわね！」

突然、信奈が本堂へ姿を現した。道三は、口にしていたお茶を噴いた。

晴也も、サルになったように口をぽかんと開いて、視線は信奈に釘付けとなった。

とにかく今までの奇妙なうつけ姿ではなかった。輝く茶色いがかつた長髪をはらりと下ろし、最高級の京友禅の着物を華やかに着こなしたその姿は、まさしく尾張大名・織田家の姫君でだった。相変わらず化粧はしていないが、陶磁器のように白くて綺麗な素肌があらわになっていた。

(……つとと、危ない危ない。信奈なんかに見惚れてしまった。しかし、これがいわゆる“ツンデレ”と言うやつなのか?)

いまいち意味がわからない晴也だったが、信奈が綺麗だつてことはわかっていた。

「な、なぜ、い、いやしかし、なんとという美少女っ!?!」

信奈はすすつと優雅な足取りで本堂の中を進み、道三の正面へと腰を下ろした。

「わたしが織田上総介信奈よ！」

「あ、う、うむ。ワシが斎藤道三じや……」

「デアルカ！と、信奈が笑顔で言った。道三は年甲斐も無く、恥ずかしいように照れていた。おい、さつきまでの余裕はどこにいったんだよおっさん、と突っ込こむのをなんとか我慢した。」

「美濃の蝮に会うんだもの。いつもの格好じやまずいでしょ」

「……なるほどな」

途端に道三の顔が真面目になった、信奈の美しさではなく、『器』に感服したのだろう。（この二人、道三は信奈を気遣い、信奈は道三に敬意を評したつてところか。流石だな）

では早速、と道三は口を開いた。

「ずいぶんと、鉄砲を揃えてるようじやな」

「これからは鉄砲の時代よ」

「南蛮のオモチャと揶揄する者も多いぞ？」

「そういう大口を叩いた、自称豪傑野郎をうちの足軽が一発で倒すのよ」

ほお、と興味深そうに道三は話を聞いた。

「尾張の兵は日本一弱いと言われているけど、鉄砲さえあればたちまち日本最強だわ」

（……この考え方がいづれ、戦国最強と呼ばれた武田騎馬隊を打ち砕くのか）

「ワシと同盟を結んだ後、狙うは今川の駿河かの？」

「いいえ、美濃よ」

「なっ!?!」

さつきの道三の小姓が、思わず口を漏らした。当たり前である。同盟を組み、その同盟国の領地を取ろうとしているのだから。

「ほう、なにゆえ美濃にこだわる？」

「蝮が美濃を取ったと同じよ。美濃を制する者こそが、天下を制するからよ！ 美濃こそが日本の中心だもの！ 西は京の都に連なり、東は肥沃な関東の平野へとつながっている。この美濃に難攻不落の山城を築いて兵を養い、天下をうかがう。そして秋が来れば一気に戦乱の世を平定し、日本を平和な国にする。商人が自由に商いに精をだせる、そんな豊かな国にする。それがあんたの野望だったのでしょうか？」

（すげえ、ここまで日本全体を見た、地の利を考えているとは）

「……全てお見通し、というわけじゃない」

「美濃は……わたしが貰うわよっ！」

途端に道三の小姓が腰の刀に手をかける。勝家もそれに対抗しようと刀に手をかけた。しかし、道三は小姓を手で制した。

「……渡すと思てか？」

「蝮の夢を引き継ぐと言つても？」

なに、と道三が顔をしかめる。

「日本を狂わせた古い制度を、全部壊して、南蛮にも対抗できる新しい国に生まれ変わらせて見せる！……私が見ているのは……『世界』よ！」

「ぬははは！そなたの目は、既に海を飛び越えておつたのか！」

だが、と道三は言葉を区切った。

「それでは誰も付いて来ぬぞ。うつけと呼ばれているのがその証拠じゃ」

確かに、信奈の考えは新し過ぎる。古い考えを持った常人では、理解出来ないだろう。うつけは信奈ではなく、信奈をうつけ呼ばわりする古い考えに固執した者たちだと言うのに。

「……それでも進むだけよ」

その時の信奈は、どこか寂しく見えた。

「立ち阻む者たちをなぎ倒して……か」

道三は腰を上げた。表情は、決意に満ちていた。

「……手始めが美濃なら、受けて立つぞ」

「望むところだわ」

美濃との戦争。

そう、なる筈だった。

「おい、待てよっ！」

彼晴也が声を張り上げるまでは……

第四話 会見の結末

「おい、待てよっ！」

本堂内に晴也の声が響き渡る。視線が晴也に釘付けとなっていた。

「この頑固ジジイ！俺はあんたの考えがわかる。もう美濃の将来は見えているはずだっ！いつまでもひねくれてるんじゃねえよっ！」

無礼ね、黙ってなさいハル、と信奈が一喝する。

「座興じゃ、言わせてみようぞ」と、道三。

「デタラメを抜かせば、小僧であろうが我が小姓・十兵衛がそなたを斬るぞ」

バカつ黙ってなさいよ！蝮に詫びなさいよ！と信奈がさらにしかりつけてくるが、晴也はここで「道三をあつと言わせないと、このひねくれた二人は気が合っているはずなのにお互いの意地と知恵を張り合うためにむざむざ戦を始めてしまう」と予感していた。

だから、絶対に黙らなかつた。

「道三、あんたはこの後、家臣にこう言うはずだ『ワシの子供たちは、尾張の大うつけの門前に馬をつなぐことになる』ってな！」

つまり、道三自身が「自分の息子は信奈に敗れて美濃を奪われる」と予言することになる、という意味だ。

「な、なんと?」

道三の表情が、驚きに凍りついていた。その通りだったのだ。自分が美濃を譲らずとも、いずれ自分亡き後に信奈は実力で美濃を併呑するだろう、と道三は確信していたのだ。それゆえに、信奈を相手に一戦を交え、最後の花を咲かせたいと戦国大名の血をたぎらせてかけていたのだった。

「息子じゃ信奈に勝てないってこと、わかっているはずだ! あんた自身が!」

そう、道三は既に信奈の才能を見破っている。頭では理解出来ているはずだ。

「……、」

沈黙。

晴也の声は止み、本堂に静寂が通った。言うべきことは、言った。ゲームのように選択をまちがえて殺されるかもしれない。だが、じつとしているの無理だったのだ。密かに五右衛門が手に煙玉を用意して、天井裏で会見の様子を見守っていた。

主・五月雨晴也が殺されるのを助けようと思っていたからだ。やがて道三は口を開いた。

「小僧……どのようにして、我が心を読んだ?」

「……知っているから」

なに、と道三の顔がこわばる。

「俺は未来からやって来た。……あんたは、信奈に美濃を譲ることになる。そうしなければ、これまでの人生が無駄になっちまうからな、そうだろ？」

そして、と晴也は大きく息を吸い、魂、気合、願いのようなものを込めて言った。

「斎藤道三、あんたの夢を継げるのは、この織田信奈だけだつ！」

「小僧……」

道三は静かに肩を下ろした。

「ワシの……負けじゃ」

「えっ？ 蝮？」

「まさか、未来から来た男とはのお。これほどの者がおるとは、老いぼれのワシが勝てる相手ではないわい」

「ああ、今から四百五十年ほど先だ。そこじゃ斎藤道三は、この時代の有名人だよ」

「そうか……ワシは後世に名を残せたのじゃな」

道三は会見中とは違い、どこか気持ち晴れたような表情だった。

「この蝮、貴様のおかげで最後の最後に素直になることができたわ！」

はっはっはっはと道三は大きな笑い声を立てた。

「信奈ちゃんのためじゃ。この場で、『譲り状』をしたためよう。ワシはそなたに……いや、我が娘に美濃一國を譲つて、隠居するぞい」

「……デアルカ」

晴也の目には、相変わらず不機嫌そうに唇を曲げている信奈の瞳が一瞬うるんだように見えた。知恵者・斎藤道三ならば、自分の志を語つても理解してもらえると信じていたのだろう。だがまさか、これほど無防備な好意を寄せられるとは思つてなかつたはずだ。

「これより信奈ちゃんは、我が娘じゃ。娘に國を譲るのは、父として当然のこと」

「ほんとうに、いいの?」

「蝮と憎まれたワシの國盗りにも、かような意義があつたのじゃと思わせてくれ」

道三は筆を取り出すと、『美濃譲り状』をさらさらと達筆な筆跡で書いてみせた。

「いづれ我が一人娘をそなたの妹として尾張へ送るぞい。ワシは國元の家臣団と

話をつけ、信奈ちゃん的美濃入りを準備することになるわ」

全人生を賭して奪い取つた美濃を、斎藤道三は笑ながらあつさりと宿敵織田の娘・信奈に譲つた。そして信奈は口をへの字に曲げたままで、礼も言わずに譲り状を受け取ると、読みもせず懐にしまい込んだ。道三の人生は無駄ではない。まだ先は長いが、信奈の天下統一への大きな一歩となるだろう。

(やっぱり道三は凄え。信奈の新しい考えをしつかり理解してやがる)

これだ。これこそ戦国時代つてもんなんだよな。やばい、泣ける。感動しやすい俺にとって、この場面はキツイ。だが突然

「ツ!? 犬千代! 危ねえ!」

とつさに晴也は犬千代を突き飛ばした。十字形の手裏剣が、さつきまで犬千代がいたところを通り過ぎる。

(くっ、油断してたか……)

周りの林、茂みから、よく時代劇で見かける『忍者』が出てきた。全身黒装束。手には手裏剣。

「貴様ら、どこの乱破じゃ!」

道三の呼びかけに応じない。無言で、本堂を取り囲む。信奈の前に勝家が、道三の前には護衛の小姓が、互いに自らの主を守る為、抜刀した。犬千代も槍を構える。この本堂の周りには、公平をきすため、織田・斎藤両軍の兵士たちを少し離れたところへ配置している。

(……にしても、ここまで気づかないとは……会見前から潜んでいたのか?)

……どちらにしても折角の感動シーンを邪魔しやがって。晴也は忍者たちの前に出る。そして、腰の木刀を静かに抜いた。

「来やがれヘタレ忍者ども。その手裏剣が一発でも俺に当たったら褒めてやるよ」

覆面で表情はわからないが、おそらく晴也の言葉が気に障ったのだろう。合計八人の忍者が全員晴也めがけて手裏剣を投げ出した。普通に見たら、絶体絶命。

しかし、彼の場合は違った。全ての手裏剣を、もはや常人では認識出来ないほど早く木刀を振り、全て叩き落とした。

「なっ!？」

さすがの忍者たちも呆然とする。

(……………それほどの手練れじゃないな)

「よし、行くぞ犬千代!」

「……………御意」

二人が忍者へ突撃。晴也は思いつきり飛んで、飛び膝蹴りを近くの忍者へくらわした。ぶっ飛んだ忍者は、口から泡を噴いて気絶した。犬千代も負けじと、その小さな体に似合わぬ豪快な槍捌きで忍者を翻弄する。

「俺の感動の涙を返せえええええ!」

映画のラストシーンを飛ばされた恨みのような気持ちで、忍者部隊を蹴散らす。間合いが詰まったら、忍者でも晴也の敵ではなかった。突きや、はらわたをえぐる胴で、相手を気絶させる。

「ひっ!? 化けも「成仏せいやああああ!」」

忍者も驚くほどの形相で襲いかかった晴也に、次第に恐怖を感じ始めた。

「くっ!」

忍者部隊の一人が、ふわりと後ろへ跳んで距離を取ろうとした。

しかし

「逃がすか、バカ!」

「ひっ!?!」

足を掴んで、ジャイアントスウィング。その光景を道三や信奈たちが啞然として見ていた。残りの忍者たちも、あつという間に犬千代と協力して倒した。

「あれ、全員気絶させたのか?」

俺は人を殺せないが、犬千代が敵を討ち取らなかつたのは意外だった。

「……拷問」

ああ、確かにどこの忍びだかまだわかってないもんな。拷問して口を割らせるのか。

「……それに、あの様子じゃ全員殺しちゃうんじゃないかと」

「……俺が?」

「……うん」

「……そ、そんなに怖かった?」

「……かなり」

まじかよ。俺そんな怖かったのか。

「はっはっはっ！その剣術、坊主は本当に奇妙なやつじゃ」

「そうかな。いやあ、道三のおっさんに褒められるなんて光栄だ」

「……褒められてる？」

犬千代が首を傾げた。ていうかこいつも、思った以上の腕だな。

その後、会見はつつがなく終わった。しかし、本当にそう簡単に美濃譲ってもらえるのだろうか。道三は譲ると言っても、他の家臣たちは間違いなく抵抗すると思うが。

（まあ、それは道三のおっさんが上手くやるのかな）

それにしても、今でも感じるあの圧倒的迫力。あの真正銘本物の斎藤道三。俺が考えてた人物像が、この戦国に来て唯一合ってるかも。そしてちよつと間違いが多いが天下万民のために乱世の平定を夢見ている織田信奈。帰る方法がわからない以上、しばらくは信奈に協力してやってもいいかな、と思った。門前で待っていると、新開発されたばかりの当世具足を身につけた信奈が現れた。道三が開発した軽量の鎧で、鉄砲の弾で

も防御できるのだという。

「一応褒めてあげるわ。あんたのおかげよ」

と、信奈が照れ臭そうに言った。

「そう言うのはちゃんと顔見て言えよな」

「う、う、う、うるさい！ほら、さっさとわらじ！」

「ああ、はいはい」

晴也は自分の懐の内側からわらじを取り出した。

「信奈さまが足を冷やすまいと、温めておきました」

「これこそが織田信長が木下藤吉郎を氣にしている『温めておきました』だ。いやあ、これやってみたかったんだよなあ。しかし、ペっ、と信奈が忌々しげにつばをはいた。

「き……き……氣持ちわるっ！」

「……は？」

信奈はどういうわけか激怒しているらしかった。まっ白い顔を、赤くしたり青くしたり黄色くしたり。

「あんた、わたしの足の裏の匂いを嗅ぎたくてわらじをそんな懐に入れていたんでしょっ！もしかして、わらじで興奮する男なのっ？うわっそんな高度な変態初めて見たっ！やっぱりこいつの前でわたしの美しい素顔を見せたのは生涯の不覚だったわっ

「まあでもここで手討ちにしてしまえばいいわけだし、是非に及ばずねっ！」

「……なんて自意識過剰なんだろうか」

「はあ？なによ、『痔意識』って」

「おまえ、漢字おかしいから！それちよつとヤバイから！」

「あ、あんたが言ったんでしょっ!？」

抜刀。

信奈が初対面の時よりハイテンションなのは、うつけをやめたからか、道三との会見を大成功させて胸がおどっているのか。犬千代、さらに密かに正徳寺の瓦で見守っている五右衛門は、二人の掛け合いを無言で観察していた。

「ハル！貴様、姫さまになんて言う口を聞くんだ！」

と、勝家。

「あーはいはい」

晴也はあくびをしながら信奈の斬撃を避けていた。

「この、この！なんで当たらないのよっ！」

「そりゃあ、避けてるからだろ」

ブンブンと刀を振るう信奈相手に、笑って避け続ける晴也。次第に信奈自身も笑っていた。

「姫さまのこんなおもしろい顔、生まれて初めて見た」

「う、確かに……」

と、二人の漫才（というか晴也が一方的にあしらっている）を物珍しそうに見ていた。

「や〜い！うつけ信奈〜」

「この！やっぱあんたはサルだああああ！」

〜駿河〜

「義元さま〜。どうやら忍び部隊が逆に返り討ちにされたようです〜」

「あら、そう」

今川義元はたいして関心を示さず、ポンポンと鞆を蹴っていた。

「伊賀の忍びを結構な額で雇ったと言うのに、ダメですわね。全く、あなたが半蔵を使わないのがいけないのですわ」

「あわわわ。半蔵は色々忙しいのです」

そして美濃では……

「血迷ったか！親父どの！絶対に、絶対に認めんぞ！かくなるうえは……！」
斎藤義龍が決意に燃えていた。

第五話 勝家の誤解

尾張、清洲城。

「いえーい！皆、飲め飲めえ！」

「ちよ、ちよつと！勝家、飲み過ぎだぞ！」

会見が成功し、今日は成功を記念して祝杯の真つ最中。

というか、勝家が一方的に場の空気を上がらせている。

あの美濃が手に入るんだ！今夜は祝杯だあ！という勝家に半ば強引に連れてこられた俺たち。

長秀さん、俺、犬千代、あとノリがいい足軽がいくらか。

「おい、ハル！おまえのお陰で美濃が手に入るんだぞお。もつと喜べ〜！」

「まだ手に入るって決まったわけじゃ……」

確かに道三は「信奈ちゃんのためじゃ、喜んで譲るぞい！」なんてこと言っていたが。

（確かに、うつけと呼ばれる信奈と同盟とするばかりか、美濃を譲るなんて言ってるんだもん。そりゃいくらかの道三でもそれなりの反発は受けるだろう）

「よおし、乾杯しよう！」

「勝家、もう十一回目だつっーのに……」

はあくため息をつく晴也。

「こたびは姫さまと道三どののいざこざを丸く収めたとか、ありがとうございます。晴也どの」

「いえ、そんなに対したことはしてないですよ」

「よかった。あなたは顔だけではないようですね。九十点」と長秀さんがなかなかの点数をくれた。

「こいつう、生意気にもわたしの姫さまと仲良くしやがつてえ〜」

「どこが仲良いんだよ!?!しかもわたしのつて……」

どうやら勝家は、信奈の小さい頃からのファンらしい。

「信奈さまはあ……渡さないぞお〜!」

「大丈夫だ、安心しろ。あんなの誰も盗らねえよ」

「うるさい!ほら、酒つげ酒っ!」

「うわっ、酒臭えから近寄るなっ!」

さらにどうやら勝家はお酒に弱い上に、酔うとからんでくる。

酔った足軽が、「ささ、どうぞ」と勝家のどぶろくを注ぎまくり、そのたびに勝家は一気飲み。

「プハッ！ぐまい！」

よくいるよなあ、酒弱いくせにガブガブ飲む大人つて。

「犬千代く、まだ帰らねえの？」

「……ういろう……おいしい」

犬千代は相当ういろうが好きらしい。

さつきから、ういろうがうまいということしか喋らない。

(確かに、いつもうこぎばつかじや飽きるよな。)

「そういえば、信奈は？」

「只今道三どの宛の便りを書いております」

「そうですね、あいつもだいぶ気が張ってましたからね。早く休めばいいのに」

「なんだあ、さてはおまえ！姫さまのところに夜這いに行くつもりだなあ!？」

「頼まれても行かねえよ！」

「この変態めく」と勝家が腕を引っ張って来た。

「わっ！バカっ！」

だらんとした態勢で座っていたので、簡単に引っ張られてしまった。

勝家も思った以上に簡単に引っ張られたので、俺の腕を引っ張ったまま倒れてしまった。

「ああ、痛つてえなあ」

むにゆ。

あれ？

むにゆ。

……………。

むにゆむにゆ。

このやけに柔らかい触り心地は……………!?

「わああああーごめん、勝家ー」

引つ張られたのと逆の方の腕の手で、見事に勝家の胸を鷲掴みにしていた。

慌てて手を離そうと思ったら、なぜか勝家は俺の手掴んで、

「信奈さまあ。この無駄にでかい胸で良ければいくらでも」と言つて離してくれない。

そこへ

ガラツ。

俺の一番近くの襖が開いた。

「あら？あんなたちまだい……………」

信奈だった。

「……………」

ばつと視線を落とすと、どう見ても晴也が勝家を押し倒しているようにしか見えない光景がそこに。

「……………」

「…………あつ、えつとね!?これはアレだよ!不可抗力!模擬戦の時とおな「死ねえええ!」この変態乳揉みサルうううう!」

最近信奈は、ハルではなくサルとも呼ぶようになってしまった。

しかし、今はそれどころではない。

今までくらった信奈の蹴りの中で、一番痛い一撃が俺の頭にクリティカルヒットしたのだ。

「いだい!めつき痛い!」

ゴロゴロと頭を押さえて畳を転がりまわる。

「だから!これは不可抗力なんだ!」

「し、信じられない……一度ならず二度までも勝家のおっぱいを……」

「違う違う!別に勝家のおっ……胸になんて興味ねえ!」

「なんだとおく!あたしの胸に興味がねえだとお!」

勝家が酔つ払いながら抱きついてきた。

「お、おい！」

「……小さくても……平気？」

更に犬千代までもが頬を赤らめて抱きついてきた。

おまえもついに酔ったのか。

「おまえら！ 酔い過ぎだっつーの！」

「……犬千代は……ヒック……酔って……ヒック……なんか……ヒック……ない」

「まだ未成年だろう！」というツツコミも、この戦国時代じゃ通用しない。

「もう！ 疲れたから寝るわ！」

よくわからないが信奈が怒って出て行ってしまった。

「そうですね、そろそろわたしも……」

「な、長秀さん！ こいつらどうするんですかっ!？」

ドロドロに酔った足軽と、自分にひつついてくる犬千代と勝家を指差す。

「……そうですね。犬千代どのら足軽は特に問題はないでしょうが、勝家どのは信勝さまの家老。こんなところで寝て風邪をひかれては困りますね」

こ、この人、さりげなく犬千代たちはどうでもいいと言ってるな。

「既に布団は敷いてあります。申し訳ございませんが、連れて行ってあげてもらえませ

んか？わたしはこの後片付けをしますから」

「わ、わかりました……」

酔い潰れた勝家はとても歩けるような状態ではないので、仕方なく肩を貸している。歩く度に、勝家の巨大メロンが当たるので、緊張してしまった。

「よ、よし、着いた！ほら、布団に入れ」

「う、うーん」

「はあく。仕方ねえなあ」

勝家を横にして、布団をかけてやった。

「よし、んじや俺も帰ろうか……」

思えば、この時が今日一番油断していたのかもしれない。

帰ろうと思って勝家から部屋を離れようと思ったら、腕が掴まれた。

「う、う、う、」

「うっ？」

「うわあああ！あたしの胸を揉むなああああああ！」

「今頃かよっ!？」

勝家の全力右ストレートが晴也の溝を貫いた。

「ガハッ!？」

口からさつき食ったういろいろやらかなにやらが出ようとしていた。

「こ、根性だあああ……」

なんとか吐くのを踏みとどまったが、晴也は痛みで倒れてしまった。

「か、勝家。計った……な？」

「うう、すやすや」

ね、寝相悪過ぎだろ……と晴也は遠のいていく意識の中でつぶやいた。

く明け方

「うう……頭いたあ」

勝家は重たい頭をボリボリとかいて目覚めた。

「んん?」

手になにかが当たった。

枕にしては……大き過ぎる……。

おそるおそる勝家が振り向く。

そこには……

「わ、わあああああああ〜!?!」

すやすやと寝ている晴也がいた。

「な、なにがっ!?!どうなつて!?!」

自分が昨夜、祝杯をやつて飲みまくつたことは覚えているが。

それ以外がどうしても思い出せない。

(ま、ままままままままさか!?!)

「あ、あたしとこいつがああああああ!?!」

「な、なんだっ!?!敵!?!あ、おはよう勝家」

勝家の悲鳴じみた叫び声に、晴也は飛び起きた。

「つて……おはようじゃねえ! 昨日はなにしゃがるんだ!」

「き、昨日!?!まさか……あたしから……!?!」

「おまえのせいだぞっ! ほら、ここ……」

と言つておそらく青アザになっているであろう、脇腹の部分を見せようかと思つたら。

「……ん？」

「だつたらなぜわたしと一緒に寝てたんだあああああ!？」

「そ、それはおまえが！」

「そうか……わかつたぞ！おまえ、さてはあたしのところへ夜這いにきて、それでうつかり寝てしまったんだろう！ははははははは！バカなやつだつ！」

(……織田家には、まともなやつがないのか……う。)

尾張では楽市・楽座と呼ばれる、人々が自由に行き来できる市場が作られ、かつてない賑わいと繁栄をもたらしていた。

そこを歩く二人、晴也と勝家。

「うー、まだ気持ち悪い……」

「おいおい、無理するなよ」

二日酔いで、口を抑えて辛そうにしている勝家の背中をさすってやった。

「ひゃあ!？」

勝家は以外にも子猫のようなかわいい声を漏らした。

晴也は思わぬ反応に目をパチクリさせる。

「か、勝家っ!？」

「うう……あたしは男に触られるのが苦手なんだよお」

ぷつ、と晴也は笑いを溢した。

「あははははっ! 勝家、おまえ以外と純情なんだな?」

「なっ!?! なんだとっ!?!」

「いや、悪くねえよ。結構かわいいところあるじゃん」

すると勝家は頬を赤らめて、「くっ、サル野郎のくせに……」と恥ずかしいそうにして

いる。やがて人通りの多いところへ通ると、

「あら、水も滴るいい男とはこのことだわ」

「かっこいいわねえ」

「あれが二枚目ってやつかしら」

周りの女たちは晴也に釘付けとなっていた。

「な、なあ。おまえ、女に疎いって言われないか?」

「? ああ、この時代に来る前は、結構言われてたな」

「なぜ言われてるか、わかるか?」

「いや、知らん」

「どうやったらかこまで疎くなれるんだよ、と感心した。

「まあ……女とは……昔……色々……あつたからな……」

「……悲しいこと？」

「いや、なんでもない」と少し晴也は悲しそうな顔をした。

それは晴也自身にとつて相当のトラウマだったから。

「それにしても、いいのか？ わざわざ俺の家にこなくてもいいぞ」

「いや、場所くらいは把握しておこうかと思つてな」

「あ、いや、別に、おまえに興味なんてないからな」と勝家が付け足した。

「……二人とも」

「「うあつ!?!」」

「つて、犬千代？」

「……うん」

昨日はどうとう最後にデロデロとなつてしまった、犬千代がそこにいた。

「犬千代、おまえずつとついて来てたのか？」

「……うん……二人とも……逢い引き？」

「な、な、ななななななななななないだろっ!」

勝家は明らかに動揺し、なぜか晴也に脇腹をガツガツと小突いてくる。

「や、やめろ。そこは痛い……」

「……ん……あそこ」

犬千代が指を指したところに人だかりが出来ていた。

「ん……あれは……」

「おらあ！ちよつと来いやあ！」

「きやあ！や、やめてください！」

三人の男が、一人の若い娘を取り囲んでいた。

「俺たちは泣く子も黙る、織田勘十郎信勝さまの足軽だぞお！」

「そうだぎや！俺たちに抵抗するなぎや！」

もう一人の、体が大きなやつが娘の細い腕を掴んでいた。

「さあ？もう仕事なぞ出来なくしてやるぞお？」

「い、痛い！離してください！」

それでも男は止めず、力強く、娘の腕を掴んでいた。

周りの人たちは、助けても得はないと誰もが見て見ぬ振りをしていた。

「さあ？俺たちに奉仕してもらおうかあ？」

「ああ、ならしてやるよ」

瞬間、晴也が男の腕を娘から剥がし、捻った。

「い、いででででででつ!?!」

「き、金太つ!?!」

ぷつ、と思わず笑いが込み上げ、男を離してしまった。

「あはははははつ!金太つて!おもしろい名前だなあ!」

「こ、このガキつ!顔の形がちよつと良いからつて、調子がつてんじやねえぞ!」

殴りかかつてきた二人を、同時に回し蹴りで迎え撃った。

「あぎやあつ!?!」

「そげぶつ!?!」

二人の男は一気に金太?と呼ばれた男の後ろにまでぶつ飛ぶ。

「なつ!?!おまえ、何者だつ!?!」

晴也は大きく息を吸つて、

「俺こそ!織田信奈の草履取り!……から出世して今は足輕の五月雨晴也だあ!どうだ

!凄いだろつ!」

場の空気が、一瞬静まる。

「くはははははつ!あのうつけ姫の足輕かつ!どうりで貴様は「おい、おまえらつ!」

ひいつ!?か、か、勝家さまっ!」

「これは、どういうことだ?」

「も、もももも元々はこの娘が俺たちに無礼な態度を取ったから!」

勝家が話に加わってから、バカ三人は顔は青ざめていた。

「取ったのか?」

「と、取っていません!」

そうか、と言って三人のバカを……めんどろだ『三バカ』と名付けよう。

その三バカを勝家が睨んだ。

ひいつ!?!とまるで鬼を見た様なブルブルと震えている。

「い、いや、本当にこの娘がっ!」

「だったら最初から見ていたやつらに聞いて見るか?」

晴也は近くの野次馬たちを見渡して言った。

うっ!と三バカは顔を強張らせる。

「す、すいませんでしたあああ!」

「今日のところは見逃す……だがまたやつたら……」

「ひいつ!?!ず、ずみませんでしたあああ!」

まるでサルのようにもの凄い逃げ足の速さで走って行った。

「さうとう勝家が怖いんだろうな。」

「あ、あの！ありがとうございます！」

「ああ、気をつけろよ」

「次またちよつかいを出されたら、あたしを呼ぶがいい」

「おおおお！と周りから拍手喝采が起きた。」

「さ、さすが柴田さまだや！」

「あの御仁もなかなかのもんだで！」

く長屋く

「良かったな、犬千代。お礼にいろいろ貰って」

「……、」

「あー、機嫌直せよ」

「どうやら犬千代は、さっきの時に出番がなくて拗ねてしまったらしい。」

「んじや、今度ういろうを食べに行こう！俺の奢りで！」

「……それなら……いい」

犬千代に僅からながら、笑みが溢れた。

「あ、勝家。ここが俺の家……あれ？」

なぜか俺の家の周りに、乱暴そうな若侍たちが取り囲んでいた。

勝家は相当驚いていたようだった。

「誰だ、おまえら？」

「やあ、君が姉上の草履取り、ハル君かい？」

第六話 織田家、お家騒動

「やあ、君が姉上の草履取り、ハル君かい？」

「は？姉上？」

「な、なぜ信勝さまが？」

勝家が驚いたように言った。

「あのうつけの姉上が見ず知らずの浪人を拾ってくるとは珍しいのでね。ぼくも直接この目でハルとやらを拝んでみたくなかったのさ」

他の侍よりもずっと高級そうな着物を着ている。

その外見ですぐに、信奈の弟・信勝だな、と晴也にもわかった。

だが、ひねくれたように曲げている口元とどこか暗い目つきは、まっすぐな信奈には似ても似つかなかった。

「なるほど、おまえが信勝か」

「そうだよ。それにしても君、姉上には勿体無いくらいの美形だね。どうだい、ぼくの下に来ないか？」

「やだ」

「即答っ!?ぼくはあんなうつけの姉上とは違うぞっ!」

「知るか」

「な、なんて礼儀知らずだっ!」と信勝が嘆いた。

まわりの家臣たちも「この礼儀知らずが……」「さすがはうつけ姫が見込んだ事はあるようだな」「まったくだ、あんなうつけ姫が尾張の国主なんて……」

「おい、待てよ」

自分のことだけではなく、信奈や信奈についていく者たちをバカにしたような言い方は、文字通り頭に血が登るほどムカついた。

「だれがうつけだっ?」

「もちろん姉う……」

それ以上は言えなかった。晴也は強く、信勝を睨みつけていた。いつもの穏やかで、どこか遠くを見ているような眼とは違う。確実に、信勝を見ていた。眼の闇は深く、間違はなくこのまま睨まれていたら深い闇に飲み込まれるような、錯覚までした。

『殺気』? 『覇気』? 散々甘やかされて育った信勝は、今まで生きてきた中で一番の恐怖を感じた。

「あ……うう」

「……………」

「お、おいハル」

勝家等々声を掛けると、「ふんっ」と言つて、晴也はそつぽを向いた。

(た、助かつたあ……)

「おい、どうしたガキ。小便でも漏らしたか?」

「な、なにをつ?! 無礼だぞっ!」

顔を真つ赤にして、地団駄を踏んで怒り出した。実は本当に少々漏らしていた。

「こ、この無礼者めっ!」「斬り捨てるっ!」など信勝の取り巻きが刀の柄に手をかけたが、晴也の睨みによつてまるで蛇に睨まれたカエルのように、動けなくなつた。

「で? なぜ信奈をうつつけ呼ばわりする?」

「は、はははは! き、きみは何も知らないんだな、ハルくん。父上の葬儀の時に、姉上は袴もつけず、髪を茶筌まげに結つて太刀をわらで腰に巻いたうつけの格好で現れて、抹香をわしづかみにして父上の仏前にいきなり投げつけたんだぞ?」

そ、そうですね、ほんとの大うつけですよ、と信勝を取り巻く若侍たちが苦笑する。

「……それが、どうしたんだよ?」

晴也はわかつていた。

(たつた一人の父親の葬儀に強がりなんかするから、だから弟にまで「うつけ」なんて呼ばれるんだ)

結局、あいつのことを本当に理解してるやつなんていないのかもな。それだけじゃない、あいつの近くにいるのには、並大抵なやつじゃ務まんねえだろう。

「あ、姉上のあのうつけ姿を見てぼくはさすがに後悔したのさ。いくら父上の遺言だったとはいえ、あんな姉上に国を任せておけば尾張は滅びる。このぼくが家督を継ぐべきだったとね」

晴也の目には、信勝がただ取り巻きの家臣たちに担がれているだけのように見えた。信奈を悪く言う時の信勝は、苦しそうな顔をしていたからだ。仲の良い兄弟が、互いの家臣団の対立に巻き込まれて不仲になり、争いとなる。戦国ではよくあることだ。

「おまえは……尾張をどうしたいと思ってる？」

「ま……まずは、うつけの姉上から尾張を奪って……」

「その後は？」

「う、う、いろいろを宣伝して！全国区の食べ物に育ててみたい、かな」

「……それいい」と犬千代だけが後ろで喜んでいた。

「……ダメだな。なんにも考えてないやつが、家督とかなんとか言うんじゃねえよ」

「だ、だったら！」と信勝が名案を生み出したように言った。

「ぼ、ぼくが国主になった暁には、ええと、尾張中からかわいい子を集めて……」

「俺のバカ友達と気が合いそうだが、ダメだ」

「ち、違つた！今のは個人的な野望だ！ええと、ぼくが尾張をまとめた暁には、東の今川義元を討ち、北は齋藤道三を討ち、海道一帯を織田家の領地にしてみせる！」

「おまえ……まさかその両方を相手に戦い、勝てるとても？」

「で、できるとも……ぼ、ぼくにはできる！ぼくは何しろ、尾張一の猛将・柴田勝家がついでるんだからなっ」

「……仮にその両方を倒せたとして、その後どうする？」

「ええと……そ、その先は、考えてない……とりあえず美濃からも駿河からもかわいい女の子集めて」

「……まじでヨシと気が合いそうだな」

「お、おい。そのヨシと言うやつは、相当かっこいいんだらうな？」

「……ああ、まさに欲望丸だしの貴公子だな」

「ふ、ふん。ならいい」

ああ、ヨシ。おまえのサル顔を、久しぶりに拝みたいぜ……。

「とにかく、姉上は大うつけだ！だからぼくたちの母親も幼い頃から嫌って、相手にしなかつたんだっ！」

「なに？」

「姉上は幼い頃から、暴れてばかりで、礼儀作法もぜんぜん身につけられない。亡き父上だけが『吉、おまえは天才だ。誰になんと言われようとも、自分が信じることをやれ』なんて姉上を甘やかした。その結果これさっ！」

「……実の母親が、昔から信奈をうとんじていた……のか？」

「当然だろう？ 乱暴でわがままで、南蛮人なんかと親しくして、天下がどうだとか種子島がどうだとかわけのわからないことばかりしゃべっている姉上は、子供の頃からずっと母上にうとまれてたさ。その証拠に、今だって母上はぼくの居城に……」

本当にバカだなあ。なにやってるだよ、あいつ。

「こ、これでわかっただろう？ 織田家の家督を継ぐべきは、うつけの姉上ではなく、

このぼくのさ」

「……わかりました、信勝さま。あんたが本当に尾張を取りたいんなら、俺がとっておきのおまじないをかけてあげましょう」

「な、なに？」

「いきますよお！ まず！ 目を瞑って！」

「え、あ、うん」

「はい、舌を出してえ！ アツカンベーだっ！」

「え、べー」

目を瞑り、舌を出したその光景は、とても織田家の長男とは思えなかった。

「はい、仕上げっ！」

晴也は信勝の顎に、アッパーを喰らわした。

「ええええええっ!?!」

殴られた信勝は、鼻から血を流してふっ飛んだ。舌を噛むなんて、ああ怖ろしや。だが、それなりに手心を加えたので、あまり痛くはないはず……。

「い、痛いっ!?!な、殴ったのかっ!?!父にもぶたれたことないのになっ!?!」

やべえ、その台詞ものすごく懐かしい。元の時代に戻ってTSUTA○AでSF名作コーナーを漁りたい。

「違いますっ!これは、脳を刺激して、脳細胞を活性化!より良い発想が生まれるように、我が五月雨流の秘技なのです!」

「このお……打ち首……打ち首だあ!」

「と、言うわけです!」

「と、言うわけです！……じゃないわよっ！」

ガツーン！と信奈の蹴りを喰らわせられた。

こればかりはしょうがない。

俺のせいだ、避けるわけにはいかない。

「信勝さまはハルの首を、届けるようにと」

と、勝家。

「……デアルカ」

「拒めばまたまた謀反を起こすでしょう。常習犯ですから」

と、長秀さん。

「……デアルカ」

「晴也の首……落とす？」

と、犬千代。

「デアル……そんなわけじゃない！」

「それにしても、謀反か……厄介だ。織田家が真つ二つになっちまうなあ」

ガツーン！とまた今度は飛び蹴りを喰らった。

「誰のせいだと思ってるのよ！」

「もし……信勝さまが謀反を起こせば、あたしは信奈さまと戦うことに……嫌

だあああああ！ここは、ハルの首を！」

勝家が抜刀をしてハルに襲いかかった。

それをとっさに木刀で防ぐ。

「お、落ち着け勝家っ！」

「足軽が、殴ったとなれば即打ち首ですが、晴也どのが侍大将ならば、交渉の余地があるのでは？」

と、長秀さんが一つの希望を生み出してくれた。

「足軽から一気に侍大将に？」

長秀は首を縦に振った。

相当の手柄が必要ですが、と付け加えた。

「三千貫あるわ。一週間以内に最低でも八千石は買って来なさい！それ以下だったら、あんたは打ち首！」

犬千代、相場わかんないよ、と隣の犬千代に尋ねてみた。

今の清洲の相場だと、三千貫で四千石しか買えない、と犬千代が教えてくれた。

「相場の二倍の米を調達しろ、つてことか……了解」

「……できなかつたら打ち首よ」

「任せておけ」

長屋に戻ってきた晴也はさっそく考えていた作戦を実行するにした。

「おい、五右衛門！おまえの力が必要だ」

「……蜂須賀五右衛門、参上つかまつる」

鼻と口は相変わらずマスクで覆っているが、妖しげに赤く光る瞳で五右衛門とわかった。

「……驚いた」

「ぜんぜん驚いているようにみえないよ、犬千代」

「……誰？」

「俺とコンビ組んでる忍びの五右衛門だ」

よし、作戦を説明する。

まず元手の三千貫を六千貫に増やし、ノルマの八千石の米を買う。

そこで、最初に三千貫を使って清洲の商人から物産品を購入し、そしてそれを四千貫とか五千貫とか、とにかく買い値より高く売るんだ。増えた金でまた物産品を買って、また別の商人にさらに高値で売る。これを何度か繰り返し返せば、三千貫が六千貫だろう。で、予算が六千貫に達したら、清洲で米を買う、これで八千石のノルマ達成だ。

「……のるま？」

「……値切る？」

「まあいい、とにかく作戦を出す。五右衛門、忍びの情報網を駆使して、

尾張とその隣国の町の相場をかたっぱしから調べてくれ！そうすりやどこで何を
買つてどこで売ればいいか、あらかじめわかるだろ？品物を運ぶ仕事も、おまえの川並
集にやらせれば安全だ」

天才でござる、と五右衛門が手を打つてうなづいた。

「拙者、そのようなことに忍びを使うなど考えたこともござなぬ。さすがは木下氏がお
によーによと見込んだおによこ、ふふふ」

噛んだ、と犬千代が呟いた。ギロリと赤い瞳で犬千代をにらむ五右衛門。

「それでは、さつそく周辺諸国を調べて参る。なに、二日あれば十分」

九字を切り、煙幕を張る。五右衛門は再び、音もなく消えた。

「げほげほ。部屋の中で煙を張るなよ！」

「……畳、燃えてる」

「おおい、もつと焦ろう犬千代！火事だつ！消防車つ！」

「……わあわあ」

「か、稼ぎすぎたか……」

五右衛門は清洲、井ノ口、伊勢の港町・大津、それぞれの相場を細かく調べ上げて晴也に報告した。それぞれの町に、幸運なことに在庫が余っている品や、逆に在庫が尽きていて割高になっている品がいくつもあった。五右衛門の良くできた報告書を手にしながら、犬千代と二人で町へ出かけて余っている商品を買ひ、その商品を足りていない町へ運んで売る。商品の運搬にも五右衛門の川並衆が使えたので、輸送費も輸送時間も最小限で済んだ。これでどんどん元手が増え、気づいた時には、うこぎ長屋の晴也の部屋はもはや畳が見えないくらいの小判で溢れかえっていた。

元手が三千貫という巨額だったため、予想を越えるところもない金額を稼いでしまったのだ。

「確か、期限は今日の夕刻までのはずだ。よし、犬千代、五右衛門の手を借りて今すぐこの金を全部米に替えてきてくれ。時間がないから値切らなくてもいい」

「……わかった」

「よし、じゃあ俺は信奈のところ……ん？おまえらは昨日の……」

家の前には、昨日の信勝の取り巻き侍たちが俺の家を取り囲んでいた。

「……ふつ。我らがきてよかったようだ」

小判で部屋満帆になっている俺の家を見て言った。

「……どういうことだ？」

「なに貴様に侍大将になられると、困ると言うことだ」

しばらく晴也は頭を捻って考えると、「ああ、なるほど」と手を叩いて言った。

「俺を拉致るつもりか。明日ぐらいにはポイ捨てでもするんだろ？ 大変だねえ。無能な大将持つと」

「なにつー！」と侍たちの顔が強張る。

大将とは信勝のことだ。

こいつらは信勝の謀反の為、その謀反となる理由を欲しているのだろう。

「仮に俺がおまえらに連れ去られたら、信勝がいつまで経っても足軽一人の首も持ってこれないのか、と信奈を国主から追い出す為の、正当な謀反の理由が出来るだろう」

「ふん、貴様は思ったより頭が回るようだな。それならば黙って我らに付いて来るがいい。命は保証しよう」

「ハッ！ やだね。そんなこととして、仮に生き延びても、三千貫を無駄にしたって言うことになって、信勝に正当な謀反の理由を与えちまう」

「……ふん、ならいい。簡単なことだ。ここで貴様を斬り捨てればいいだけのこと。辻斬りに斬られた、ということにでもしといてやる」

「そうだな、簡単なことだ」と晴也は頭を掻いて言った。

「要するに、ここでおまえらを潰せばいいんだろ」

周りの侍たちが警戒して、刀の柄に手をかける。

この前の晴也の気迫を思い出してから、侍たちが後退り。

それを見た犬千代も、槍を手にする。

「……晴也」

「ああ、大丈夫だ。これは元々は俺が撒いた種だしな」

晴也は首をポキポキと鳴らした。

「よし、かかかってこいよ。おまえらなんて、速攻で……あれ？」

腰にかかっていた、いつもの木刀の感触がなかった。

チラリと小判まみれの自分の家を見る。

おそらく、小判で埋もれてしまったのだろう。

「まあ、いつかー」

「なっ!?素手で、私たちに勝てるんでも?」

「まあね」と手を鳴らした。

「こ、こいつ！斬り捨てるぞっ！」

すかさず侍たちが抜刀し、晴也の周りを囲む。

「俺って……木刀がないと……、」

そこから向かって少くも侍に向かつて少し溜息を交じり言った。

「あんまり手加減ができないだよね〜」

「……普通は逆」と犬千代が侍たちを哀れ見るような目で呟いた。

数秒後には、侍たちは地面に伏していた。

「さあて、信勝はおまえらが失敗したとわかれば強攻策に出るんだよな……」

「ヒッ!？」

既に腰を抜かした侍に向かつて言った。

ガツンと言う音とともに、晴也の頭突きにより最後の侍が倒れ、全滅した。

やがて思いついたように言った。

「よし……この作戦で行こう！」

「犬千代、筆と紙ある？」と聞いてみた。

犬千代は首を縦に振る。

「よし、今から俺の言うことをそのまま書き写してくれ」

「……？わかった」

「そして五右衛門、来てくれ」と晴也が言うと、どこからともなく、煙幕と共に現れた。

「五右衛門、金を米に換える時、道中で『五月雨晴也は織田信奈に打ち首にされた』という偽情報を流してくれ」

これにより、信勝の謀反する時間が稼げる筈だ。

「……？御意でござる」

「そして、五右衛門にはこれから書いてもらう書状をあるやつに届けて欲しい」

「あるやつとは？」

「……ああ、信勝の家老・柴田勝家だ」

第七話 織田家、お家騒動・完

「犬千代、できたか？」

「……一応」

犬千代は書状を書き終えると、それを晴也に渡した。一通り中身を確認する。筆跡は、多分バカな勝家にはわからないだろう。

「……まあ、まさか勝家でも文字が読めないなんてことは」

「……あ」

犬千代が思い出したように声を漏らす。

「ま、まじか……そこまでバカとは」

『天は二物を与えず』勝家は織田家屈指の剛将だが、同じく織田家屈指のバカでもある。「五右衛門……なんとか勝家に翻訳してくれないか？」

その黒装束で現れると、「くせ者っ！」とか言つて斬りかかれそうだが。

「やってみるでござる」

「悪いな、五右衛門」

「まかせるでござる、これが成功すれば五月雨氏のちゆっせはまちえがないでござる」

「……かわいい」と、犬千代。

五右衛門の嘸み嘸み言語は犬千代に好評なようだ。どっちもちっこいし、歳も近いだろう。二人で「か、かわいくなどないでござえるっ!」「……また嘸んだ、かわいい」と言い争っているのを見ると、なんか心休まる。

……もしこいつらが現代の秋葉に居るロリコンオタク共に会ったら相当ヤバイだろうな。ある意味、こいつらは現代よりここが安全かも。やがて、五右衛門は犬千代との争いを諦めたのか、こっちに向き直った。

「しかし、こんな書状で柴田氏が動くのでござやるか?」

「ああ、あいつは信奈大好きだからな。この書状を読めば、な」

犬千代が袖を引つ張ってきた。

「なに?」というと、夕焼け色に染まった太陽を指さした。

「あああああつ!時間がねえつ!作戦開始だあああー!」

晴也は急いで信奈の下に。犬千代は米を買う為。五右衛門は川並衆を呼び、更に書状を勝家に届ける為。それぞれの役割を果たす為、動きだした。

「このアホっ！バカっ！たわけ者〜！」

キツク、キツク、正座している晴也の顔面へとキツクの嵐。土下座して、ちよつと待つてもらおうなんて考えが甘かった。土下座する暇さえ与えられないとは。

「お、落ち着け信奈！」

「あんたが悪いんでしょつ、あんたがつ！なんで手ぶらつ？どうして米が一粒も無いのよ？」

預けたお金はつ？三千貫はつ？」

「増やしてたんだよつ！」

「どうやってよ？」

しばらくうーんと考えたが、やはりバラすとこの方法がもう使えなくなる恐れがあるため、教えるのはやめた。

「……企業秘密で」

「はあ？またサル語？あんた顔は中々なのにもつたないわね、本当にサルって呼ぶわよ」

「サルじゃねえし。未来語と言って欲しいな」

「ふん。増やしたなら、今頃ここにたくさんの米俵が積まれているはずよね？」

「多すぎて俺一人じゃ運びきれなかった！今、犬千代な運んでいる！頼むから俺を信じて待ってくれ！」

「……仕方ないわね。そこまで言うなら、刻限まで待つてあげてもいいわ」

晴也の必死の説得に信奈は渋々引き下がり、地球儀をくるくると回し始めた……と
思ったが。

「……遅いわね、待ちくたびれたわ」

「早っ！まだ座つて五秒だよっ!？」

「だって待つての退屈だもの。ハル、斬つてもいいかしら？」

「はあく。んじや、おしゃべりして時間を潰そうぜ？」

「そうね、だったら……」とまた地球儀を回した。

「この地球儀で、あなたの知力を測定してあげるわ」

「ははっ、おもしれえなあ」

「ふふっ、あなたにこの地球儀の意味がわかるかしら？」

（わかるものにも、知らない奴はいないと思うが……）

「世界つて平らじゃないのよ、この地球儀のように球体なのよ！」

「ぶっ……くく、あははははははは！」

「な、なによ？」

「いやだつて、なにを言い出すかと思えば、そんなあたりまえのこと……くくつ」

ヤバイ、すごいおもしろい。それは幼稚園児に言う言葉であつて、現役バリバリの高校生に言う言葉ではない。ここは、命を賭けた戦国時代。皆知らなくて当たり前なのが、こつとも真正面で真剣に言われると、笑みがこぼれてしまった。

「じゃ、じゃあどこが日本なのかわかるつ？」

「ああ、当たり前だろ。この小さい島国だ。ちなみに、おまえたちが南蛮人つて呼んでる連中は、ずっとずっと西にあるこのヨーロッパから来ている」

晴也は、突き出された地球儀を転がしながら、日本と南蛮の場所（オランダ・スペイン・ポルトガル）を示してみせた。

（すごい……今まで誰に説明しても信じてくれなかったのに……）

信奈は感動？にも似た気持ちで湧いてきた。

こいつなら……

「今はデウスの教えを伝える宣教師しかやつてこないけど、いつかきつと大船団で日本まで攻めてくると思うの。だから一日も早く乱れた天下を治めて、南蛮の奴らとも対等につきあえる国を作らなくちゃダメなのよ！ねえ、わたしの言つてること、おかしい？うつけだと思つう？」

信奈は今まで貯めていた気持ちを吐き出すように、晴也に言つた。

（こいつ……本当に天才なんだな。今の日本にこいつと対等に話せるやつなんかいないのかもしれないねえ……）

それでも、と晴也は思った。こいつはこの世界に必要なだ。第六天魔王として名を馳せた織田信長ではなく、こんな織田信奈が創る日本こそ意味があるのだろう。俺はガシツと信奈の肩を掴んだ。信奈は一瞬ビクツツとして、頬を赤らめた。

「な、なによつ?」

「信奈……おまえはうつけなんかじゃない。いま이지만、時代を超えた天才なんだよ。おまえを笑う連中がバカなんだ。だから……『誰に何と言われようとも、自分が信じる道を進め、信奈』」

「っ!」

一瞬、一瞬だけど、大好きだった父の顔が浮かんだ。言葉が似てただけ、似てただけ、と信奈は頭を振った。

「ん?どうした、顔が赤いぞ。熱でもあるんじゃないか?」

「な、なんでもないわよつ!」

と肩に置いてある晴也の手を振り払った。

「おい、ほんとに大丈夫か?おまえに熱でも出されたら……」

と、お互いの鼻息がかかるほど顔を近づけた。なぜだか信奈の顔が見る見る赤くなっ

ていく。

「な、なななな!?なにすんのよっ!」

最高潮に顔を真っ赤にさせた信奈渾身の頭突きが飛んできた。

「お、おまえ……人がせつかく心配してやったのに」

「し、知らないわよ……」

信奈はそっぽを向いて自分の頬に触れ、

(なんで……なんで、こんなやつに赤くなってるのよ……み、身分違いもいいところだわ)

と自身に言い聞かせていた。

不意に晴也が口を開く。

「……さて、そろそろだな」

城のどこからか、時を告げる太鼓の音がドンと鳴り響いてきた。それと同時に、どこからか叫び声。

「うおおおおお!」

「り、六っ!」

なぜか刀を抜いている勝家、そしてもう片方の腕で強引に信勝を引っ張っていた。

「信奈さまああああ!今すぐお助けしますううう!」

ブンブンと力任せに刀を振っている勝家を見て、信奈はまだ状況を把握できていな

い。

「や、やめないか勝家！ぼくが危ないだろ!？」

「知るかあああああ！」と晴也に強引に投げつけた。

「おっと」と投げられた信勝をキャッチする晴也。そして、その間に一気に距離を詰め、振りかかった。

「姫さまに手を出そうなんて、一万年と二千年早いわあああああ！」

「か、勝家！誤解だ、落ち着け！」

それでも振り落とされる刀に両手で抱きかかえている信勝がいる状態では、正直木刀のガードは間に合わない。死ぬ、死ぬ！これは、すごいピンチだっ！いつそ信勝を盾に……いや、それはっ！晴也は信勝を守るように背を向けた。

カツンッ！

勝家の手から、刀が落ちていた。不意に縁側の方向から飛んできた手裏剣の束に、刀を飛ばされていたのだ。

「な……なに？」

晴也は手裏剣が投げられた方向を見る。犬千代だった。おそらく投げたのは五右衛門だろう。

「……勝家……誤解」

「……えっ？」

「ああ、まったく」と溜息をつきながら、晴也は立ち上がった。

「勝家、あの書状は俺が頼んで犬千代に書いてもらったものだ」

「な、な、なにい!？」

時を少し遡る。

「な、なんじゃこりああああおあ!?」

勝家は手にとった書状をビリビリに破いた。

「あのエロ変態乳揉みハルがああああああ!」

その光景を見て、五右衛門が呆然としている。本当なら直ぐに「くせ者っ！」と斬り捨てるところだが、信奈さまの使いなら別だ。文字が読めない勝家が、五右衛門に翻訳されたところまでは良かった。「噛みすぎだろ、なに言ってるかわからん」という突っ込みをしたのも良かった。しかし、書状の内容はこうだ。

『助けて六。わたしには六が必要な。六が信勝を連れてきてくれないと、エロハルに胸を触られるわ、助けて、六。早く、信勝を連れてきて』

と極めて単純。女性のことをあまり知らない晴也なので、この程度の文しか思いつかなかった。しかし、バカな勝家は見事に騙されてしまった。

巷で『信奈、五月雨晴也打ち首』の報が回り、ならば三千貫を無駄にした信奈の責任問題としようと思勝の家臣たちが話し合っている中、勝家は信勝の居城に。

「なっ!?!勝家どのっ!?!」

「どけどけええええええ!こちとら姫さまの貞操がかかつとるんじゃああああ!」
と大暴れ。

三秒で信勝とその取り巻きたちを制圧し、引つ捕らえていた。鬼の形相の勝家に、斬りかかろうとするような度胸の持ち主は、残念なことに信勝の取り巻きの家臣たちの中には一人もいなかった。

(信奈さま!待っていてください!今すぐこの六が、助けに参ります!)

そしてこの状況。

「う、嘘だろ……あたし、騙されたのか……」

「いやあ、まあ即席の策にしてはよくかかってくれたよ」

「こ、このーと歯ぎしりする勝家。」

「……晴也……お米、買ってきた」

「おおお、犬千代く！助かったぜ！ありがとうっ！」

「いくつ買ったの？」と信奈が聞いた。

「……七万五千俵」

「二石が二俵と半分だから……三万石っ？嘘っ？ほんとにつ？命じた量の四倍近いじや

ないっ!？」

「……晴也の、お手柄」

「へへっ、まあな」

「よ、良かったあ〜」と信奈は肩を下ろした。

そしてクルッとこつちを振り向き、

「喜びなさい、ハル！この手柄に免じて、打ち首は取り消すわっ！」

「ふうう〜首の皮一枚繋がったか……」

晴也、信奈、犬千代が安堵の表情を浮かべる。だが、まだ重要な問題が残っていた。

〜次の日〜

清洲城。

勝家は、白装束で登城した。勝家の隣には、涙目になって震えている信勝。

織田家の重臣一同が、信勝と勝家の左右にずらりと居並び、「もはや信勝さまは助からないだろう」と早くも同情の視線を送っていた。

「信勝さまの不始末は、家老であるあたしの不始末。難しいことはわかりませんが、この

場は、あたしの首でどうかご容赦ください！」

すがすがしいほどの爽やかな声で、そう宣言した。信勝を捕らえた時から、死ぬ覚悟を決めていたのだろう。しかし、信奈は認めない。

「あんたがいなかったら、どうやって今川と戦うのよ？却下」

「では信勝さまを除名なさると……」

と、長秀が提案する。

「……信勝は、切腹」

「ええっ!?そんな死に方やだです！姉上え！」

今回は本気で反省しているのだろう。泣きじやくりながら命乞いをしていた。

「そう……なら、わたしが斬るわ」

小姓から太刀を受取った信奈が立ち上がり、信奈の正面へと降りてきた。

「待て信奈！自分の弟を殺すんじゃないやねえ！」

「身内の反乱ひとつ鎮められないで、天下なんて言えないでしょう？みんなもよく聞きなさい！今後、わたしに逆らった者はたとえ家族であろうとも殺すわ！」

それが天下のため、民のためよっ！」

すでにうつけの信奈の顔ではない。『第六天魔王』。不意にその言葉が頭に浮かんできた。こいつを魔王にしているのか？それで天下は取れるのか？それでこいつは満足なのか

?

……満足なわけが、ないっ！

「待てって言ってるんだろぅがつっ！」

晴也は信勝を庇うように、信奈の前に立つ。

「わたしに逆らうの!?!」

「ああ、逆らうぜ! おまえはこのまま進んだら、周りの人を斬って斬りまくる! 魔王人生一直線なんだよっ!」

ガシツツと信奈がもつ刀の刃を力強く握った。当然、手から血が滲み出る。

「身内だからと許していては、家臣に示しがつかないわっ!」

「バカっ! おまえは弟を殺したくないはずだっ! 俺はおまえを魔王にするわけにはいかない! ……! 楽しそうに地球儀をぐるぐる回していた時のおまえのままできてほしい!」

ぱちんっ。

信奈は刀を振り下ろすかわりに、空いてるほうの手で晴也の頬を叩いた。

「っ……」

「うるさい、うるさい! じゃあ、いったいどうしろっていうの!?!」

「今は天下を忘れろ! これは家族の問題だろうが! おまえ自身が素直になればいいんだよっ! おまえは信勝をどうしたいんだっ!?!」

「……殺したくないに決まってるじゃないっ！自分の弟を殺したがる女の子なんて、いるわけないっ！」

信奈の頬に、透き通った涙が一筋、流れ落ちていた。家臣たちの前で、涙を見せてしまった。これから家臣たちの前で魔王として振る舞おうと決意していたはずなのに。

「じゃあ……そう言えよ……」

晴也は握っていた刀を下ろした。手からは斬り傷ができ、ポタポタと血が落ちていた。

「わ、わ、わかったわよ！信勝を許すわ！」

信勝は「姉上え」とグシヤグシヤの泣き顔から、天使のような笑顔に変わった。

「これからは、姉上のため働きます！二度と謀反など起こしません！織田の名を捨て、分家の『津田』を名乗ります！ですから名前も『信澄』に改名します！」

「津田……信澄……デアルカ」

信奈は女の子らしい、ひどく無防備な笑顔を見せた。

「……ちよつと媚びすぎだが、お調子者の信勝らしいな、と晴也は思った。

「これで一件落着か……つてイテテ」

はあく、あんなに力強く掴まなきや良かった。

「……晴也、手当」

「ん、ああ、そうだな。頼む」

犬千代が心配そうに血だらけの手を覗き込む。

「ちよつと待て、犬千代。ここはあたしがやる。元はと言えば、謀反を止められなかったあたしの責任だ」

「……やだ」

ギュつと俺の袖を掴んでくる。

「や、やだとはなんだ！あたしがやるんだっ！」

と勝家は俺の腕を掴む。二人で晴也の取り合いとなる。とりあえず、二人とも半端なく力が強いため、引つ張られると結構辛い。

「ど、どつちでもいいから、早く手当……」

「待ちなさいよ！あんたたち、わたしが直々にやるわっ！」

と信奈も参戦。

流石に信奈相手には反抗しないだろう、と思つたが。

「姫さまにやらせるわけにはいきませんっ！汚れてしまいますっ！」

「……犬千代が……やる」

「な!?!あんたたち、さっさとハルを渡しなさいよっ！」

「とにかく早くしてくれよ……結構痛いんだから」

「まあまあ……」と長秀は面白そうに、四人のやり取りを見ていた。

く長屋く

とにかく、疲れた。結局、手は長秀さんが割って入って手当をしてくれた。手には布が巻きつけられている。包帯とかあったら便利なのになあ。

「あゝ、まじ疲れたゝ」

思わず口から出てしまった。

「そ、そうか」

「そうだ……じゃねえ！え、勝家!?なんでここにいんのっ!?!」

玄関の前で勝家ももじもじと立っていた。ウブな女子中学生が告白する時みたいな感じで。なんか、勝家らしくなかった。

「ど、どうした、おまえらしくもない」

「あ、ああ。いや、本当なら、信勝さまが謀反して、あたしと信奈さまが戦っていたかも

しれないからな……改めて礼を……あ、ありがとう」

「ああ、礼か。別にいいよ。大したことはしてない」

「そ、そんなことないっ！」勝家が怒鳴った。

「あたしは……おまえのように頭が良くない！……唯一頼りの剣術もおまえに劣る。これじゃあ……あたしがいる意味なんて……」

信勝の謀反を防げなかったことにより、勝家は自信を無くしていた。

「本来、謀反は信勝さまの家老だったあたしが止めるべきなのに……あたしはっ！」

「……勝家」

そつと勝家に近づき、頭を撫でた。

「なっ!？」

ビクツと勝家の体が震える。怯えている、という感じではなかった。

「あんまり無理するなよ、勝家」

「あ、あたしは無理なんて……」

「……おまえは『鬼柴田』なんて呼ばれてるが、おまえは鬼じゃねえよ、女だろ？」

勝家は頬を赤らめ、下を向いた。

「……おまえにしか出来ないことだってあるさ」

「あ……くう……」

勝家の心臓が、波打つように早くなる。

(は、初めてだ……あたしを女として見てくれた男は……)

「い、いつそ抱きついてしまおうか！ そうだ、そうしよう！」と、勝家は一人心中の中で葛藤を繰り広げていた。

そして意を決して抱きつこうとした時。

「……じー」

今度は玄関で犬千代が立ち尽くしていた。

「あ、よー、犬千代」

「……なにやってるの？」

「ああ、ちよつと勝家を慰め……て？」

勝家が口をパク。パクさせてなにかを言っている。

「ん？ どうした勝家？」

「あ……う」

なにやら勝家の様子がおかしい。

「おい勝 「うあああああああー！」

勝家は顔を真っ赤にして出て行った。

「……なに、あれ？」

「……さあ？」

第八話 揺れる感情

『人とは不便な生き物である。』

動物のように、人と人とは完全にお互いを理解し合うのは不可能なのだ。いや、自身すらも完全には理解できていないだろう。故に、自分と他者を比べてしまう。自分より劣っているのか、優っているのか。そして自分より地位の高い者には媚を売り、自分に利益がないと判断した者には一方的に拒絶する。他人よりもまず自分の損得が優先なのだ。要するに、自分の欲望を抑え切れない。

「なぜあいつにできて、俺にできない？」

「なんであの子ばかりなの？ どうしてわたしを見てくれないの？」

嫉妬は妬みに、妬みは恨みへと、変わっていく。なぜ人間にはこうも多くの悩みが生まれるのか？ それは至って簡単だ。自らが感情という最も理解不能な物に操られているのだから。感情があるために、悲しみ、恨み、怒る、苦しむ。しかし、その逆も叱り。感情があるから人は喜び、楽しみ、感動し、誰かを愛し、他者の思いに共感したいと思えるのだ。偉そうなことを言っても、言いたいことは一つだけ。

『人間、まだまだ捨てたもんじゃない』

翌朝、いつも通り木刀を振っていた晴也だったが、五右衛門がもたらした『道三の息子・斎藤義龍、謀反』という急報により事態が一転した。

「道三は美濃の本城である稲葉山城を追われ、わずかな手勢を率いて長良川へ押し寄せ、稲葉山城を攻めようとしている……ということか、五右衛門？」

さようでござると五右衛門が首を縦に振った。

「斎藤義龍は道三軍の十倍近い大軍で長良川へ出陣、父子の間で合戦がはじまったのでござるによ」

「もう、五右衛門がかんだ！」と笑う余裕はなかった。およそ十倍……おそらく美濃三人衆も義龍に付いたのだろう。やはりうつけと呼ばれる信奈に美濃を譲る、というのは無理があつたのか？

「道三は十倍の兵力差で野戦を……死ぬ気、だな」

「左様。道三は、潔く戦つて死ぬる覚悟でござる」

いくら道三でも兵力差が十倍あつては太刀打ちできない。籠城すれば、信奈は間違ひなく美濃に援軍を送る。そうすれば上洛準備を進めている今川義元が空き家同然の尾張を襲うのは確實だろう。

（さすがは美濃の虻、よく信奈の性格を理解してやがるな）

だが、それでも。

「……信奈に報告する」

「捨ておかれよ。知らぬ顔でおられよ。伝えれば尾張、いや織田家は滅びまぢゆるぞ」

「……確かに、ここは道三の気持ちを含んでやるのがいいかもしれない、だけど、このままじゃ俺は絶対に後悔する。大丈夫だ、織田家は滅ぼさせやしねえよ」

余りにも自信満々の笑顔を見せてくるので、五右衛門は引き下がるしかなかつた。

晴也は信奈の下に直行し、長良川で道三が息子の軍に囲まれて絶対絶命の死地に陥つ

ていることを包み隠さず報告した。

「なるほど……道三どのは死ぬおつもりかですか」

流星は織田家の参謀役、丹羽長秀。

直ぐに道三の意図を理解した。

「というか、ハル？なんでおまえがそんなこと知ってるんだよ？」

元信勝の家臣である勝家。

信勝は、今では信澄となつて織田の名を返上したため、勝家は晴れて信奈の家臣となった。

「まあ、俺の信用できる情報網からな。間違いないぞ」

「……五右衛門？」

（そうか、五右衛門とはもう面識あるもんな）

犬千代とは立場が同等程度だからか、織田家の中で一番交流が深いかも。犬千代の問いに、黙つてうなずく。家臣たちがぎわつく一方、信奈だけ黙つて下を向いていた。悲しんでいるのか、怒っているのか、その表情はわからなかった。不意に信奈は真剣な面立ちで顔を上げた。

「援軍は……出さないわ。そんなことしたら、虻に叱られる」

「……おまえは、それでいいのか？」

「なによ、不満？わたしが取り乱せば満足なの？」

援軍を出せない苛立ちにより、思わず棘のある言い方をしてしまう。

「いや、おまえがそうするならそれでいい」

そう、これは援軍を出すか、出さないか、どちらが正解とはとても言えない。これは信奈自身が決めることだ。前回では『信澄を斬る』という魔王人生の第一歩を踏ませなかった。これにより歴史に狂いが生じてしまうかもしれない。だが、あのまま斬つていたら間違いなく、信奈の心は壊れていただろう。

「そういうことだから、もうこの話はこれで終わりにしましょう」

これ以上俺がなにか言ったら信奈を傷つけるだけだ。今は黙つてうなづいてやることしかできなかつた。

またしても、事態は一転する。それは、道三の危機という連絡から数時間経った頃だった。

「浅井家当主、浅井長政と申します。美しいと評判の姫に会えて、光栄です」

この戦国時代で比較的大柄な分類に属する晴也と同程度に背が高く、女の子たちの目をひく色白の美少年であった。俺の知ってる歴史では、浅井長政とは同盟を結び盟友となる。しかし、朝倉を攻めた織田を裏切り、絶体絶命まで信長を追い詰める……はずだ。本来の歴史ならば、信長は美濃を奪つて京上洛の際に同盟を結ぶはず。まだ美濃を取っていないこの時期に会うのはおかしい。

(やはり、歴史がズレているのか?)

それにしても、長政からは『わたしは美形ですよ、貴公子ですよ』という雰囲気
が全身から出ているように見える。どうしても作られた雰囲気としてしか思えなかつたが。

「……わたしになんの用?」

信奈が不満そうに首を傾げて聞いた。

「信奈姫の苦しみを取り除いて差し上げたいと思ひまして」

「わたしの苦しみ?」

するとフツ、と長政が微笑んだ。

そして信奈の理解者である者の名を、そつと呟いた。

「……美濃の齋藤道三どの」

「……っ!」

一瞬、信奈は顔を強張らせた。酷く辛そうな表情だったが、直ぐにいつもの仏頂面に戻す。

「このままでは、数日の内に首となりましょう。しかし、織田は動けない」

「……それで？」と信奈は目を細めた。

「浅井と織田で美濃を攻めれば、一気に片が尽きます」

……なるほど、織田・浅井で北と南の挟み撃ちが可能となるのか。内国のゴタゴタで忙しい美濃は、ひとたまりもないはず。

「道三どのを救出することも叶いましょう」

「こいつ、わざわざ蒸し返すようなことを……と晴也は唇を噛んだ。

「さらに近江と美濃、尾張が一つとなれば、今川とて敵ではありません」

「……それって、同盟を持ちかけてるの？」

「はい、おいしい話でしょう？」

「おいし過ぎるわね……本当の目的はなに？」

察しがいい信奈は、なにか裏があると踏んだのだろう。確かにこちらとしては万々歳なのだが、浅井家のメリットは少ない。美濃譲り状という大義名分がある。仮に協力して美濃を落としても、それは織田の領地となるはず。

「ははははっ！これは失態。噂に聞くとは大違いですね……」

その噂はあらかたデタラメだからな、と晴也が小さくうなづいた。

「では、正直に申しませう。信奈どの、わたしはあなたを我が妻としてもらい受けに参りました」

「……え？」

男から求婚されるなど、生まれて初めての経験だった。思わず立ち上がった、変なポーズを取ったり、湯帷子の片袖を上げて今さら見せブラを隠そうとしたり。その姿はとても尾張の戦国大名とは思えなかった。

「けっけ、結婚ってことっ!？」

「はい。日本切つての美男美女の夫婦となりませう」

「そそそそんなこと、いいいきりなり言われても、ここここ困るのよっ!」

ちらりと晴也のほうに視線を送りながら、信奈が裏返った声で悲鳴をあげた。

「お、おい信奈？少し落ち着けて。他国の大名の前だぞ？」

うう、と信奈はまた顔を赤くした。

「共に天下を取りませうぞ、信奈どの」

「そそそそれって、わわわわたしに惚れたってことなの？」

すると長政がニヤリと笑った。明らかに、裏があるような笑み。

「いえ、政略結婚は世の習い。むしろ愛など邪魔になるだけでしょ」

その言葉が放たれた途端、波打つように静まり返った。信奈は唇を噛んで言った。

「わたしはっ！旦那さまは自分で選びたいの！自分が好きになった人と結婚する！それがわたしの夢よっ！」

「ほう……既に心に決めた方が？」

長政はいたって冷静に問いを投げかけた。口説き慣れているのか、余裕しやくしやくと言った感じだ。

「そ、それは……そんな人……」

チラリと、自分でも無意識の内に晴也のほうに目をかけた。急いで視線を逸らす。だが、不運なことに長政にそれを見られてしまった。

「ほう……その者ですか。確かに、顔は中々ですね」

当の本人の晴也は、うーんと頭を捻っていた。

『浅井長政がここで同盟を？結婚を？おいおいそんなオリ展開あるかよ、無茶苦茶な……』とぶつぶつ呟いていた。

(信長じゃなくて信奈になったから、こういう展開になったのか。それとも、俺が歴史を狂わせてしまってるんじゃないか？……俺ってこの時代のイレギュラー？でも、だったらなんでこの時代に来たんだ？ああもう、意味わからねー！)

「ち、違うっ！こいつはただの家来っ！」

その言葉と同時に晴也の頭に飛び蹴り。もうこの時代に來てから、一体どれくらい俺の脳細胞死んだんだろう。ごめんよ、マイ脳細胞。

「こ、こんなのと結婚なんて……全然ありえないんだからっ!」

そしてグリグリと俺の頭を踏みつけてくる。

「ああもうっ!俺を踏むなっ!あくまであつちは誘ってきてるだけだろっ?落ち着けての!」

「天下一の美少女が奪われようとしてるのよっ!?惜しくないのっ!?惜しいでしょっ!」

(誰だよ天下一の美少女って……)

「嫌なら断ればいいだろ」

「な、長政と結婚しちゃうわよ!」

「だから!なぜそれを俺に「かああああつ!」うわっ!」

「他国の大名の前で痴話喧嘩などみつともない、五点です」

珍しく長秀さんが怒り、俺は今まで一番低い一桁台の点数を出されてしまった。また場が静まりかえる。信奈はとりあえず、俺から離れた。

「ははははっ!これはおもわぬ伏兵ですね!」

しかし、と言葉を繋げる。

「あなたが結婚を断れば、道三どのは助かりません」

「なるほど、脅迫か？」

晴也は真剣な面立ちで、長政を睨みつけながら言った。

「君は中々頭が回るようだね、だがこれはあくまで提案だよ。拒否するも受け入れるも自由だ」

だが、と長政は得意げに話を続けた。

「道三亡き美濃と今川、さらに浅井を敵にすれば、織田は滅ぶ」

「くっ……」

信奈は悔しげに歯噛みをし、長政を睨みつけていた。場のピリピリとした空気を察して、晴也はとりあえずその場しのぎの言葉を吐いた。

「浅井長政。この件は織田家存亡に関わる。簡単に答えは出せないぞ」

「それは確かに………なれば、三日待ちましょう」

すると長政は長い髪をなびかせ、護衛の侍たちと共に城を出ていった。張り詰めた緊張感が嘘のように消えた。問題は山積みなのに。

「しかし、三日か。どうしたものか」

晴也は頭を最大限まで捻りまくって考える。長秀、犬千代も、また同じ。

「わ、わたしはあんなキザなやつと姫さまが結婚なんて、絶対反対だつ！」

唯一勝家だけが声を張り上げる。それは俺や犬千代たちも同じだ。

結婚する相手に『好きです』『愛してます』も言えないやつなんて、信奈には相応しくないだろう。

しかし……

「……………」

信奈はなにを考えているのか、黙って外を見ていた。

すると

「只今、美濃より明智光秀さまがつ！」

「えっ!?!」

小性の一人が駆け込んできた。信奈が誰よりも早く走り出し、俺たちもその後を追うように城門に向かった。

く清洲城・城門前く

「あんたたち……蝮は？蝮も一緒なんでしょ？ねえ！」

信奈の問いに光秀は思わず顔を背ける。そして、道三のボロボロの兵士たちの前から、乳母らしき老女と小さな姫君が信奈の足元に伏して一礼する。

「斎藤家のご息女、帰蝶さまです」

「蝮は!?どうしたのよっ！」

「……書状を預かってきたです」

光秀は手から、汚れてぐしゃぐしゃとなつている書状を信奈に渡した。美濃譲り状はこちらにある、おそらく私的な物だろう。内容はこうだった。

『織田信奈、我が娘よ。そなたと出会つて、まだ己の夢にも続きがあることがわかった。国奪りにかけた人生が無駄でなかつたと知り、これほどの喜びはない。人は誰でもいずれ死ぬ。別れは必ず訪れる。織田信奈が、ワシの夢を継いでくれるならもうそれで充分。そなたの夢が叶うことを祈りつつ、これより冥府へ参る』

信奈は読み進めていくにつれて小刻みに震えだしていた。乱世の梟雄。美濃の蝮、斎藤道三。若かりし頃は僧だったと言われるが、京で油売りとして成功を収め、その財産

を元手に美濃に入つて侍となる。次々と自分の主君を追放するという非道な手を使つて出世を続け、ついには一介の商人から美濃の国主の座へと上り詰めた大悪人。

敵かも家臣からも『蝮』と恐れられてきた男だった。しかし、正しくその書状の内容は別人が書いたかのようなようだった。

（斎藤道三……信長の才能に気づき、美濃を譲ろうとするが、斎藤義龍ら家臣たちの裏切りに会い、討死を遂げる）

ふと頭の中で、習つた通りの歴史の流れが浮かんだ。

「ぜ、ぜ、ぜんつ、ぜんぐんつ、ぜんぐんでっ……い！」

全軍で美濃へ、そう下知しようとした矢先だった。

「御免っ！」

勝家が信奈脇腹に拳を叩き込もうとした。

「ちよつと待てっ！」

俺はその体で拳を受け止める。重心を乗せた拳は、中々痛かった。

（信奈が受けければ一撃で失神だろうな……）

「っ!?は、ハルっ!なにすんだよっ!？」

「……くっ……」

勝家は慌てて拳を払う。晴也は腹を抑えながら、痛みを殺した落ちついた表情で信奈

に言った。

「信奈、なにも全軍で行く必要はない。少数の決死隊を出して、速攻で道三を救い出すつ！」

「そんなの……死に行くようなものよっ！」

信奈は晴也の提案を拒否した。当たり前だ。兵力差が倍の倍の倍以上ある相手だ。もし今、少数部隊で長良川に向かったら、文字通り蜂の巣となるだろう。

「大丈夫だっ！俺を信じろよ！」

「無理よっ！誰も新参者のあんたになんか従わないわ！」

それは確かに最もな意見だが、俺直属の部隊がないわけではない。

「確かに従わねえだろうが、誰も織田の兵を使うとは言つてねえ！」

そして、この状況下で一番頼れる相棒の名を呼んだ。

「……五右衛門！」

ものの数秒も絶たずに「参上でござる」と五右衛門が地面から首だけをだして出てきた。

「川並衆を集めてくれ。できるだけ早くな」

「御意」とまた地面に顔を潜らせた。

これは五右衛門から聞いた話によると、土遁（どとん）という技らしい。

「な、なに、今の………?」

「俺の相棒だ」と答えると、城門近くに繋がれていた馬を強引に引つ張り、乗馬した。これでも乗馬経験はある。この時代に来る前、少々かじった程度だが。

「ちよつと！待ちなさいよつ！」

「安心しろ、絶対に道三を「違うわよつ！」………は?」

信奈は小性に耳打ちをし、小性は急いでどこかへ駆けていった。

「鉄砲隊、足軽隊を少しつけさせるわ、大丈夫。全員若いから中途半端に歳くつた老兵みたく、無駄に逆らいはしらないと思うわ」

「いいのか?それじゃ今川が攻めてきた時、困るだろ?」

「なによ!あんたが今日中になって言ったんじゃない!」

「いや、まあそうだがな……」

信奈は、頬の涙を払って言った。

「……絶対、帰ってきなさい」

「当たり前だつての」

第九話 美濃動乱

『人は何かに縋（すが）りたがる。』

宗教、仏教など様々な物に、人は縋る。誰にでも、あなたにだつて経験はある筈だ。お寺で、お願いしますと小銭を入れ、頭を下げる。『くくくの高校に受かりますように』『くくく会社就職出来ますように』『くくく結婚出来ますように』などなど、人は心が弱くなつた時ほど何かに縋りたくなるものだ。心のどこかで信じていなくても、そうしてしまうものだ。これは悪いことではない、それこそ人間なのだから。だがいくら願つても、叶わないものもある。世界は実力主義だ。運がなかった、ではない。『運も実力の内』というのだから、実力がなかったということだ。運とは自然と付いてくるものである。要するに人間、最後に『頼れるのは自分だけ』ということだろう。

俺が馬で街道に向かう途中、五右衛門が連れて来た川浪衆が合流。顔がめちやくちや怖い、そんなこと今言つていても仕方がない。そして、織田軍の若い兵士たちも合流、ざつと見て百五十近くの兵士だった。皆、鉄砲や槍を担ぐ姿には緊張の糸が見られる。恐らく、初陣のやつらが多いのだろう。

（つたく。信奈のやつ、普通こんな戦に初陣のやつらを出すか？）

これは、絶対死なせる訳にはいかねえな。そう決意を固めていると、織田軍ではないボロボロの兵士たちが後ろから走ってきた。馬の動きを止める。

「おまえら……さっきの……」

道三の娘を連れてきた兵士たちだった。そして、種子島を担いだ明智光秀が前に出る。

「わたしたちも、道三さまを助けに行くです！」

「ダメだね」

晴也は即答した。当たり前だ、こんなボロボロの兵士たちを連れて行つても戦で戦う体力が残っているはずがない。ましてや圧倒的不利な状況下である。

「役に立たなくても、わたしたちは道三さまに忠誠を誓っているです！助けに行くというのなら、わたしたちも！」

光秀は今にも手に持つてゐる種子島が火を吹きそうな勢いで、晴也に迫った。

「ここでおまえらが助けに行つて討ち死になんてしたらな、道三はこう言うぜ『死んで逝つたやつらのためにも、ワシはここに残らなければならん』つてな！」

ピタツと光秀の動きが止まる。それを見た晴也は、全員を見渡し、信奈が送つた若い足軽たちにも声を荒げる。

「おまえらもよく聞けつ！『絶対死なねえ』つて、やつだけ俺について来い！死ぬ、なんて思つてるやつはさつさと家に帰りやがれつ！」

足軽たちは顔を見合わせる。ど、どうする？という不安そうな声が入ってくる。そして初めに何人かが、頭を下げて来た道を引き返し、続いて、数十人、また数十人と去つて行つた。

「……残つたのはこれだけか」

残つたのは約四割だった。残つた者たちは全て、信奈と道三の会見、更に織田家のお家騒動を解決したという晴也に希望を持った者たちだった。これだけ残れば充分だと晴也は思った。

しかし……

「で、おまえはなんで残つてるんだ？」

なぜか道三の兵士たちは潔く帰つたのに、光秀は堂々と立っていた。

「この明智十兵衛光秀……絶対死なないですっ！」

(……意外と頑固なんだなあ)

しばし考えたが、直ぐに口を開いた。

「わかったよ、だがこの戦では俺の指示に従ってもらおう。いいな？」

晴也の問いに皆が覚悟を決め、うなづいた。

川浪衆は、陸よりむしろ川での盗賊稼業を本業としている。とりわけ地元の長良川一帯は、彼らにとっては自分の庭のようなものであり、そして幸いなことに季節は梅雨の時期。深い朝霧がなかなか晴れず、晴也たちの乗った筏は尾張と美濃の国境を早々と越えて戦場へと潜入することができた。ここまでは順調。だが、晴也は思いがけない提案をする。

『(ハハ)は、一手に別れる————』

浅瀬ではすでに、道三軍と斎藤義龍軍との死闘が繰り広げられていた。浅瀬ではすでに、道三軍の兵はちりぢりとなっていた。おそらく本陣を残すばかりだろう。霧が濃くなければ潜入は難しかった。どうやら運があるようだ。晴也は浅瀬へとあがり、道三の本陣まで一直線に駆ける。駆けながら、五右衛門から貰った「たどん」を投げまくる。朝霧の上に、煙幕攻撃。一時的に本陣周辺の視界がほとんどぼきかなくなつた隙を見て、晴也は床几の上に腰掛けていた道三の前まで辿り着いた。

「道三っ！見つけたぜ！」

「小僧っ!?なぜ来た!?!」

道三率いる数人の家臣たちは、今にも敵の大群に突撃しようとしていた。本当の間一髪、と言つたところだろう。

「尾張に来てもらうぜ、爺さん」

「断るっ！」

ですよね、と予想通りの返答にため息を吐いた。仕方ない、なんとか説得しようとして拳を握りしめた。

「この頑固爺がっ！遺されたやつらの気持ちも考えやがれっ！」

「そう言つて光秀たちの方を見入つた。光秀は、必死に種子島で近づく敵を撃ち抜いていた。」

狙いが正確で、頭や胸に確実に穴を空かせていた……つと、あんまり見てると吐きそうだ。いつまで経つても人の死に慣れない自分が恨めしい。

「この大馬鹿者つ!!」

くわあつ!と眈をつりあげながら、道三は晴也を一喝した。凄まじい声の衝撃だが、ここで怖気つくわけにはいかなかった。

「……悪いが、絶対引かねえよ。最終手段は……足の何本かは覚悟してもらおう」

冷静に晴也は木刀を引き抜いた。脅してではない、これは本気だ。静かに道三の額に木刀を突き立てた。

「……おまえまでもが死んだらどうする? おまえはあの子の、信奈どのの唯一の希望なのだ」

「……俺が?」

それはなにかの勘違いだろう、と続いて出そうになつた言葉を、なんとか飲み込んだ。「夢は誰かと共有してこそ夢なのだ。信奈どのの夢を理解出来るのは、未来人である坊主だけじゃ。一人だけの夢はただの野望。この国を野望で焼き尽くすか、夢で彩るかはおまえの肩にかかっているのだ。……信奈どのを導いてやってくれ」

某主人公なら「わかった！任せろ！」なんて言いそうだが、晴也は違った。ため息をつきながら、めんどくさそうに言い放つ。

「やだ。めんどくさ」

「な、なにっ!？」

あまりの予想外過ぎる答えに、道三は驚愕とじていた。

「あいつを導くのは、俺だけじゃ無理なんだよ。今だって、犬千代、長秀さん、勝家がいるから、今のあいつがある。あいつはなあ、非情にはなりきれないんだよ。所詮、まだまだ若い女の子だぜ？あいつの周りには、まだまだ信奈自身大切と思えるやつが必要なんだよ」

「……坊主」

「これは信奈のためだけじゃない。あの十兵衛って子のためでもあるんだよ。あんなボロボロなのに、それでもあんたを助けるってさ。凄え覚悟だよ。なあ、道三？」

「……この戦は、ワシの完敗じゃな」

（尾張・清洲城）

とりあえず道三の娘である帰蝶を保護し、足輕部隊を送った。しかし、それでも信奈は晴れない表情だった。

「……ハルのやつ、大丈夫かしら？」

と信奈はずつと同じ道を行ったり来たりしている。いくら足輕部隊を送っても、それは全員経験不足の兵。若いものたちではないと晴也について行けないだろう。しかし、やはり心配だ。こんなにも家臣を心配になったことがあつただろうか。

「さつきからそればかりですよ、姫さま」

そんな信奈を、長秀は少し悲しそうな顔で見ている。願わくば、自らも出陣して加勢しに行きたいのはやまやまだが、今川に対しての牽制、砦の警備など他にもやらなければいけないことは多々ある。これは長秀が優秀であるが故、仕事が多いのである。

「やつぱり、あたしが行きますっ！ハルだけじゃ……」

「……それは、ダメ」

槍をぶんぶんと振り回している勝家の裾を、犬千代が掴んだ。やはりどちらも表情は優れない。

「な、なんだよっ!? 犬千代は心配じゃないのかっ!？」

「……心配だけど、晴也なら大丈夫」

勝家は「犬千代……あたしよりしつかりしてるのか……」と落ち込んで座り込んでしまった。犬千代は、晴也を侍大将にするための米運搬の際に、五右衛門率いる川並衆と少し面識を得ている。皆、正に盗賊と言った厳しい顔の屈強な男たちだった。そして頭である五右衛門が幼女だからか、自分にはそれなりに優しくしてくれた。恐らく、それなりの修羅場をくぐってきた者たちだろう。

「……大丈夫」

と犬千代は誰にも聞こえないくらいの声の大ききで、そう呟いた。

「鉄砲隊、撃てえ！」

晴也のかけ声により、一斉に鉄砲の火が吹く。龍軍の兵士たちを撃ち抜いて行く。地面は梅雨によりぬかっているため、義龍軍の兵士は鉄砲隊に中々近づくことが出来ない。これは一時的な時間稼ぎ。道三軍の撤退を援護する。

「くっ！怯むなっ！連続して撃つことは出来ぬぞっ！」

そう、種子島は連射が不可。義龍軍はこちらとの距離をじわじわと詰めてくる。

「鉄砲隊、下がれっ！ 槍部隊、前に出ろっ！」

鉄砲隊が弾を込める間、槍部隊が応戦する。通常ならばこれで距離を縮められ、乱戦となる……だが

「な、なんだっ?! あの槍の長さはっ?!」

こちらの槍部隊の槍の長さに、驚く義龍軍。この時代、槍術というのがあって、槍の戦いは間合いを有利に取るのももちろん、懐に入られたときは、柄でどつく、という戦法らしい。柄でどつくためには、槍の長さはある程度限界がある。だが、その常識は打ち破られる。

「いいか、余計なことをするなっ！ 突きまくれっ！」

槍の戦い方にバリエーションなどいらぬ、一つの機能だけが洗練されていれば良い。という、やはり信奈らしい合理的な考え方だ。後々聞くと、戦国時代の長槍の長さの常識は、『九尺、約2.7メートル』だったそうなのだが、信奈は、『二丈一尺、約6.4メートル』と言う思い切った長尺に改めたそうである。もちろん、長いと敵に先に穂先が届くので、有利であることは間違いないが、その分相手が懐に入ると進退極まりない。この状況下では、もちろん無理して攻めなくても良い。

「槍部隊、後退！ 鉄砲隊、前進！」

その号令により槍部隊と鉄砲隊の位置が逆転する。あくまで鉄砲隊の準備の時間を稼ぐ。そして、鉄砲がまたしても火を吹く。

「地形の悪さを利用し、槍部隊と鉄砲隊を巧みに使いこなす……凄いです」

光秀が後ろで唾然とする。会見で見た時はただのバカとしか思えなかつたのに……訂正します、と呟いた。もちろん鉄砲の轟音により、晴也には聞こえないが。確かに凄まじい連携だが、それでも圧倒的に数が足りない。次第に敵との距離が縮められていく。

「くっ……まだか、五右衛門っ！」

一方五右衛門たち川並衆は、敵の小舟全てに火をつけていた。晴也が二手に別れたのには理由がある。

『仮に逃げても、追撃されては、それなりの被害がでてしまうだろう。……だったら、敵の船を全て燃やしてくれ』

「早く、どんどん火をつけるでござる！」

「親分が囁んだっ！」

「たまらねえやあ！」

「おいら、これだけでござ飯三杯はいけるぜ！」

「う、うるさい！」

五右衛門は炮烙玉を小舟目がけて投げる。舟は火が燃え上がり、数分したら廃となるだろう。川並衆も確実に一つ一つ舟を燃やし、全て使用不可の状態となった。

「流石に限界か……」

晴也も木刀を振るって敵を蹴散らしていたが、流石に彼一人で戦局が変わる程、この戦国時代は優しくない。もはや味方の足軽たちの体力も限界に近いだろう。動きが鈍っていた。

「……全軍！川岸に行けっ！急げっ！」

晴也は最後の「たどん」を投げ、一時的に相手の視界を奪った。それを見た足軽たちは川岸に引き返していく。

「あんたはどうするですっ!？」

「殿（しんがり）は俺がやるっ！おまえらはさっさと行けっ！」

近づく敵の兵を木刀で薙ぎ払いながら晴也は言った。

「だったら、わたしも残るですっ！」

「なに言っつてやがる！おまえじゃ……」

光秀は種子島を捨て、刀を抜いた。

「わたしは鹿島新当流の免許皆伝です！」

「……ええっ!?あの塚原卜伝が興した流派をっ!」

晴也は歴史好き、剣道好きなだけではなく更に流派の知識もそれなりにある。神の一本太刀とも言われたあの鹿島新当流……

(こ、こいつ……見かけに寄らず強いのか?)

「あんたはなんの流派なのですか？」

「……五月雨流」

「あはははははっ!聞いたことないです!所詮、名も無き流派ですわっ!」

「んだとおっ!クソっ!いつその時代でも生み出してやろうかっ!」

「……はあ?」

(くそっ!絶対この時代に五月雨流出せば結構イケると思んだが。まじで道場でも開こうかな。そしたら……俺が師匠か……へへっ、いい響きだなあ)

一人でニヤニヤ笑っている晴也に、光秀はぞぞおっと少し引いた。

「うわあ、キモイですー」

「なにい!」

今にも二人はお互いの流派を競って斬り合いにでもなりそうだったが……二人は周

りの状況を見てハツとした。義龍軍が取り囲んでいたのだ。

「おい、おまえのせいだぞっ！」

「あんたが悪いですっ！」

酷く場違いな空気に耐えられなくなった義龍軍の家臣が一人、前に出た。

「み、みちるしちようだ」「うるせえ！」「」

「……五月雨氏は？」

合流地点の浅瀬にいないことを不思議に思った五右衛門が、近くの足輕に聞いてみた。

「それがあ、殿をやるって」

「なっ?!直ぐに助けに行くでござやる!」

直ぐに晴也の元へ向かおうとした、その時、どこからか声が聞こえた。

「五右衛門〜!筏出せえ!」

「さ、五月雨氏!」

「い、いくらこの十兵衛でも、これは流石にやばいです〜!」

晴也、光秀が義龍軍の大軍を引き連れて駆け込んできた。五右衛門はありつただけの炮烙玉を敵に投げつける。

「急げえ!撤退するぞっ!」

筏に全員乗り込み、撤退を開始した。義龍軍は小舟がないことに驚き、なにもするところが出来なかった。諦めまいと、矢が射られたが、運が良かった。もはや夜となつて視界が効かなくなつていたので、射られてもこちらに当たることはない。なんとか川を渡り切り、川を見やつても、敵の追撃はない。「助かった」と安堵のため息を吐こうとした、その時だった。

「目指すは親父どのの首のみだ!突撃!」

ただ、唯一義龍率いる敵の騎馬隊が川を迂回して突っ込んできていた。これはやばいな……と流石に焦る晴也。だが、川岸を見て微笑んだ。

「残念だな、あと一歩つてやつだ!」

「なにっ!?!」

なんと尾張領の川岸で織田軍が待ち構えていた。まさか織田勢が待ち伏せをしているとは予想していなかった斎藤義龍は、忌々しげに舌打ちをしながら自軍に撤退を命じた。

「退け、退けっ！」

道三の首を取るべく猛追してきたため、せつかくの騎馬隊も孤立無援となっていた。そこを狙われたら、撃破されるのは時間の問題だと悟ったからだ。義龍もさすがに道三の養子にして跡継ぎだった男、戦の駆け引きには長けていた。道三仕込みの軍法を頭に叩き込まれているのだろう。だから、退く時も速かった。

「いや、まじ助かったよ、おまえら！」

なんと待ち構えていたのは、さつき晴也に覚悟を促され帰った足軽たちだった。鉄砲や槍を構えて待機してしてくれたのだ。流石の義龍も経験不足の素人集団だとは思わなかっただろう。

「あ……はははは。死ぬかと……思いましたぎや」

「お、おい顔か引きつってるぞ。あ、は、は、は」

「お、おまえらあー！」

感動深く、思わず足軽たちに抱きついてしまった。死ぬ気で待っていてくれたこいつらに感動した！

「今夜は宴だあー！」

「！！おー！！！！」

そう盛り上がっていた時、足軽の一人が駆け込んできた。

「大変ですっ！今川義元、尾張領へ侵攻してきましたっ！」
「……………へ？」

第十話 風雲、桶狭間！

『情けは人の為ならず』

情けは人の為ならずというが、正にその通りだ。結局、情けをかけたものは巡り巡って自分の利益として返ってくる。人に情けをかければ自らの行動が正当化される。要するに情けはかければかけた分だけ自分の利益となる。別に相手がなにかお礼をするという訳では無い。自らの達成感や正義感で心が満たされるのだ。それで自らを満足させたり高い地位に置いたりする。

一方助けられた者は相手を良く思い、助けてくれる人がいるという安心感が生まれるのだ。

要するに、『情けは人の為にも、自分の為にもなる』のだ。

「海道一の弓取り」今川義元は、京への通り道になる尾張の織田軍が出陣しているという情報を聞き及び、意気揚々と尾張へ兵を起こした。先の戦いの濃い霧からもわかるように、すでに梅雨入りしている。夜だと言うのにじめじめと暑く、汗が滴り落ちてきた。今川軍は、信奈が尾張と三河の国境に建てた丸根の砦を目指している。砦を抜ければ、清洲城へ、そして京までまっしぐらなのだ。砦が落とされるのは、時間の問題と言ったところだろう。

足輕の一人が息が絶え絶えになりながらも伝えてくれた。

「敵は松平元康を先陣に、進軍を開始しております」

三河の国主である松平元康。後の徳川家康だが、今は義元の言いなりとなっている。義元はおそらく今川軍本体を温存し、松平軍を捨て駒同然に扱っているだろう。

「おいおい、確かに織田軍は出陣したが、全軍の一割程度だぞ?」

晴也の問いに、隣にいる五右衛門が直ぐに返答する。

「おそらく、相手はあの今川。お構いなしでござる」

確かに織田と今川の戦力差じゃ、ゴリ押しされて普通に負けるだろう。はつきり言っ
てピンチである。こちらはまともによっても太刀打ち出来ない、もし勝つとなったら奇襲や裏工作などが必要となってくる、厄介だ。

(……) だったら少数部隊じゃなくて、織田軍全軍で道三を救出しても良かったんじゃない

いか……)

まあ、目標としていた織田軍戦死者をゼロに抑えられたのだ、良しとしよう。

「織田家の動きが気になる。とにかく清洲に戻るぞ」

足軽たちが「おー！」と返事をし、晴也を先頭に清洲へ戻っていく。随分と人望が暑くなつたものだ。足軽たちは無事に道三を助けだし、被害を最小限にまで留めた晴也に影響を受けだしていた。士気がそれなりに高まる中、唯一一人だけ付いて行けない者がいた。

「ま、待ってくれ、腰がああああ」

道三は腰に手を当ていかにも年寄りそうな弱々しい声を上げた。ぎっくり腰がどうやら持病らしい。うつ伏せに倒れながら情けなく嘆いていた。

「ど、道三さまっ!?!大丈夫ですかっ!?!」

それを必死にどうにかしようと慌てる光秀。当然、安静にしておく以外に治るはずもない。

「なにやっつてんだよジジイ……」

そこにいたのは虻ではない、ただのじいさんだった。

深夜になって、やっと晴也たちは清洲城へ戻ってきた。城内は信奈の家老となった勝家や長秀など主立った者たちと会議をしている真つ最中だった。

「ふえ〜、疲れたあ」

「は、ハルっ?!無事だったか!」

晴也を見た途端、急に勝家が声を張り上げた。

「まあ、なんとかな」

「お疲れ様です。して、どうでした?」

長秀さんが笑顔で労ってくれた。こんな時でも笑顔を絶やさない長秀さんは流石だと思った。

「この通りだ」と腰を痛めてヨレヨレとなっている道三を前に連れ出した。光秀が肩を貸していて、歩くのもやつとらしい。

「蝮……」

信奈が嬉しそうな表情で蝮に近づいた。だが、途端に悲しげな顔になる。

「……もう……織田は終わりね……」

珍しく信奈が諦めたような表情をしていた。道三はそれを見て、しれっと俺を見やる。

(えっ?!俺が悪いのっ?!)

道三だけではなく、十兵衛や犬千代、長秀さんまで……勝家は意味わからなそうだけど。

渋々、信奈の前に立つ。

「えつと……まあ、案を出そうぜ、案を！逆転する案を出せば！」

頭ん中では『桶狭間の戦い』のビジョンが浮かんでいるのだが、ここでそんなこと言ったら信奈絶対キレるだろうな。

……とは言ったものの。

勝家は「全軍で突撃」としか言わないし、他の武将たちも「清洲城に籠城し、尾張を素通りしてくれることを祈るしかない」など消極策ばかり。

「あんたたち甘過ぎだぜ。城に籠つても義元に攻め潰される。まあ、かと言ってただ突撃しても返り討ちは目に見えてるけどな」

戦わなければ滅ぼされ、まともに戦っても潰される。晴也の言葉に皆、口を閉ざして

しまった。

「要するにだな。まともにやったら勝てねえんだよ。敵の裏の裏を突くくらいじゃねえと勝てねえ」

遠回しながらもヒントを送る。名探偵コロン君もこんな感じで警察を誘導していたのだろうか。しかし、それでもまだ案が出ない。奇襲するにも本陣の場所がわからないのが現状だったのだ。

「万千代！小鼓を打ちなさい！」

突如カン高い声で、信奈が叫んだ。長秀が小鼓を取って、ポンポンと『敦盛』のリズムを取り始めた。信奈は立ち上がり、舞を舞いはじめる。

『人間二十年—————下天の内を—————くらぶれば—————夢幻のごとくなり—————ひとたび—————生を得て—————滅せぬ者のあるべか—————』

(あれ？人間五十年くじやなかつたかな？二十年つて短過ぎるような)

因みに、下天、つまり天界の最下位である『四天王天』のことであり、その一日は人間界の五十年分だそう。故に人間界の五十年など下天の時間に比べれば、夢幻のような一瞬のもの。という意味が込められているそう。信長はこれで死の覚悟を決めるとされている。信奈もそうだろうか。

「熱田神宮に向かうわ」

信奈は舞いを終えるとそれだけを言い残し、風のように飛び出していった。正に風雲児、と言ったところだろうか。他の家臣たちは慌てて信奈を追いかけて行つた。

「……晴也？」

信奈が出て動かない晴也に、心配そうに犬千代が声をかけてきた。

「……俺は桶狭間に向かう。おそらく義元はそこで休息を取るはずだ。千載一遇のチャンスだろ」

「……犬千代も」

「それはありがたい」と晴也は微笑んだ。

「坊主、貴様は何故そこまで信奈に尽くす？」

痛みで立っているのがやつとのような道三が、痛みを噛み殺して話しかけてきた。

「何故って言われても……天下取るのあいっだしな。というかあいっしかいねえだろ」

秀吉さん居ねえしな、と次いで出そうになつた言葉を飲み込んだ。

「なるほど……未来では、この戦どうなる？」

それは……と晴也は口を注ぐんだ。

「……さあね。この戦の結果が、そうなんじゃないかな」

未来どうこうではない、今が全てだ。

道三の質問をはぐらかすと、晴也は犬千代と共に出て行つた。

「……五月雨氏」

城を出ると、なんと五右衛門が川並衆と共に待機していてくれた。

「おまえら……」

「我らは五月雨氏と、一蓮托生でござる」

そう言われると、胸から込み上げてくるものを感じた。

「五右衛門く！おまえと会えて良かったぞおおおおく！」

「さささ五月雨氏！抱きつくにや、抱きつくにやつ！」

思わず五右衛門に抱きついてしまった。俺が今こうしているのは、五右衛門たち川並衆がいるおかげだ、これぐらいいいよね？

「この野郎！親分が汚れるっ！」

「親分のピチピチお肌がつっ！」

「お、親分が妊娠しちまうっ！」

おい、最後のやつ、おかしい。

「……犬千代も」

何故か犬千代までもが抱きついて、正に三位一体となつてしまった。

「……は、は、離してくりやしい……あう、あう、あううううう」

「「「いい加減にしろやあああああああああ！」「」」」

この後、川並衆全員に殴られた。

そしてこれが晴也のロリコン疑惑発端の原因となることは、誰も知らない……。

「ハル君」

清洲の町から出ようとした際、突如晴也の前に援軍が現れる。援軍とは言つても総勢百名の戦では役に立たなそうな女の子集団であるが。

「やあ、相変わらずそうだねえ」

その中でも、一際目立つ容姿の美男子が前に出る。

「……どちらさまっ！」

「なっ!? 僕だよ僕、元『織田勘十郎信勝』であり現『津田信澄』である信澄だよっ! …… たかだか二話ぶりだよっ!」

「ああ、そうだった。なんだよおまえ、城でやってた作戦会議にいなかったからてつきり逃げたかと思っただぜ」

「なにを言うんだっ! 僕は姉上の役に立つため、女の子を集めてたんだっ!」

「……なぜ女の子を集める必要があるのかわからないが、成長したな、信澄」

僅かに微笑みながら信澄の頭を撫でた。どちらも美がつく少年なため、女の子たちからは大好評。

「きやあああああっ! 信澄さまあ!」

「ハルさまかっこいいいいいい!」

「そのまま二人で抱き合っつてええええ!」

「い、イケるわっ! これはイケるっ!」

どこの時代にも、腐がつく女子はいるんだなあ。

「で、どこへ行くんだい?」

「ああ、桶狭間だ。義元がそこで休息を取っているはず」

鈍感スキルを持つ晴也と女の子の扱いに手馴れている信澄に、今更黄色い声援を向けたところでどうかとなるはずもない。

「桶狭間？桶狭間は山じゃないか」

信澄がしれつと、そう言った。

「うええええええええーっ！嘘っ!？」

一瞬心臓がぎゅつと締め付けられたような気がした。これがドッキリだとしたら、おそらく最高峰で驚く、というより寿命が縮むと言ったほうが良いのかもしれない。とにかく乱れた頭を整理する。

（待て、落ちつけ、落ちつけ。確か「桶狭間の戦い」はーーー）

頭ん中の記憶を引っ張り出す。確か、世に言う桶狭間……打ち取られた場所は違う。場所はーーー

「……田楽、狭間だ」

その頃、『丸根の砦』が松平元康率いる先陣部隊に落とされていた。

「おかしいですね〜？こんなにあつさり……」

松平元康は忍びを巧みに使い、砦内部から崩壊させた。それでも、織田兵の数が少な過ぎる。ここを落とされれば勝ち目など無いはず。こんな手薄にする理由がわからない。

「半蔵く、義元さまに砦を落とすと報告をく。それと……」

「はっ」と服部半蔵が音も立てず現れ、元康に伏す。

「……やつぱりなんでもないです。それより三河の皆に休憩をとらせてあげたいと、申し上げてください」

「御意」

そして半蔵は音もなく消える。元康は『このまま織田軍が黙っているとは思えない』と注意を促そうと思ったが、止めた。なぜ止めたかは、誰にも、元康自身にしかわからない。

「ここが田楽狭間か」

晴也の予想通り、義元は本陣を「田楽狭間」に構えていた。その陣の中でも一際目立つ笑い声。

「おーほほほほ！」

「……うるさい」

犬千代がうるさそうに耳を塞ぐ。

(つたく、どこの貴族さまだっつーの)

「あれが義元でござる」

五右衛門が指を指す。

まあ、確かにそれっぽい雰囲気だな。チラリと姿が見えた。防具は付けておらず、高そうな着物を着ている。まさかここを奇襲されるなんて、あの頭の中では一ミリも考えられていないだろう。唯一評価できるのが、綺麗に整った顔だろうか。

「さて、どうするか……義元がここを離れたらヤバイな……俺が時間を稼ぐから、おまえら信奈に報告しろ」

腰に帯刀されている木刀を掴む。川並衆と協力して、なんとか……

「はははははっ！ それじゃ無理だよ。ここは僕たちに任せてくれ、親衛隊の女の子たちと酒でも振る舞ってやるさ」

「……すまない、直ぐ戻る」

「ああ、任せてくれ」

「信澄……」

「な、なんだい?」

晴也は急にうるうるとした目をした。

「おまえのことは……忘れないぞっ!」

「や、やめてくれ! 僕が死ぬみたいじゃないかっ!」

五右衛門たち川並衆と急いで山を駆け抜けていた。

「もう少しだ、もう少しで山を抜ける」

そう、口を開いた時だった。

「……逃がさん」

一瞬、恐ろしい緊張感に包まれる。短い言葉だったが、しつかり耳に来る声だった。晴也の動きに呼応するかのよう、他の川並衆の動きが止まる。五右衛門はナイフのような短い短剣を手に構えた。

「誰だ……?」

その問いに答えるかのように、突如木々の上にたくさんの忍びが現れた。全身黒装束で、会見の時のような忍びの殺気とは違う。もつと鋭く、ピリピリとした殺気だった、

「悪いが、行かせるわけには行かん」

「いいぜ……相手になつてやんよ」

晴也は木刀を引き抜いた。静かに息を吐き、臨戦体制を整える。

「だめでござる」

「……うん」

何故か二人が即否定した。

「……そんなことしたら、姫さま出陣しちゃう」

「それでも、逃がすのは俺じゃなくてもいいだろ？」

「……だめ、晴也じゃないと」

晴也の頭にはてなマークが浮かぶ。まあ、確かに川並衆のおっさんたちが伝えても信

じなそうだが……。

「五月雨氏、ここは任せるでござる」

「……んなこと言つても」

引き下がない晴也を見て川並衆が騒ぎ始める。

「安心しろっ！親分たちは俺らが助けるっ！」

「任せるぎゃあ！」

「川並衆、舐めたらいかんぜ！」

と屈強な男たちが前に出た。意見は全員一致らしい。

「……すまん、直ぐ戻るから」

晴也は山中を駆ける。ぬかるんで転びそうになるのをなんとか耐えて。

しかし、不意に後ろから殺気を感じた。

「行かせんつー!」

「……っ!」

晴也は咄嗟に後ろへ振り向き、木刀で後ろからくる十字手裏剣を全て叩き落とした。

「つたく、誰だよ? 後ろからなんて卑怯じゃねーか?」

「この服部半蔵、獲物を逃がしはせぬ」

「服部……半蔵……」

服部半蔵、戦国では有名な忍びだ。任務を確実にこなし、主君の徳川家康から絶大な信頼を得ていた忍び。全身黒装束で、声の張りでまだまだ若者だが、その独特な雰囲気は晴也を恐怖させた。

「くつ、家康……いや、元康の忍びか……!」

「フッフ、我が姿を見て、生き延びた者はいない」

「なら良かった。俺がその一人目だ……!」

「おもしろい……！」

お互いに激しい火花を散らす。おそらく、この時代の戦った中で、一番強い。ちよつとした油断が命取りだ。

「ハッ！あんたみたいな忍者がいるんだな。てつきり忍者つてのは、会見で襲撃してきたやつらみてえなもんだと思つたぜ」

すると半蔵はフフフと、いかにもそれらしい笑い声を出した。

「あんなもの共、所詮は下つ端の下つ端、我と比べるなど間違いだ」

「どつちも空気読めねえつてここは同じだけど、なっ！」

瞬時に距離を詰め、上段斬り。当たった、と思つたがギリギリのところの後退気味にふわりと飛んで回避された。そしてまたしても手裏剣が飛んでくる。

「死ねい！」

「くっ！どんだけ身軽なんだよ！」

このチートキャラがつ！と言つて手裏剣を避けたり叩き落したりと、晴也も充分チートじみていた。

「おもしろい。貴様に手裏剣は通じぬな。ならば、刀で参る！」

半蔵は忍者刀を取り出し、晴也と激しく打ち合う。二人の武器の軌道は、早過ぎて常人にはほんんど見えないだろう。晴也は次第に笑みを浮かべ、半蔵も微笑み出す。二人

は戦いを楽しんでいようだった。

「くっ……正直……キツイが……おもしれえぜっ!」

「フッフ、我とここまで互角とは!」

一分、二分と戦い続けているが、二人の動きは衰えない。しかし、このままでは晴也が不利だった。確かに体力は問題ないが、こんなところで時間をくっている暇はない。一刻も早く信奈に報告しなければいけないのに。

「……わりいな。そろそろ締めえだ」

「……なにを言っている?」

半蔵の疑問を無視し、晴也は神経を尖らせた。

「五月雨流……『陽炎包』」

瞬間、半蔵の忍者刀は吹き飛ばされた。半蔵はなにが起きたか理解出来なかっただろう。

「……貴様……なにをした?」

半蔵は呆然と突っ立っていた。驚きなのか、落胆なのか、半蔵は迎撃体制を整えなかった。

「ああ、この技『陽炎包』(かげろうづつみ)って言ってな、おまえの振り下ろした刀の軌道に合わせて、木刀で弾きとばすだけの簡単なものだよ」

とは言っても、相手の軌道を読み、その中でも力の働きの弱く脆い部分を木刀で弾くという瞬間の判断が必要となる難しい技術だ。

「……そうか、では殺すがいい」

覚悟を決めたように、半蔵は頭を垂れた。あくまで、相手の敵対意識を解くために説明したんだけどな……。

「バカだな。殺すつもりなら、木刀なんか使わねえよ」

「……甘いな」

「まあな……それより松平元康は、一体いつまで今川義元のパシリでいるつもりだ？」

「……強大な今川相手には我らは従うしかない」

「なら安心しろ、俺たち織田軍がその呪縛を解き放つてやるよ」

「……織田勢ごときが、今川に勝てるんでも？」

「ああ、勝てるんだよ」

晴也は確信があるように胸を張って答えた。その様子を見た半蔵がしばし考え、口を開く。

「たとえ勝利しても、織田がそのまま勢いに乗って三河に攻めてくれば、我が姫の命運は尽きる」

「信奈は元康と同盟を結ぶ。あいつは美濃の攻略を考えているから東国に興味はない

ぜ。だから、信奈は元康と同盟を結ぶ、いや、俺が結ばせる」

信奈は幼少期から元康と知り合いのはず、いわゆる幼馴染だ。

「……小僧、貴様の言葉信じよう、だが約束を違えれば」

「ああ、俺を殺せばいい」

その言葉にうなづく、半蔵は黙って消えていった。

熱田神宮の信奈本陣に辿り着いた時には、信奈がイラついているように土を蹴っていた。信奈が義元の本陣を探るために放った忍びが、誰一人戻ってきていないのだ。

「よお、機嫌は……悪そうだな」

「ハルっ!?!どこ行つてたのよっ!」

信奈はいきなり晴也に体当たりしたと思つたら、頬を張ってきた。安堵しているのか、怒っているのか、よくわからなかった。

「義元の本陣を見つけたぜ、田楽狭間にいる。本隊は五千くらいだろ。先行してる部隊とは孤立してる。今、信澄と親衛隊の女の子たちが兵士たちに酒を配って足止めしてい

る。狙うのは今しかねえ」

「勘十郎が……」

「ああ、あいつは覚悟を決めたぜ。おまえはどうする?」

「……全軍で田楽狭間に突撃!この奇襲にわたしの全てを懸けるわ!」

柴田勝家が気合充分といった感じで、勢いよく法螺貝を吹いた。

そこに犬千代と五右衛門、川並衆が合流。

「五月雨氏、忍びが引いていったでござる」

「……そうか、おまえら無事か?」

「……大丈夫」

犬千代たちの無事を確認すると、晴也はうなづいた。

「せっかくの熱田神宮です。神様に戦勝祈願を」

丹羽長秀の提案を受けた信奈はいつもの仏頂面で神殿の前へ近寄り、カン高い声で叫んだ。

「いったいいつまでこの国を乱れさしてるのよ!あんたたちが本当に存在してるんだつたら、このわたしを勝たせなさい!」

「うわ〜バチ当たり〜」と晴也が呟いた。

それと同時に快晴だったはずの天気は雷と豪雨に変わった。信奈は「これこそ天運

「!」なんて言ってる。そして信奈が高らかに声を張り上げた。

「みんな、わたしに命を貸して!」

今川本陣は信澄たちの酒盛りにより、酔っている足軽たちが多かった。そして雷雨に慌て、次々と林の中に非難した者も多く、今川本陣は僅かな手勢が守るガラガラの状態となつてしまった。

その光景を見た信奈は――

「全軍突撃! かけろ!」

雷鳴、豪雨と地の利が味方している織田軍により、今川本陣はパニックに陥る。油断していた今川兵は、足がぬかるんで思うように動けない。そして酔った兵士たちは未だになが起きているのか理解出来ていなかった。

「一番槍はわたしだああああ!」

「い、いやですわっ!」

ぬへへと笑う足軽が義元に迫っていた。汚い顔、汚い声、汚い臭い、汚い鎧、汚い話し方。義元はガクガクと震えていた。

「だ、だれか……助けて」

「へへっ! 義元さま、ごかくごほおっ!」

突如、足軽が馬に轢かれた。背中に馬の足跡がくつきりと残ってしまっている。轢いた本人は気づいていないようだ。

「今川義元。命は別にいらなから降伏を……つてあれ?」

「なんで泣いてるの?」とその足軽が馬から降りて近づいてきた。近づくに連れて、どんどん恐怖の涙がどんどん溢れ出てきた。

わ、わたし……これで死ぬんですわ……と覚悟を決めた。

「お、おい大丈夫? せっかく美人なのに勿体ないぞ?」

び、美人? と急に義元が元気になった。そして口を開く。

「な、なんですか? あなたは?」

「ああ、織田家足軽、五月雨晴也だ。義元、降伏してくれ。君を殺したくない」

急に心臓がドキンと高鳴った。

そして僅かに頬を赤らめ、いつものように堂々と云った。

「し、仕方ありませんわね。今回だけはこれで勘弁してさしあげますわ……」

こうして、桶狭間の戦いは僅か三十分足らずで終わった。

「五右衛門、今川義元が降伏して出家したという報を流してくれ」

「御意」

「ここに本陣を組もう。急造で構わないから」

「はいですみやあ」

「えつと後は」

ガンっ！

と頭に衝撃が走った。

「なに勝手に仕切ってるのよ」

「ああ、わりい、つい」

「で、あんたが今川義元？」

信奈は晴也の後ろに隠れてる義元を見て言った。

「大丈夫か？義元？」

「も、問題ありませんわっ！」と義元が信奈の前に出た。こんな状況でも偉そうに胸を張っているのが、度胸が有るといっつか、馬鹿だといっか……。

「義元、あんたは利用させてもらうわよ」

「え、ちよ「んじゃ、連れてって」

と会話は直ぐに終了した。

小姓たちが義元を連れ去ってしまった。義元はなにか言っていたがよく聞き取れなかった。

義元の降伏により、今川の兵は散り散りとなった。

今川義元の本国である駿河は、甲斐の虎の異名を持つ武田信玄にあつという間に奪いとられた。

「で、ハル」

「ああ、褒美？あんましいらねえけど、とりあえず金で「無理ね」……え？」

「勝手な独断行動が多過ぎるわっ！」

「いや、全部必要性があつてだな」

信奈はそっぽを向いて誰にも聞こえないくらいの声の小ささで呟いた。

「……死んだらどうすんのよ……」

「はい？なんか言った？」

「う、うるさいっ！」

と、いつものように蹴られる。

避けても無限ループだと言うことに最近気づき始め、なんとか合気道のように受け流している。

「なんでっ!?!当たってるはずよ!」

「ほらほら信奈く、さっさと帰ろうぜ。元康との同盟の話だつて進めなきゃいけねえし」

「なんであんたが知ってるのよっ!?!」

「さあ、なぜだろうね」と晴也はいつものようにはぐらかした。

主人公&キャラ紹介 壺の書

晴也「普通、このタイミングでキャラ紹介なんかやるか？」

作者「仕方ないじゃん……ここまで続くとは思わなかったし……」

晴也「確かに……桶狭間で終わらせようかな〜とか思ってたしな」

作者「まあ、ここまで続けられたのはこうして読んでくれる方々のおかげです。誠にありがとう」

晴也「んじゃ、まず俺の自己紹介からだな」

作者「……、」

*五月雨（さみだれ）晴也（はるや）

本作の主人公。

・年齢 17 歳

・身長 173 cm

・体重 58 kg

・血液型 B 型。

長く真っ直ぐな黒髪を、普段はポニーテール状にしている。容姿は美少女と見間違う程の美貌を持つ。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経も良く何でもござれの完璧人。頭脳という点では作中では余り強調されていないが、実は戦国時代に来る前は、学校で学年一位を取り続けていた程である。特に日本文化が好きで、歴史も然りである。性格はだるっ気があるが、比較的眞面目で純情。実は料理（特に和風）が得意であり、よく自分で作っていた。更に高校では剣道部に所属しており、剣道日本一という威厳を持つ。五月雨道場の『父親』や『師匠』に鍛えられ、剣術は無類の強さを誇る。『五月雨流・喧嘩術』を会得しており、素手でも別格の強さを誇る。

以上のような才色兼備が揃った天才であるが、よくアニメ主人公が持つ特殊スキル『鈍感』を持つ。その為自分がどれだけ好意を持たれているか自覚が出来ていないという。この時代に来る前、その性格と容姿が女子からは大人気であり、週に三回以上は告られるていた（他校や部外者含め）。

中学二年、初めて好きになった同級生の女の子に告白したが、中二とは思えない程の暴言を吐かれ、散々罵倒されてフラれた。その為、一時期女性恐怖症となる。

しかし、色々な人物の手助けにより、なんとか乗り越えた。

その後、親友に勧められた『織田信長公の野望』にどっぷりとハマり、その他のゲー

ムにも手を出していった。

*使用している武器

『頂点上規（ちようてんじようき）』

高校剣道インターハイの優勝商品。

*五月雨流・技

『一閃』

姿勢を低くし、左手は前へ、木刀を持つている右手は矢を引くように、後ろへ引く後ろへ引いた腕を相手の顔面に突き出だす。圧倒的なスピードの突き。

『陽炎包』

相手の軌道を読み、その中でも力の働きの弱い部分を木刀で弾く。

晴也「俺の過去、思ったより暗いよな……」

作者「こいつについての過去とかは、番外編とかでやるかもね」
晴也「恥ずいな」

作者「さて、次は第一章で出てきたキャラの紹介です」

*織田信奈

本作のヒロイン。

残念ながら原作通りの『メイン』ヒロインとまではなれなかった。

尾張を支配する織田家の当主。16歳の姫大名であり幼名は『吉』。

奇矯な格好や振る舞いから敵味方問わず『うつけ姫』などと呼ばれている。『リアルカ』が口癖。自らを『天下一の美少女』を自負する程自分に自信がある模様。卓抜した戦略家であり、大胆不敵な行動力の持ち主。天下統一後の世界戦略まで見据えているが、時代を超えたその考えが理解されることは少ない。晴也に密かに好意を抱いている模様だが、全く晴也には気づかれていない。

*柴田勝家

本作のヒロインの一人。

織田信勝の元家老。18歳の姫武将で、あだ名は「六（りく）」。

織田家きつての武芸家だが頭脳労働は苦手。織田家騒動後は信奈の家老となる。合戦では主に長槍を用い、先陣を任される事が多い。また、晴也とは模擬戦以来意識する様になり、信奈とほぼ同時に晴也に好意を持ちはじめた。

『鬼柴田』ではなく女の子になりたいと密かに願っている。

*前田犬千代

本作のヒロインの一人。

信奈の小姓で12歳の女の子。実は『犬千代』はあだ名であり、本名は『利家』。

小兵ながらも長槍を使いこなす強者。晴也とはなにかと気が合う様で、共に行動する事が多い。原作では信奈と良晴の仲を羨ましがする一面があるが、本当の気持ちは不明。

この作品では……？

*丹羽長秀

本作の予備（考え中）ヒロイン。

織田家の家老。

信奈の小姓上がりで20歳そこそこの女性。あだ名は「万千代」。織田家の中で唯一の常識人。温厚な性格であり、地味ながらも確実な戦果を上げる。

参謀型で他人を補佐するのが得意であり、他人の行動や発生した事件・状況に点数をつけるクセがある。原作では信奈と良晴の関係を認めた。

果たしてこの作品での彼女のポジションは……？

*明智光秀

本作のヒロインの一人。

あだ名は「十兵衛」。道三の小姓として仕える。トレードマークは金柑の髪飾りと広めのおでこ。美しい美少女剣士であり、頭脳労働や礼儀も得意である。鉄砲の名手で、剣術は鹿島新当流の免許皆伝。以上の点から剣術、鉄砲もそつなくこなす晴也と近い完

壁人であるが、性格にやや難があり、原作ではよく信奈と良晴の仲を邪魔していたり、良晴と無理矢理結婚しようとするなど……。

この作品では晴也とどのような関係になるのか？

*蜂須賀五右衛門

川賊・川並衆の頭領にして少女忍者。良晴によると小学5年生くらい。複数の敵を相手にし、上手く気絶させるほどの手練で、忍術や諜報活動もお手のもの。30文字以上の台詞や、気持ちが高ぶると嘯みまくる。仕えていた木下藤吉郎が討死したため、彼が助けた晴也と主従関係を結ぶ。極度の男性接触恐怖症であり、男に触れると精神が混乱してやがて気を失う。主である晴也ならある程度は耐えられる。

ヒロイン要望が多ければ……………。

*織田信勝

信奈の弟。あだ名は「勘十郎」。謀反を起こしまくる謀反常習犯だった。自身も将の器ではないと内心自覚しており、家臣たちに流されて謀反を起こしてしまっていた。

晴也並の美男子で1000人近い女の子の取り巻きがいる。信奈に謀反を許されたおり「津田信澄」と改名する。以後は改心し、信奈の役に立ちたいと考えている。

*ねね

うこぎ長屋で、晴也家の近所に住む女の子。

長屋の長老格である祖父と共に暮らしている。

原作では信奈から良晴の私生活監視役を頼まれて、良晴の義妹となったりしている。

僅か8歳ながらも、算術が得意だが、オネシヨ癖があるなど年相応なところも見られる。

いくらなんでもこの子をヒロインには……

*草部金太

非常に影が薄いオリキャラ。

三バカのリーダーであり、良晴並の逃げ足を誇る。

非常に馬鹿な場面が目立つが、桶狭間の戦いでは、今川の本陣へ『一番乗り』を果たすなど戦闘能力は中々のものである。

作者「こんなものかな」

晴也「少なっ！」

作者「まあ、第一章だからね」

晴也「そうか……んじやこの辺で終わるか？」

作者「まだ、大事な人がいるじゃないか！」

晴也「は？誰だよ」

作者「この私だっ！」

晴也「皆さん、では次話会いましょう」

作者「まだだ！まだ終わらんよ！」

注意！

・『お前の事なんか興味ない』と思う方はどうぞ飛ばして下さい。

*漆原涼介（うるしばらりようすけ）

年齢〓不明

身長〓不明

体重〓不明

好きなもの〓サッカー（観戦専門）、野球（観戦専門）、バスケット（実際やる派）、何かに一生懸命な人、最近試したけど『土方スペシャル』は以外とイケる。

嫌いなもの〓声が大き過ぎる人、煙草、コンビニに溜まった家のゴミを捨てる人。

趣味Ⅱ音楽を聴く事（何気に『ボカロ』好き）、映画鑑賞、運動

く最近の近況報告く

友達とバスケをしていると、必ず『黒○のバスケ』の黒子的な影の薄さになります。仕方ないから相手のボールを奪うと『お前いたっけ？』みたいな雰囲気になります。

今度から『イグナイトパス』とか『バニシングドライブ』を使えるようにしよう。

第二章 美濃統一

第十一話 長政の秘密

『他人の不幸は蜜の味』

人は他人が不幸になると、不謹慎だと思いつつも喜んでしまうものだ。そんなことない、と自分も胸を張って応えたいが、残念ながら脳科学的に証明されてしまっているらしい。他人への『妬み』が多く関係しているようなのだ。以上のことから、絶対に不自然な言葉だ。とは言えないのだ。例えば、会社である友人がクビになった話題をする。話題自体には特に関心を持たれない。だが、なぜクビになったかの経緯を話すと途端に目の色を変え、興味津々と言った状況になるのだ。「かわいそう」「不幸だねえ」などの意見が多く、誰も他の話題に移ろうとはしないのだ。私はこの言葉が嫌いだ、頭では認めてしまっている。

『桶狭間の戦い』を勝利した織田軍は士気が一気に高まり、家臣たちも信奈のことをうつけ姫などとは呼ばなくなっていた。命懸けの連戦を戦い抜いた俺は安心と同時に疲労を感じた。皆、町民たちも『織田軍、今川に大勝利』の報を受け大騒ぎ。足軽たちも宴やら祭りやらで盛り上がっていた。そういう祭りごとは嫌いではないが、流石に疲れた。俺は清洲へ着くと真つ先に家に直行し、布団を敷いて寝た。

「五月雨氏」

声が聞こえたのでうつすらと目を見開く。隣に全身黒装束の相棒、蜂須賀五右衛門が立っていた。

「……………どうした？」

「織田軍が城で宴会を開くとのこと」

おそらく戦勝祝いだろう。行きたいのは山々だが生憎一旦布団に入ると体を起こそうとしても動かなかつた。いつまでもこうしていたという眠気に駆られる。

「……………俺は……………遠慮するよ……………おやすみ」

「御意」

五右衛門は音を立ずに消えた。と言ってもおそらく天井裏にでも潜んでいるのだろう。俺は再び眠りについた。

そらからしばらくして

「……………」

何故かまだ夜中だと言うのに、不意に目を覚ました。うーん、と目をこすり起きようとするが。

「なんか、生暖かい……………」

背中が妙に温かかった。汗かと思ったが、その割には温かい。チラツと背中を見やると、なんとねねが張り付いていた。

「なんだ……………ねねか」

子供の体温は高いと言う。おそらく俺にはまだ熱が移ってしまったんだろう。流石にこのままだとこつちが身動きが取れないので、起こすことにした。

「ねね、起きろ。熱い……………」

眠気から抜け出し、意識から覚醒するにつれだんだん神経が研ぎ澄まされ、感覚が

戻ってきた。それが『汗』というのに違和感を感じた。

「……おい、ねねっ！おまえ、おねしよだろこれっ!?」

晴也の声に背中に張り付いていたねねが大きな目を見開く。

「ふ……え？」

「ふ、え、じゃないっ！おまえもう八歳だろ！いい加減やめなさい！」

しつかりと叱っておかないとまたやってしまうだろう。ここできちんと注意しておかねば！と晴也は心を鬼にして怒った。

しかし……

「づ、づ、づ」

「お、おい……ねね？」

「……づあああああゝゝゝ!!」

ねねが割れ鐘のような大声で泣き出した。しかも背中という至近距離なので威力が倍増。

「づあああああゝゝゝ!!!」

ねねの超音波攻撃が晴也の耳に直撃。晴也は耳を塞ぐが、それでもねねの声は思った以上の威力だった。

「うあっ!?悪かった!ごめん、許して!機嫌直して!せつかくの美少女が台無しだよっ

「!?」

「だいなじ………?びええええええええええ!!!」

「うああ〜っ!?!もう許しててくれえ〜っ!?!」

いくら剣術や喧嘩が強い晴也でも、小さな子供相手にはなにも出来なかつた。慌てふためく中、そうだ五右衛門がいる!と希望を持って呼んだが、返事はなかつた。気配も感じない。

「五右衛門っ!?!おまえ逃げやがったなっ!!」

晴也の言葉を尻目に、五右衛門はひっそりと天井上から脱出し、宴に出て無人となっている犬千代の家に入り込んでいた。

「………つたく、やっと寝やがったか」

ねねをなんとか寝かしつけたが、俺はすっかり目が覚めてしまい、おまけに服が濡れ

てしまった。行水をしようと外に出たが、不意にあることを思い出した。

(そういえば……この前、湖を見つけたんだよな)

実は道三を救出に行く際、湖を見つけていた。あの時は急いでいたので、あまり気にはとめなかったが。この時代に来てから行水ばかりだった。あまり行水ばかりじゃない気がしないので、その湖に行くことにした。

「えっと、確かここら辺に……」

手に松明を持ち、もう片方の手で替えの着替えを持ちながら林の中をさまよう。辻斬りに会ったりするのも嫌だから、しっかり木刀も帯刀している。

「お、あったあった」

夜の月が映える、綺麗な湖だった。月の光が反射され、夜とは思えないほどの明るさに満ちていて、昼以上の魅力を感じた。

「さてと……」

晴也は服を脱ぎ捨て、静かに湖に入った。冷たい水は疲れた身体に思つた以上に効いた。体の疲れが抜けていく。

「ふう……」

晴也は目を閉じ、この時代に來てからのことを思い出していた。秀吉さんに会い、信奈に召抱えられ、道三を救出し、今川を倒す。言葉で並べると狂言のように感じて、少し笑えた。不意に現代のことを思い出してしまうが、思い出せば出すほど辛いのであまり考えないようにした。帰りたい、と思う時は多々あつたが今はなんとかここでやっていけそう、という希望が芽生えて來た。

(あんまり考えると鬱になるな……)

気分を晴らそうと湖を僅かに進んだら、遠目ではあるが刀を持った侍らしき男？が見えた。

(こんな時間に……それに刀を持ったまま?)

念のため、木刀を取りに行こうと道を引き返そうとした。しかし、こちらの動きが水面に伝わってしまった。あちらも気づいてしまったようだ。

「なにやつ!」

敵は刀を抜いて、迫つてきた。薄い闇の中なので、相手の顔までは見えない。

「やべっ!」

気づかれた!丸腰の俺は急いで湖を泳ぎ、木刀を取りに行く。

「逃がさんっ!」

後ろから刀を振るってくる。狙いが正確で、真横に刀が降りてくる。しかも中々の執念で追いかけてくるのだ。剣の動きからして、おそらく中々の手練れだろう。俺は拳を握りしめた。

(素手で勝てるか……っ!?)

「ええい、止まれっ!」

「止まったら斬るだろうが!」

かと言ってこのまま背後を取られている状態だと不利極まりない。俺は捨身の覚悟で水面を蹴り上げ、水しぶきを上げた。敵は見事に水しぶきに当たったようで、一瞬動きが鈍った。

「くっ!」

「よし、隙あり!」

俺は後ろに振り向きざわに敵に体当たりし、お互い水を被る。その際に刀を落とした敵の、両腕を掴んだ。

「は、離せっ!」

「てめえ、急に斬りつけてきやがって！なににも……ん？」

掴んでいる腕が妙に柔らかい、筋肉とは違う。おそろおそろ敵の体を見ると、くびれた腰、そして膨らんだ乳房。自分がどうかしてしまっただろうか。遂に妄想変態野郎になつてしまっただろうか。いや、それにしてはやけにはつきりで、くつきりと……（……………これは……………）

俺は気づいてしまった。敵は全裸の女性だと言うことに。おまけにスタイルが良い。べ、別に見たくて見たんじゃないから！たまたまです！本能的に！と、誰に向けて弁解しているのか自分でもよくわからなくなり、俺は咄嗟に敵の腕を離れた。

「お、女っ!？」

その女は今更ながら、恥ずかしそうに水に体を沈めた。俺は敵の刀を拾い上げる。気持ち落ち着け、改めて敵を見る。間違ひなく美少女の分類に入るその女は両手で体を隠していた。俺は自分の『煩惱退散、煩惱退散、煩惱退散！』と頭を殴って煩惱を追出す。

「……………おまえ……………何者だ」

なんとか冷静を装いつつ、刀を敵に向けて問いかけた。

「おまえこそ、どこの乱破だ。織田か？わたしを暗殺に……………」

織田……………暗殺……………乱破……………聞き慣れた言葉に良く耳を傾けると、どこかで聞いたよう

な声色だった。

「……失礼ですが、近江の大名『浅井長政』さまの妹さんかなにかで……？」

「わ、わたしに妹などいない」

その言葉が発せられ、静寂が身を包む。僅かに虫の鳴き声だけが聞こえる。次第に止まった頭がだんだんと回り出す。

「お、おとおお、おまえ長政かよっ!!？」

「そ、それをこちらに向けるなっ！」

言われて気づいた。自分も裸だと言うことに……

とりあえず俺たちはお互いに背を向き、湖に体を沈めた。もちろん刀はしつかりと目の届くところに置いてある。気まずい空気が流れたが、長政が思いついたように口を開いた。

「おまえ……あの時の男か……」

「長政。いくらおまえが男らしく話しても、もうおまえを男だとは思えないよ……」

「う、うるさいっ！」

不覚にも裸を見てしまったし、見られてしまった。ものすごい罪悪感と喪失感を感じる……。とりあえず恥ずかしさを一旦忘れることにして、口を開いた。

「だが……なんでわざわざ男の振りなんかしてるんだ？この時代は姫大名なんて珍しくないんだろ？」

この時代は『武家の第一子は性別に関わらず家督を継ぐ』ということで、『姫武将』や『姫大名』と呼ばれる女の子たちが存在するはずだ。だから、女だからと言ってわざわざ男と偽らなくても良いはずだ。

「わたしは……幼き頃より、六角承禎の人質として観音寺城に住まわされていたのだ」
「ああ、知ってるぜ。松平元康と似たような境遇だよな。幼い頃は誘拐され、織田家に売られたり、今川の人質になったりさ」

俺は長政と同じような境遇に合った元康の例を口にした。どちらも家柄のせい自由を奪われた者たち。この時代では良くあることらしいが、そんな身勝手な理由はどうしても気に食わなかった。

「今川義元は女ではないか。六角承禎は男だ」

そこで晴也はハッした。晴也は鈍感だが、長政の辛そうな表情を見たら気づくしかなかった。次第に晴也は溢れ出る怒りを感じた。『他人の不幸は蜜の味』と言うが、そんな

もの嫉妬で出来た哀れな言葉だ。

「……………おい、まさか」

「ああ……………年頃の娘のみならず年端もいかぬ幼い娘も大好物というゆがんだ男だ」

「……………くそ野郎だな」

人質に取られた時の長政はまだ若い娘だったはずだ。そんな男が近くにゐるなんて相当怖かっただろう。思わず晴也は水面を殴った。ただ、ムカついていた。そんなクソ野郎を想像しただけでもムカついたので。そんな晴也を見て、長政は悲しそうな顔で話しを続けた。

「それ故、父に男子として育てられた。そしてこの美貌を利用し、六角家の女どもをたらしこんだ。そのおかけで観音城から脱出して小谷城へと舞い戻ったのだ。わたしは父に家督を継がせて欲しいと言った。だが、父は姫大名などは認めぬとおっしゃった。父にはわたし以外に子はいない。浅井家を継ぎたければ、女を捨てろと……………」

「……………そうか」

自分の子供に自らの思想を押し付けるほど哀れなことはない。子供は親の所有物ではないのだ。親と子と言う絆はあるが、両者も一人の人間だ。全く同じにはならない。

「わたしは男装すれば、おまえ並の美男子に見える。女は皆、美男子に弱い。この美貌は役に立つのだ」

「……確かに男の振りなんかしてたら、女なんて作れないよな」

通りで「利用するだけして利用して女を捨てる」なんて噂が立つワケだ、と晴也はうなづいた。

「父は織田信奈と同盟には婚姻同盟でなければ認めぬと言うし、織田家には他に姫はいないと聞いた」

「それはそうだが……もったいねえよな」

「なにがだ？」

そこで晴也は、はあくため息を吐いた。

「確かに男でも充分の美形だと思うが、おまえは女の方が美人になれると思うが……」

「び、美人とか、言うな！」

怒った？長政が水鉄砲で攻撃してきた。体を隠しながら（もちろん全ては隠せていないが）、恥ずかしそうに撃ってくるので「うわっ、かわいい」なんて思ってしまった。

「げほげほ。……まあ、おまえだけじゃなく信奈や勝家、長秀さんに犬千代、五右衛門に十兵衛、それと義元か。全員綺麗なものにもったいねえよな」

「……おまえ、たらしなのか？」

「違う違う。純粹な気持ちだよ」

と、笑顔で答えた。前から思っていたが、妙にこの時代の女の子は美少女や美人の分

類に入る人たちが多と思う。とある親友なら、この状況をウハウハになりながら楽しむだろうな。

「なんでおまえなんか話してしまったんだ……これで浅井家は終わりだな……」

長政は急に真剣な顔をして言った。晴也はその言葉にピクツと反応する。

「は？なに言ってるんだよ。言ってる欲しくないんだつたら言わねえよ」

と晴也も真面な面立ちで答えた。

「なっ?!それは信奈どのに……」

「こいつは一家臣に過ぎない。そんな勝手に動ける訳がない」と長政は思った。

しかし、晴也は呆れたような口調で言った。

「悪いが、俺は信奈の忠誠心で従ってんじゃねえ。あくまであいつの手伝いだ。死ぬって言われても死なねえし、誰かを殺せて言われても殺す気なんかねえよ」

「ならば……なぜ尽くす？」

「この国にはあいつが必要だ……。それに、俺は信奈を主じゃなく『仲間』だと思ってるんだ」

「仲間だと？」

「あ、家族っていう言い方もありかもな」と晴也は笑った。

主に晴也が信奈、織田軍に仕えるのには三つの理由がある。

一つ目は、この国には信奈が絶対必要だから。

二つ目は、他に行くところがないから。

三つ目は——

「ああ、そうだ。仲間は見捨てねえ——つてよく聞く台詞だけど、まさしくそうだけ。俺は織田家の皆を仲間だと思ってる。あ、もちろんおまえもな」

そう、これが三つ目の理由。晴也にとつて既に共に何度も死線を戦い抜いた織田軍の皆は仲間というカテゴリーに入ってしまった。仲間を放つて自分だけぼーつとしてる訳にはいかない。もちろん帰りたいとも思うが……。

「わ、わたしも?」

だが仲間意識云々より、まず長政は自分を仲間だと言われたことに驚いた。「敵国の大名を仲間だと? こいつはバカか?」と長政は思った。しかし、晴也はニヤニヤしながら言った。

「だって、まさしく裸の付き合いに……「貴様ああああ!」うわっ?!ごめんごめん」

長政が水鉄砲を乱射してきたので、こつちも対抗して水鉄砲を発射する。二人はお互いが裸であることも忘れ、ただ子供のようにムキになって攻撃しあっていた。

「いつ振りだろうか。こんなに楽しいのは。そして男と素で語ったのは……」と長政は自分が頬を赤くしているのを気づいていなかった。

年頃の男と女がなにやっってるんだ……と流石に恥ずかしくなった俺と長政は湖から出て、お互い着替えた。着替えを終えた俺は長政を待っていた。

「よお、やつと着替えたか」

「っ!?誰だ、貴様っ!」

と言つて長政は俺が返した刀の柄に手をかけた。

「な、なんだよっ!」

こちらでも対抗しようと木刀に手をかけたが、長政はやがて呆れたように言つた。やがてハツとしたように長政は柄から手を離れた。

「おまえ……髪を縛らなかつたら女としか見えないぞ」

いつものものように、髪をポニーテール状に縛っていない晴也は、どうみても黒髪美人と言える美少女となつていた。長政が男装の天才ならば、晴也は女装の天才となるだろう。

「……そうかなあ?」

「ああ……それでは」

そう言つて長政は微笑んだ優しい顔から、いつもの近江の若大名「浅井長政」の顔と

なっていた。それを見た晴はなにを思つてか口を開いた。

「まあ、待てつて……いいとこ案内してやるよ」

「な、なぜここに連れてきた……」

「長政。それ六回目だぞ」

信奈や家臣たち宴会の真つ最中、晴也は清洲城へ強引に長政を連れ込んだ。宴会の雰囲気、長政の登場により一気に冷めてしまった。他国の大名と言うことで、家臣たちは緊張感を持っていた。

「あんた。やつと来たと思つたら、いきなり長政を連れてくるなんてどういふつもりよ」
信奈は俺と長政を交互に睨みつけながら言った。まあ、あんな告白されてるんだから、嫌いになつてるのはわかるが。

「長政が寂しそうだったんだよ。いいだろ、頼むっ！」

晴也はこの通り！と頭を下げた。

「……ま、まあ。あんたがそこまで言うならいいわ」

「サンキュウ信奈！」と晴也は笑顔を見せた。それを見た信奈は僅かに頬を赤らめ、そっぽを向いた。

「……晴也」

「お、来てたのか犬千代」

コクンと犬千代がうなづいた。本当なら犬千代と俺のような足軽風情が家臣たちに混ざっているのは正しく場違いなのだが、どうやら信奈の『お気に入り』ということに通っているらしい。

「……晴也……あゝん、して」

と犬千代は自分が大好物のいろいろを、俺の口に近づけた。

「ん？ああ、あゝん」

俺は犬千代から貰ったいろいろを頬張った。確かに、不味くはない味だった。というより俺別に好き嫌いななしな。犬千代はうずうずと感想を聞きたがっている様子だった。

「ん……美味しいよ。ありがとな、犬千代」

「……良かった」

嬉しそうしている犬千代の頭を撫でた。酒の気に当てられたのだろうか、僅かに頬を

紅張させていた。

「ず、ズルいぞ、犬千代っ！」

その様子を見た勝家はおもむろに慌て出した。

「か、勝家？」

勝家は自分が食べていたみそ煮込みうどんを持ってきて、箸でうどんを掴み、晴也の顔に強引に持ってつた。

「ほ、ほら！く、食えハルっ！」

「うお、アチい！お前そこ鼻だよ、鼻！落ち着け！なんで手震えてるんだよっ！」

勝家の箸を掴んでいる手が、まるで年くつたじいさんのようにブルブルと震えていた。箸で掴んでいるうどんが上手く口に運べず、俺の鼻に押し込んでいた。

「こ、こういうのは、初めてなんだ！優しくしてくれっ！」

酔っているのか、大分台詞がおかしい気がする。「……仕方ねえなあ」と晴也は右手で勝家の手を握った。

「な、なにするんだよ!？」と勝家は顔を真っ赤にした。晴也は呆れたように話を続けた。

「手、抑えてやるから。さっさと口に運んでくれ」

勝家はそれでもおおそるおおそる箸を動かし、うどんを晴也の口に運んだ。

「ど、どうだ？」

勝家は不安そうに聞いてきた。うどんはこの時代にきて初めて食ったが、現代と代わり映えない旨みがあった。一瞬懐かしくて、ホロリと涙が出そうになった。

「……美味しいな」

「そ、そうか！ど、どんどん食べっ！」

流石にもう大丈夫かと手を離すと、また勝家は暴走し、うどんを俺の頬にぶつけまくった。どんだけ酔ってんだよ……と顔を赤くしている勝家を見て思った。

「な、なによ、あんたたち！わたしを差し置いて！」

今度は信奈までもがドタバタと近づいてきた。そして適当に近くにあるご飯を箸で掴んで晴也に差し出した。

「ほ、ほら、次はわたしよ！」

「いてえ!?そこは目だよ目!やめろ!痛い!」

信奈までもがご飯を目に入れる始末。そして間もなく、晴也の顔がご飯粒だらけになった。

「……おまえ、俺の顔をご飯まみれにしてなにが楽しいんだよ!」

「わ、わざとじゃないわよ」

「そもそも、なにをそんなにムキになってるんだ?」

「む、ムキになんかなくてない！」

そして顔を真つ赤にした信奈は晴也のおでこへ頭突き。「いてえ！」と晴也は頭を抱えて部屋の中を這いずり回った。家臣たちは笑いを堪えていたが、遂に吹き出してしまっていた。そんな面白い漫才のようなふざけ合いを見た長政は

「……ふふ、あははは！」と笑い出していた。

笑った長政は男装などしていても充分、美しかった。

「あ、え、も、申し訳ない！」と言つて長政は慌てて頭を下げた。

「なんだ、あんた。そんな顔も出来るのね」

信奈は物珍しそうに長政を見やった。今までは、こいつの仏頂面と薄笑いしか見てなかったもんな。

「い、いや……その」

長政は恥ずかしそうに顔を真つ赤にさせた。以外に恥ずかしがり屋なんだなあ、と晴也は思った。

「長政あ！信奈さまはやらないぞ！信奈さまはあたしのだ！」

「まあまあ。長政どの、お酒はどうですか？」

「え、いや……はい。それでは、いただきます」

半ば酔つ払っている勝家と場の空気を読んだ長秀さんが、長政の隣に座った。やがて

緊張していた家臣たちも、どんどん長政と話すようになっていた。それを見た晴也は僅かに微笑んだ。

（長政……外見はいくら偽っても構わねえから……中身は偽るなよ）

と晴也は静かに心の中で呟いた。

次の日、清洲城。

約束の三日を過ぎ、長政は信奈の意思を確認するため、清洲城にきていた。家臣たちが勢揃いの中、長政は顔を引き締めていた。

「信奈どの。ご決断を」

長政は信奈に頭を垂れた。こころの中では信奈を一人の大名として認めているのだらう。だからこそ、こうして信奈と結婚し自らの味方にしようとしているのだ。

「そうね……」

信奈は立ち上がり、意を決した表情で長政に言った。

「わたしの妹『お市』を送るわ！」

一瞬、場の空気が固まった。

「お市とな？ 信奈さまに妹はいないはずでは？ まさか、隠していたのか？」と家臣たちが驚いていた。もちろん、俺もだ。確かにお市は織田信長の妹だが、織田信奈には津田菅十郎信澄、弟一人だけのはずだ。

「それならば構いませんが、妹君がいらつしやるのですか？」

「ええ、こいつよ！」

信奈は、信澄を前に連れ出した。なぜか姫君の格好をして、化粧までしている。まあ、確かに、美少女には見えるが……

「…………え」

俺を含む家臣たち、長政と信奈以外の全員が固まった。

「なるほど…………美しい。流石織田の姫君ですね」

長政——！ そいつはダミーだ！ 替え玉だよ！ 本当はバカ殿なんだよ！

と口に出したらおそろく信奈に斬り殺されるので、心の中で叫んだ。

「それでは、お市どの。行きましょう」

長政は相手が女なら、おそろくイチコロの笑みを浮かべた。もちろん信澄はそんなもの見てもときめかないようで、おろおろと怯えていた。

「あ、姉上え」信澄のか細い声が聞こえる。もちろん信奈は知らんぷり。家臣たちも黙る

しかなかった。

（な、なんつー酷い姉だよ……だが、信澄は女の振りをし、長政は男の振りをしている。性別逆転の結婚……。おそらく、長政は同じ女だと思っっている信澄を襲うなんてことはしないだろう……。よし、大丈夫だ！）

なんとか頭で理解した。長政ならおそらく危険は少ない。

信奈も『長政なら安全だ、信じられる』と理解したからこそ、信澄を送ったのだろう。それでも信奈は不安気な表情だったが。

長政と護衛の侍たち、そしてお市となった信澄が輿に入り「えっさ、ほいさ」と近江路へと旅に出されてしまった。最後、長政がなにか俺に言いたげな表情だったが、それを振り切るように頭を下げて、帰って行った。

第十二話 天才軍師調略

『差別と区別の違い』

差別と区別の違いは非常に難しい。どちらも悪感しか湧かないからだ。しかし、私たちの周りでは多くの差別や区別がされている。だが、それを差別と区別のどちらに取るかは、その人次第となるだろう。この問題には『合理性』が大きく関係している。要するに、合理的か非合理的かで判断する。例えば『障害者用の施設に対象となる人物を送る』これは合理的があるので区別となる。だが『なんとなくムカつく』『見ててイライラする』などで暴力事件を起こしたのなら、これは合理性がなく、非合理的な問題となる。これは差別だ。以下のように、全ての出来事は合理性で処理される。だが、合理的だからなにをやってもいい。なんていう訳にはいかないのだ。人の心は、合理性で計れるものではないのだから。

清洲城の大広間、尾張当主・織田信奈。同じく三河当主・松代元康。

そして、織田家の家臣たちがズラリと勢揃いしていた。今だに強敵である今川義元を降伏させた勢いはあるらしく、どこか家臣たちの表情は自信あり気だった。対して元康の家臣たち……と言っても二人しかいないのだが、片方の男は晴也と同年代であろう青年で、静かに座っていた。対して片方の女は、勝家といい勝負となるであろうスタイルだった。女はそわそわとして落ち着かない様子だった。

「姫さま。やはり同盟交渉の場でそのような格好は……」

長秀が心配するのも無理は無い。相変わらず信奈の服装は、いつもの『うつけ姿』だ。ちなみに元康の格好は、目が悪いらしく南蛮渡来の眼鏡を着用。そして自覚しているのかなんなのか、たぬき耳とたぬき尻尾を付けていた。だか、服装はきっちりとした正装であるため、信奈よりは数倍マシである。信奈の姿を見た、元康の家臣の一人である女がムツと頬を膨らませた。まあ、当たり前だ。自分の主が下に見られている、なんて思っただろう。

織田と松平が戦になれば、おそらく僅差で織田が勝つだろうが、上洛に関係ない戦で兵を無駄にするとなると上洛自体が難しくなるだろう。だから、信奈としてもこの同盟は成功させたかった。

だが、それでも元康はその姿を見てブルブルと震えていた。犬千代から聞いた話によると、元康は織田家に囚われていた頃、ほぼ毎日信奈にいじめられていたらしい。かわいそうだなと思つたが、どうやら犬千代曰く、それこそが信奈の愛情表現らしい。過激過ぎて笑えないが……

「この度は会見のお誘い、ありがとうございます〜」

元康は小さな体を折つて、深々と信奈に頭を下げた。

「なにいつてるのよ。尾張も三河も、同盟を結ばないとやっていけないでしょ」

その通りである。三河は相変わらずの小国。更に直ぐ東には『甲斐の虎』武田信玄。

戦国最強と歌われる武田騎馬隊を率いる武田信玄は『越後の龍』と言われる宿敵・上杉謙信との勝負に忙しく、そして三河を強敵と考えていないため、今はまだ放つておかれている状態だ。

「えへへ〜。そうですね〜」

とぼけているようだが、腹黒そうな笑いには裏があるように考えられる。そういうところは、正に『たぬき』と言えるだろう。

広間に静かな足音が鳴つた。

「お茶をお持ちしましたです〜」

光秀だつた。

ういろうと一緒にお茶を持ってきたようだ。光秀は桶狭間では道三と一緒に留守番だったものの、最近は織田家に仕官しようと考えているらしい。周りに気が利くし、剣術も鉄砲も十二分に使いこなせるため、信奈からも一目置かれ始めているようだ。光秀は最初に元康の家臣たちにお茶を出そうとした。信奈は「気が利くわね」と労いの言葉をかけようとした、その時。

「いたっ」

あり得ないことに光秀が裾につまづいて転けた。しかし、手にはお茶。前には元康の家臣。

これから起こる結末は一つ。晴也は余りにも予想外の出来事に、ぽかんと口を開けた。

「あっ」

誰が声を漏らしたか分からないが、その言葉と同時にバシャー!という音を立ててお茶いよくお茶が二人にかかってしまった。

「あ、あつい!?!」

「も、申し訳ないですっ!?!」

自信満々の表情から余裕が消え、光秀の顔が真っ青になった。女の方は飛び跳ねたが、もう片方の男は「あ、いえ、大丈夫ですよ」と苦笑い。

「うう……生涯の恥じです……」

光秀はぺたりと座り込んで土下座を始めた。こんな間違いを光秀がすることは、もう二度とないだろう。

(これはフォローしないと……)

「申し訳ありません。着替えをお持ちします」

晴也も頭を下げ、フォローに入った。

「いえ、そちらもワザとではないでしょうし、大丈夫ですよ」

そう言うとも男は笑った。おそらく元康を一人にさせないため、ここに残りたいのだろう。

「心配しなくても大丈夫です。二人とも、着替えて来てくださいます」

しかし元康は意外なことに、二人に退場するように薦めた。

「し、しかしっ!」

女は声を荒げた。元康はまだ震えが収まらないようだが、それでもなんとか笑顔を作ると、続いて男のほうを見た。男は少し考えた様子だったが、やがてうなづいた。

「……わかりました。それでは、お言葉に甘えて」

「そ、颯馬(そうま)!!」

「数正(かずまさ)。ここは元康さまの言う通りにしよう。すみません、案内して貰えま

すか？」

晴也は深々と頭を下げると、二人と共に広間を出て行った。元康の考えは、五月雨晴也の調査である。実際に『服部半蔵』から、桶狭間の件を聞き、純粹に興味を持った。運良ければ織田家を出奔して、松平家に来てもらいたい。なんて考えているのが、元康らしかった。

「あ、え、わ、わたしもです〜！」

光秀も慌てて晴也たちを追った。

「本当に、申し訳ありませんでした」

光秀と俺はもう一度、深々と頭を下げた。二人には高そうな着物を用意し、部屋を貸して着替えをもらった。

「いえ、もう大丈夫ですよ」と男は逆に申し訳なさそうに、女は若干の怒りが籠ったようにため息を吐いた。

「わたしは、天城颯馬（あまぎそうま）と申します。こちらの相方は石川数正（いしかわかずまさ）です。以後、お見知りおきを」

石川数正……晴也はその名を聞いたことがあった。

酒井忠次と共に徳川家康の片腕として活躍したが、小牧・長久手の戦いの後に徳川家を出奔して豊臣秀吉に臣従した……と歴史ではそうなっているが、現在でもなぜ徳川家から出奔したかわかっておらず、謎多き人物として有名である。

しかし、もう一人の天城颯馬と言う名は聞いたことがなかった。目立った才が無い武将だったのか……？一応気になったため、それとなく聞いてみることにした。

「お二人は昔から……？」

「はい。わたしたち二人は、元康さまが人質となっていた頃からお仕えしております」と言うことは、おそらく二人とも俺と余り年は離れていなそうだな。

「おい、わたしのほうが元康さまと長い付き合いだぞ!」

「あー、はいはい。確かに、三日程おまえのほうが仕えるの早かったよな」

「そうだ、わたしが元康さまのことを一番にわかっているんだ!」

「……すみません。こいつ元康さま大好きなんで」

頭を掻きながら数正を宥める颯馬に、なんだか共感を持てた。しかし、この数正と言

う人、どこことなく勝家に似ているかもしれない……

「別にわたしたちに敬語を使わなくても良いですよ」

不意に颯馬はそんなことを言い出した。晴也や光秀、数正までもが驚いていた。

「いや、しかし……」

「これからは同盟国の同志となるのです。敬語は止めたほうが連携を取りやすいし、歳もさほど離れていないでしょう」

ただ人が良い青年とは違うようだ。大分頭の回転が早いらしい。正に知将、と言った感じだった。

「……つと、そろそろ戻りましょう」

元康の家臣って、こういう腹黒そうな人が多いのだろうか……少し警戒が必要かもなと晴也は思った。

俺たちが戻ると同時に、会見は終了した。どうやら尾張の商人には八丁みそを安値で

売るようにと、そして尾張との境にある関所で八丁みそに関銭をかけるのを禁止にしたらしい。

……どんだけ尾張人は八丁みそ大好きなんだよ。

しかし、これで東は元康が待ち受け、西は信奈が受け持つということ、尾張と三河の同盟締結が成った。そして織田には近江の浅井とも同盟が成り立っている。これは大幅に織田軍が動きやすくなったことを意味するのだ。

同盟会見終了後、元康たちは急いで三河に帰って行った。しっかりと内国をまとめつつもりなのだろう。

それから間もなくのことだった。

「本格的に美濃攻略を始めるわよ！」

信奈がそう宣言した。足軽たちの戦意が上がっている今がチャンスと見たのだろう。確かに斎藤義龍は道三に比べれば容易い倒せるはず……だが、晴也は不吉な予感しかして来なかった。

残念ながら、晴也の想像は当たってしまった。美濃侵攻の際、見事に敵の術中に嵌り身動きが取れなくなり、あえなく撤退。見事に調子に乗った鼻っ柱をへし折られ、戦意もガクンと落ちてしまった。

連戦連敗が続く中、決死の覚悟で挑んだ……が。

「敵の工作により、この先侵攻不能です！」

小姓が信奈にそう告げると、信奈は悔しそうに歯噛みをした。

「くっ……以外通れる道は無いわ……！全軍、撤退！」

またしても戦闘が無いまま撤退となった。伏兵など忍ばせて置けば、おそらく織田軍はめちやくちやとなるだろう。だが、義龍軍の足軽一人も確認出来なかった。

織田軍は尾張、清洲城へと帰還した。

「悔しい！なんで勝てないのよ！」

信奈は悔しそうに地団駄を踏み始めた。

「道三……やっぱり、あいつか……？」

「あいつとな？」

「惚けるなよ。竹中半兵衛だ」

「な、なぜ知っておる!?!美濃が隠して来た天才軍師の名を!」

「あんたより有名人だもん。当たり前じゃん」

わ、わしより……と道三は柄にもなく落ち込んでいた。それを見た光秀にきつく睨ま
れてしまった。

「誰よそいつ。聞いたこと無いわ」

「竹中半兵衛……わしを遥かに上回る天才軍師じゃ」

家臣たちに緊張が走った。一代で美濃をまるごと奪ってしまうような狒々ジジイ以
上の知力を備えているのだ。そうなれば、美濃を落とすのは困難。

「だが、あやつは無駄な血を好まん。信奈ちゃんともわかりあえると思うがのお……」

確かに、今だに織田軍は戦闘を行っておらず、戦死者はいなかった。幾らでも奇襲出
来るタイミングは合ったはずなのに。

「……義龍には勿体無いやつね」

実際、義龍は半兵衛の力を十二分に理解しているのだろう。だからこそ、自分で扱
うのが怖い、手に持つ強火は自らにも燃え移るのだ。ましてや、ろくに顔を見せないなら
尚更だ。どうしたものか……と皆固まった。今いるこの中で、一番であろう軍師の道三

を超えるのだ。力押しでは、今まで通り軽く受け流されるのがおちだろう。だからと言つてこのまま手をこまねいていても、織田の天下などいつになるのやら。

「んじや、仲間にしちやおう」

晴也はそんなことを言い出した。

「そんなやつが仲間になつたら最高だろ。今の織田軍には、間違いなく必要な存在だと思ふがああ」

「なるほど……じやが、いくらお主でもあやつが『落とせる』かの?」

「?変な言い方するなつて。大丈夫だ、任せろ」

信奈はすこし考えると、やがて口を開いた。

「そうね……じやあ、半兵衛の調略はあんたに任せろわ」

「ほくら、犬千代。鮎だぞ鮎」

晴也と犬千代は長屋で井ノ口名物の鮎料理を食べていた。犬千代は、なにも言ってい

ないのについてきた。まあ流石に一人じゃ不安だったので、ありがたい。

「……美味しい。もぐ、もぐ」

「しつかり食って、織田家のやつらみたいにな、デカくならないとなく」

「……犬千代だつて、小さくない」

そう言うのと、犬千代は晴也の頬をぎゅーとつねった。

「いだだだだだ。な、なに勘違いしてるんだよ。俺は身長の話をしたただけだぞ？」

「なら、いい」

犬千代はなにを勘違いしたかわからないが、顔が赤かった。ふうーとため息を吐いた後、晴也は鮎を口にくわえた。

「さて……そろそろ行くか」

「道、わかる？」

「ああ、ここら辺の地形は大体把握した」

そう言うのと晴也はツンツンと自分の頭を突ついた。事前に十兵衛に聞いた道のりと近くの店、稲葉山城が見える角度、など詳しく教わった。十兵衛に晴也、どちらも頭の回転が早いため、一分経たずに話が終わった。

「んじゃ、行こうぜ」

俺たちは半兵衛の屋敷に足を運んだ。思った通り人氣が無く、霧も濃いため視界を良好とは言えない。そしてすっかり晴れていたと言うのに、周りの大きな木々により、太陽光が遮られてしまっていた。

「なんか……お化け出そう」

犬千代が晴也の袖を掴んだ。意外に怖がりなのかな？と思つたが、相変わらず無表情なのでよくわからなかつた。

門を開けようと手を伸ばす。だが、逆にあちらから開いた。

「うおっ!」

晴也が声を出すと同時に、あちらからも驚きの声が聞こえた。

「お主ら、何者じゃ!」

開かれた門から、身分が高そうな侍が出てきた。流石に警戒されるよな、と思ひ晴也は懐からとある秘密道具を取り出した。

「道三どのからの命で参りました」

俺は秘密道具・『道三に書いてもらった書状』を手渡し、頭を下げた。その書状をぺらぺらと見た侍は、いかにも年寄り臭くため息を吐いた。

「全く、道三さまにも困つたものだ……入るがいい」

男は警戒を解いたようで、すんなりと中に入れてくれた。

「あんた、何者だ？」

「わつちの名は安藤伊賀守守就（あんどういがかのみもりなり）。美濃三人衆の筆頭であり、道三さまの右腕だった男よ。今は楽な隠居の身じゃがな」

「なるほど……道三の右腕だった、ってことで義龍に信用されねえんだな」

ほお……と安藤は感心した表情を浮かべた。

「半兵衛は幼き頃から両親を失っておる。わつちは半兵衛の育ての父なのじゃ」

なるほど……半兵衛を寝返らせるには、この安藤とか言うおっさんも必要となつてきそうだな。しかし、まだ半兵衛と会ったことも無い以上、そんなことを考えていても仕方が無い。

「さて、それでは半兵衛の部屋へ案内しよう。命が惜しくば、無礼を働かぬことだ」

そう言うのと安藤は薄気味悪い笑みを浮かべた。この人も腹に一物持つてそうなおっさんだな……と晴也は思った。一瞬、毘の可能性を疑ったが『虎穴に入らずんば虎子を得ず』だ。毘だとしても、あえて乗つてやろう。

晴也と犬千代は、奥座敷にある半兵衛の部屋へと案内された。

「お初にお目にかかる。俺が竹中半兵衛重虎だ」

なんと大胆にも座敷の真ん中に、長身の青年が一人、ごろりと寝そべっていた。

「お、おお…」

余りにも堂々としていたので、こっちが呆気にと取られてしまった。しかし、ついに姿を見せた天才軍師・竹中半兵衛。歳は三十歳ぐらいだろう。狐のような細い顔に釣り上がった長い目は、独特の雰囲気醸し出し、まさに正体不明の陰陽師だ。肌は白く、木綿筒服を羽織っていた。

「俺の名は五月雨晴也だ。こっちは犬千代」

「そうか……なるほど……」

半兵衛は長い目を更に細くし、まるで品定めをするような目で舐めまわした。

「ふむ……よくここまでお越しなされた。みたらしだんごと粗茶をどうぞ」

半兵衛の手から、どこからともなく出てきた粗茶とだんごを積み上げていた。

「……」

「さき、遠慮なさらず」

と半兵衛は二人の前に差し出してきた。おいしそう……と犬千代はだみそんごに手

を伸ばそうとした。だが、それを晴也は手で制した。

「……晴也？」

「……おい、竹中半兵衛。まずはあんたが口にしてみるよ」

「ほう、なぜだ？」

「……この臭いは……みそじゃねえよ。みそはこんな香ばしそうな臭い出さねえ。それなんでこんなにホクホクしてるんだ？……これじゃ、まるで糞だぜ」

晴也の指摘に、半兵衛は顔を沈め……そして、

「くつくつくつ、あーははははははははははっ！」

人が違ったように笑い始めた。整った顔が崩れ、口が化け物のように大開きになっていた。それを見た晴也は、腰の木刀に手をかけた。

「てめえ、簡単に化かせると思うなよ」

「おもしろい……！」

半兵衛の妙にとがっている口元からヒゲが生え、尻からは尻尾が。更に大きく開かれた口元からは、牙が見え隠れしていた。美形だった半兵衛の顔は、すっかり狐となつてしまった。

（くそつ、これじゃ妖怪じゃねえか。木刀なんて効くのか……？）

しかし、晴也の疑問は一瞬で解決した。

「……………えいつ」

ぐさっ！という妙に生々しい音とともに、半兵衛はこーんと鳴いて、倒れてしまった。晴也は急いで半兵衛のもとへ駆け寄ったが、既にピクリとも動かなくなっていた。

「お、おい犬千代！殺してどうするんだよ!？」

「相手は妖怪。説得は無理」

「そ、それはそうだけど、このことがバレたら信奈の評判はガタ落ちだ!」

「……………しまった」

どこをどう見てもこの状況はヤバイ。信奈はうつけどころか、他国の軍師を暗殺した卑怯者と呼ばれてしまう。諸国の大名が信奈を危険視するのは必須。

「い、犬千代。蘇らせろ」

犬千代は槍でつんつんと突つき始めた。

……………。

……………。

……………。

「返事が無い。ただの屍のよう」

「仕方ねえ。だったら教会で生き返らせてもらおう……………じゃなくて！本気でヤバくないか!？」

「……あうう……や、やつぱりいぢめるんですねえよ……」

「いやいや！いじめないよ、そもそも君は何者!?半兵衛の小姓かなにかかな?」

女の子は泣き止まず、まだぐすんぐすんと泣いていた。やがて、小さな口をおそるおそる開いた。

「……べえです」

「……え?」

「……竹中……半兵衛です」

第十三話 天才軍師調略・完

『人が生涯を賭けても解けない問題』

人が一生賭けても解けない問題とは。それは簡単だ。人間、死後はどうなるのか。實際死んでみても、死人に口無し。死人からはなにも聞けない。いや、聞こえていないだけかも知れないが。人は誰しもが、いづれ死ぬ。必ず起こる出来事だというのに、誰もわかっていない。誰しもが身近に感じる『死』。あなたは死んだらどうなるか、知りたいと思うだろうか。わたしは知りたと思うが、非常に怖い。知ってしまったら、この世界で今、生きている意味を無くしてしまうかもしれないのだから。

「い、この子が……あの竹中半兵衛……？」

その小さな体のどこに、信奈率いる織田軍を幾度も押し退ける力があるのか。晴也は疑問だった。確かにその青白い肌は、史実通りの病弱という特徴と一致していた。それでも、こんな泣きべそをかいてるこんな幼い子が……？

「くすん。い、いぢめないでください……」

「わが主は幼い頃からいじめられっ子でな。初対面の相手に不意打ちをして、自分をいじめめる人物かどうかを試す癖があるのだ」

いつのまにやら復活した、竹中半兵衛の影武者・前鬼が晴也たちに説明した。説明した後は、くーんと鳴いて消えてしまった。しかし、随分と難しい性格だ。簡単にハイハイと動くような子ではないのだろう。

「……めんどろ」

「……ひええ」

「犬千代。脅かすなって」

槍をちらつかせ始めた犬千代を制しし、晴也は半兵衛に微笑んだ。それを見た半兵衛は

一瞬泣き止んだが、またくすくすんと泣き出してしまった。

「えつと……半兵衛。なにも俺たちは君を脅かすつもりで会いに来たんじゃないんだ」

「じゃ、じゃあ……」

「半兵衛。織田家に来ないか……?」

え……?」

晴也の単刀直入の言葉に、半兵衛は言葉を失った。

「え、えつと……そ、それはできません」

半兵衛はなんとか言葉を絞り出した。それでも晴也は動ぜず話を続けた。

「君は好きで斎藤家に仕えている訳じゃない。あくまで、あの安藤っておっさんのために仕えているはずだ」

「は、はい……叔父さまのためなのが大半の理由です……よ、義龍さまは大男なので、かなり怖いですから……」

「だったら、おっさんと織田家に来てくれないか?もちろん安全は保障する」

半兵衛は斎藤家、というより安藤個人に恩を感じているはずだ。だったら安藤と半兵衛、両方を織田家に引き込めれば良い。だが……

「そ、それでも、やはり斎藤家……義龍さまへの義があります……」

やはり、そう簡単にはいかない。半兵衛は義を重んじる。例え最高の環境が用意されても「さあ、裏切れ」といって裏切れるような子ではない。

「うん……確かに義も大事だと思うが……こんなところで、寂しくないか?」

「そ、それは、大丈夫です……お友達がいまますから……くすん」

「友達……う？どこに？」

こんなさつぷう景なところで、半兵衛のような子が友達と言える人物がいるのだろうか。

「え、えつと……う、後ろに……」

半兵衛は晴也の後ろを指さした。それを見た晴也と犬千代は後ろを振り向く。

「……ちよ、ちよつと半兵衛ちゃんっ!?!なんで言っちゃうのよ」

振り向くと後ろには町娘の服装の女の子が。そこまでは良かった。茶髪が入っている長い髪を、無造作に整えていないのも別に気にしなかった。容姿も美少女の分類に入るほどだった。

ただ問題なのは……

「な、なんで浮いてるんだああああ!?!」

その女の子はまるで幽霊のように、ふわりと浮いていたのだ。

「えへへ。ごめんね、驚かせちゃって」

女の子はペこりと頭を下げ、音も立てずに正座した。……もちろん、浮いているので空中でだが。

「……あ、あの、幽霊さんかなにかで？」

晴也はおそるおそる聞いてみた。

「あつ、そうそう！わたし、幽霊なのよね」

女の子は軽々しく、てへっ！と舌を見せた。

（ま、まさか妖怪と幽霊を同時に見る日がくるなんてな……）

「えつと……どうしてここに？というか、し、死んでるの？」

「うん。わたしはただの町娘だったんだけど……。馬に轢かれたみたいで」

自分が死んだという話をすると、少し沈んだ表情になったが、それでも直ぐに笑顔を戻した。

「名前は……？」

「ゆら、ピチピチの十六歳ですっ！」

「あ、ああ。俺は五月雨晴也」

「……犬千代」

とりあえず由来の熱気に流されつつ、俺たちも自己紹介をした。

そして犬千代は珍しそうに由来を観察し、槍でちよんちよんと突き始めた。

「おい、犬千代っ!？」

「あ、大丈夫です。わたし、見ての通り透け透けなんで！」

槍が脇腹に貫通しているのに、そこからは血も出さず、痛みもないようだった。由来は自分の胸に指を押し込んだり、壁にめり込んだりしていた。

「やっぱり……本物……」

「はいっ！残念ながら」

またしても、てへっ！とどこかのアイドルのような笑顔を見せた。なぜ幽霊なのにこんな前向きなんだろう。

「ゆら。なぜ君はここにいるんだ？死んだら、そうなるものなの？」

晴也は人間は死んだら終わりだと思っている。いや、もちろん天国と地獄があるかも知れないが。死後はどうなるかなど、この時代でも現代でも、おそらく、生涯をかけて考えても解決出来ない問題だ。

「うーん。ただ単に、半兵衛ちゃんがかわいいからです！それと、なんで自分がこうなっているかわかりません。他の幽霊なんて、会ったことありませんし」

えらくあつさりと答えられてしまった。この子が特別なのだろうか？死んだのに、な

「ぜか幽霊になつて化けて出る……考えつくことは一つである。

「もしかして『未練』とか、あつたりする?」

『未練』と言う言葉を聞いた瞬間、由来はあきらかに目が泳いだ。「そ、そんなものありませんよ」と引きつった笑いをした。

「……そうか。まあ、なにか手伝えることがあれば言つてくれ」

その言葉に由来は勢いよく頭を縦に振った。余程その話題について触れられなくなかつたようだ。

「さあて、帰るか。犬千代」

晴也は満足したように立ち上がった。

「……晴也?」

「半兵衛とゆら、ここで楽しくやってんだろ?俺たちが邪魔したら、それこそ半兵衛に悲しい思いをさせちまうだろ」

人の幸せを身勝手な理由で壊すほど、酷いことはない。そんなの、戦国時代では通じない理屈かも知れない。それでも晴也は、その心を持ち続けようと決めていた。

「は、晴也さん……」

「気にするな。あ、だけど半兵衛。こつちだつてそれなりに背負つてるものがあるんだ。

次の戦……容赦はしないぜ」

このことと戦は別物だ。悪いが、信奈を天下人にすることを諦める訳にはいかない。この戦乱の世を治められるのは、戦いの連鎖を引き起こした古きシステムをぶち破る風雲児。織田信奈しかないからだ。

「……は、はい」

相当怖いことを言っているはずなのに、不思議なことに半兵衛は恐怖を感じなかった。

「おまえも、早く成仏しろよ」

「えー。成仏しちゃったら消えちゃうよお」

「それは知らん」

晴也と犬千代は部屋を出て行こう襖に手をかけた……だが

「五月雨氏！大変でござる！」

逆にあちらから襖が開かれ、五右衛門が飛び込んで来た。

「うわっ！どうした五右衛門!?!」

五右衛門の情報はこうだった。

『半兵衛に謀反の疑いがあり。釈明のために半兵衛自ら登城せよ。さもなければ、安藤守就を処刑する』

「そ、そんな……」

「バカが……！半兵衛がいなきや、美濃は終わりだぜ」

半兵衛の悲しそうな顔を見た晴也は、ムカついた。こんな『義』を大切にする子が、謀反なんて考えるものか。

「き、きちんと話せば……わかってくれるはずです」

半兵衛は涙声で呟いた。

「ここまでやるつてことは……多分、義龍は本気だぜ。それでも行くのか？」

「は、はい……叔父さまを見捨てる訳には……」

犬千代は「そんなに甘くない」と言い、由来も「危ないよお」と慌てふためいていた。それをみた五右衛門は、密かに耳打ちをしてきた。

「時間を稼ぎ、安藤氏を捨て置かれよ。さすれば半兵衛は義龍へ遺恨を抱き、五月雨氏にお味方いたちゅ」

五右衛門の言葉に、晴也は目を細めた。

「おい……………本気で言ってるねえよな？」

「……………そ、それは」

五右衛門は全身の毛が逆立つような感覚に襲われた。ただ睨まれただけだというのに、こんなにも恐怖を感じるなど……………と五右衛門は震えた。

「五月雨晴也が、そんな手を使うとでも？」

「……………思わないでござる」

「正解だ。五右衛門、犬千代、ゆら、俺は半兵衛と共に稲葉山城に行くぜ」

晴也の言葉に全員が驚いた。因縁の敵を助けるというのだ。放っておけば、勝手に処刑され、美濃が攻略しやすくなるというのに。

「……………晴也……………甘すぎ……………でも」

「全く……………そう言うと思ったでござる」

「え、わ、わたしも行く〜！」

全員が晴也に賛同した。

「ぐすつ……………あ、ありがとうございます」

そう言うのと、半兵衛は涙を流した。もちろん恐怖の涙などではなく、感謝の涙だった。

半兵衛が登城し、晴也も半兵衛の小姓として通してもらった。

当然ながら、義龍含め美濃三人衆と家来たちが晴也と半兵衛の周りを囲んでいた。

「た、竹中半兵衛、参りました」

「お、おなご!? しかも子供つ?!」

「馬鹿な、半兵衛は男であつたぞ!!」

今まで影武者である前鬼にしか会つたことがなかつた家臣たちはざわつき始めた。義龍は数回面識があるので「ふん」と鼻を鳴らしていた。

晴也は半兵衛のやや後ろに座っていた。犬千代と由来、五右衛門には安藤救出を頼んでいる。時間を稼げばそれで五右衛門たちが安藤を救出してくれる。

「む、謀反などしません……」

「ならば、なぜ織田を全滅させなかつた。全滅させる機会はいくらでもあつたはずだ」「無用な血を流させないため……」

「バカ者! 敵を滅ぼすのが軍師の務めであらう!」

義龍に一喝され、半兵衛は「すいません、すいません」と頭を下げた。思わず晴也の手に力が入る。

その後も「義龍が一喝し、半兵衛が謝る」とループが繰り返された。もう何度続いたかわからなくなり、次第に半兵衛は泣き出していたが、それでも義龍は話を止めなかつた。

「やはり、きさき「しつげえんだよ!このだるま野郎!」な、なにつ!」

遂に晴也が怒りをあらわにし、立ち上がった。

「バカはてめえなんだよ!その耳は飾りか!?!なんで半兵衛の言っていることを聞こうとしない!」

「な、何者だ!」

「五月雨晴也……半兵衛の小姓だ」

一瞬、織田家と口から出そうになった言葉を、なんとか飲み込んだ。

「小姓風情が……」

「そうやって話を聞こうとしないから、いつまで経っても、道三つていう壁を超えられねえんだよ!」

その言葉を聞いた義龍は「貴様ああああ!」と顔を真っ赤にし、まさにだるまとなつていた。

「斬れつ!こやつを斬り捨てろ!」

侍達が一斉に抜刀し、晴也と半兵衛を取り囲んだ。晴也も木刀を抜いたが、兵力差は

圧倒的である。

兵士たちが晴也たちに襲いかかろうとした、次の瞬間、

「五月雨氏！安藤氏は救出したのでござる!!」

煙幕とともに五右衛門が出現した。

（流石！相棒、いい仕事しやがる！）

「逃げるぞ、半兵衛！」

晴也は半兵衛を手を掴もうと手を伸ばした、だが半兵衛は逆方向から強引に引つ張られた。

「半兵衛！貴様だけは逃がさん。儂の下で一生働いてもらおう！」

それは義龍だった。大きな手が、半兵衛の小さな腕を掴んでいたのだ。

「ふざけんな！半兵衛は道具じゃねえんだよっ！」

晴也は木刀で義龍に襲いかかろうとした。だが、その必要は無用だった。

なぜなら……

「きゃああああああ!!」

半兵衛が黄色い悲鳴をあげた。すると半兵衛の懐に入っていたお札が乱舞した。

「十二天将、見参！」

初顔の式神たちが次々と現れた。なんと総勢十四体！

「あ、あやかしだあああああ！」

「む、謀反だあああああ！」

「こ、こんなのに勝てつこない！逃げろおおおお！」

義龍はその光景に唾然とした。その間にも兵士たちは巨大な式神たちに追い回され、大混乱と化していた。

「悪いが、わが主は返してもらおう」

「な、なにっ!?!」

いつの間にやら、狐に化けた前鬼が半兵衛を両手に抱えていた。義龍が手に抱えていたものは、いつのまにか小さな小鬼となっていた。

「あ、ありえん！」

「ありえねえことをやるのが、天才軍師なんだよっ！てめえは器と力をはき違えてるってことに、気づきやがれええええええ!!」

晴也は義龍の顔面を、あえて木刀ではなく拳でぶん殴った。義龍の体は、竹とんぼのように回転し、逃げ回っている兵士たちに激突した。

「や、やり過ぎたかな……」

もはや、稲葉山城の敵は全員逃げ出していた。式神たちも、次第に消えていった。

「は、半兵衛……おまえ、チートキャラだったんだな」

「……こゝ、こゝまでするつもりは……」

稲葉山城の広間はきた時と一変、嵐でも通り過ぎたようにボロボロとなっていた。その光景をみた五右衛門は「あ、ありえないでござる……」と呟いた。確かに、戦国時代に陰陽師なんていうチートキャラがいたのは驚きだった。一人で城を乗っ取ることが出来るほどとは……。

「……はう」

突如、半兵衛は膝から崩れ落ちた。

「お、おい半兵衛っ!?!」

半兵衛は「ほこほと咳き込み、顔も赤かった。晴也は半兵衛のおでこを触る。

「熱があるじゃねえか……五右衛門!城から出るぞ!」

「しかし、最早この城は我らが「知るかつ!」……ふう、そう言うと思ったでござる」

晴也を背負い、右衛門とともに無人の城から脱出した。

稲葉山城から少し離れた河口湖。

晴也、半兵衛、五右衛門が到着。すでに待ち合わせていた安藤とゆらが合流した。

「すみません。わたしのために……」

だいぶ調子が戻った半兵衛が申し訳なさそうに頭を下げ始めた。

「いや、気にするな」

「でも……わたしを見捨てていれば……」

「あんな城、いつでも取れるよ。それに、そんな方法で取った城なんか、信奈は受け取らないと思う」

「晴也さんは……なぜ織田家に？」

「そうだなあ。無駄な血を流させたくないから……かな」

「……天下取りを目指せば、犠牲は出ます」

「ああ、わかってるさ……それでも俺は、自分を捨てたくない。助けられるものは、全て助けたいんだ」

そう言って晴也は微笑んだ。半兵衛は、その笑みを生涯忘れることはない。半兵衛の心では、なにかが消えて、なにかが生まれた。

「む、無茶苦茶です……」

と、口では悪く言ってしまう。

「ああ、無茶苦茶だ。だが、無茶だろうがなんだろうがこの先、俺は一生変わらねえ。なにかを得るためになにかを捨てるような……そんなやつには、なりたくないんだ」

半兵衛はその時、確信した。

自分の気持ちが高鳴るものなのか。

この胸が高鳴るものなのか。

体が暑くなってしまうのはなんなのか。

「晴也さんは……ほんもののおバカさんです」

「……そうだな」

「おバカさんは……放っておけないです……」

「え？」

「あなたを……守ってあげたいです」

晴也はえ？え？と連呼しながら周りを見渡すが、安藤にはニヤニヤと笑われ、ゆらには「いけく！やつちやえく☆」と言われ、なぜか犬千代と、五右衛門までもがイラついているように、むむむとわめいていた。

「竹中半兵衛は、織田家ではなく、五月雨晴也さんにお仕えいたします」

こうして――

織田家には最高の逸材が仲間になると同時に、犬千代たちには恋敵？として仲間となるのであった。

第十四話 美濃統一

『人の器とは』

私は人の器とは、他人に優しくなれることだと思う。そんなことは簡単だ、そう言い切れるだろうか。どんな人にも優しく平等に対応出来るだろうか。それは非常に難しい。人は心の中で人間関係の優劣が決まっている。「あいつとは仲良くしてるから」「あいつとは関わりたくない」などの優劣の順位が決まっているらしい。ではどんな人にも優しくするとは無理ではないだろうか。無理ではない。難しい問題も、悩めばいづれ解けるものだ。私たちは、やれば出来ることをやらないにすぎない。

稲葉山城には、晴也たちがいなくなり無人となった城を奪還した斎藤義龍とその家臣

たちが返り咲いていた。家臣たちは遂に義龍が怒り狂うのでないかと心配していたが、義龍は静かに目をつぶったまま口を開かなかつた。

「……よ、義龍さま？」

美濃三人衆の一人、稲葉一鉄が声をかける。晴也の鉄拳により、義龍の頬には見ていて痛々しほどの跡が残っていた。

「……一人にさせろ」

そう言うとも再度、義龍は口を閉じた。

「ぎよ、御意」

静かな気迫に圧され、家臣たちはそそくさと退室した。やがて義龍は目を見開き、自分の頬を触った。

「……器……力」

晴也に殴られた時の台詞が未だに頭に残る。殴られたことよりその台詞が一番、義龍には効いていた。

「儂は……間違つて、おらん……！」

しかし、それでもまだ義龍の心には響かなかつた。義龍は道三から自らが追い出した守護大名・土岐氏の世継ぎだったことが告げられると、無性に腹が立った。今まで尊敬や敬愛が一変、恨みと変わってしまったのだ。そこから彼は屈折してしまった。

義龍は拭いきれない気持ちを押しさえつけるように、自分の痛々しい頬をピシヤリと叩いた。

晴也たちも尾張の清洲城へと舞い戻っていた。そして一息入れる間もなく、美濃攻略の会議へと出席していた。

「墨俣が全ての鍵を握るわね」

信奈の言う通り、天下の名城・稲葉山城を落とすには戦略的要地である墨俣に楔を打ち込むことが必要だ。いくら天才軍師・竹中半兵衛がいなくても、あの斎藤道三があちこちから手を入れて完成させた難攻不落の城、稲葉山城。普通に攻めても、容易に追い払われてしまうだろう。さらに、義龍には道三仕込みの夜襲戦法がある。近くに本陣を置いたからと言って攻めやすくなるとも言えない。

「墨俣に城を建てるしかないわね」

桶狭間と同様、織田信長公の野望での超有名であり、重要イベント『墨俣一夜城』。

尊敬する木下藤吉郎さんが、織田家の重臣が失敗している城作りを、僅か一夜で成功。これにより、義龍の子である龍興の家臣たちは続々と織田方に裏切り、孤立無援となった稲葉山城を織田軍が攻め落とす。

と、史実ではこのようになっていた。

「しかし、それでは多くの血が流れるぞ」

無論、義龍として無能ではない。強引に建てようとするれば抵抗を受けるだろう。稲葉山城とは目と鼻の先、激しい戦いとなることは間違いない。

「そうです。墨俣に城なんか、建てられるわけじゃないです」

と、明智十兵衛光秀が指摘する。光秀はもちろん美濃のことを知り尽くしている。いかに墨俣に城を建てるのが難しいか、わかっているのだろう。

「むう……」

信奈も頭を捻る。

やがて思い出したように晴也の隣に座っている子、元美濃の天才軍師・竹中半兵衛を見やった。

「半兵衛。あんたはどう思う？」

半兵衛は信奈に名指しされ、ぶるぶると小刻みに震え始めた。皆、半兵衛に視線を向ける。……やばい、あの時みたいに式神で暴走したらどうしよう……と考えていたが、

やがて半兵衛はおそるおそる口を開いた。

「……す、墨俣を制するものが、美濃を制す……不可能を成し遂げてこそ、天下人の器かと」

半兵衛は弱々しいながらも声を出す。信奈は満足したように、首を縦に振った。

「なるほど。さすが天才軍師ね！　ハルなんかじゃなく、わたしに仕えなさいよ」

晴也は「おいおい、あんまり無理言うなよ」と声をかける。だが、もちろん半兵衛の返答は聞くまでもない。

「……し、しし、失礼ながら……わ、わたしは！　晴也さんを支えていくと誓いました！」
まるで半兵衛は晴也の新米妻のような言葉を述べ、場の空気が一瞬凍りつく。

「お、おい！　どういうことだ、ハルっ！　まさかあたしだけでは物足りず、この子にも……!?!」

「ちよ、変な言い方するなよ!!　半兵衛にもお前にもなんもやってないぞ!!」

意味を理解した半兵衛は顔を真っ赤にし、そしてなぜか勝家が怒り出した。そんな勝家だが、信奈に「うるさいわね」と言われ、すかさず黙る。

「……なら半兵衛、ハルはわたしを支え、あんたはハルを支えるのよ。わかった?」

「は、はい。ありがとうございます!」

そう言う信奈は、半兵衛の頭を優しく撫でた。今ので半兵衛の信奈に対する不信感

は大分なくなつたんだらうな。こうしていれば、信奈が非常に優しく見える。まあ、あくまでこうしていればだが。

続いて信奈は、半兵衛の叔父である安藤伊賀守就に顔を向けた。

「安藤なんとか」

「ははっ！」と安藤は頭を下げた。まだ、しっかりと名前を覚えてもらえてないらしい。彼自身は半兵衛のような晴也専用の軍師ではなく、織田家自体に身を置いている身だ。

「あんたはどう思う？」

「恐れながら、わっちも半兵衛と同じ意見。墨俣は美濃の攻略の要となるはずです」

安藤も半兵衛と同じように、墨俣は重要な要となることを理解していた。故にそこに城を建てるのがどれだけ大変なのかもわかっている。

「だったら……墨俣築城作戦を、六に命じるわ」

それを聞いた勝家は「合点承知！」とその大きな胸を叩いた。信奈が勝家に命じたのには理由がある。一つは晴也が戻ってくるまで、動きたくてもじつとしていた勝家に、本来以上の力を期待したため。二つ目は、晴也の特別扱いについてだ。近頃家臣たちから「信奈さまは晴也どのをヒイキされていらつしやる」などの噂が立ってしまった。なので、古参の勝家に命じてその噂を払拭しようとしていた。

忠義の猛将・柴田勝家は勢い良く直ちに出陣。勝家の部隊は足軽の数が三千人、さらに城普請のための人足が五千人。大半が非戦闘員であるが、合計八千人の大部隊である。墨俣に入り、部隊は直ちに築城を開始。しかし、義龍とて無能ではない。戦略も戦術も要所をしっかりと理解している。城を建て始めて間もなく、義龍軍は築城阻止のため出陣し、墨俣で戦となった。

「ええい、怯むなあ〜っ！」

信奈の思惑通り、勝家はいつも以上に槍を振って暴れた。流石『鬼柴田』。初めはなんとか耐えていたが、義龍としては絶対に死守したい要所である。次第に戦いは熾烈さを増していく。

そんな光景を見慣れた尾張兵ならいざ知らず、人足部隊は命大事と逃げたし始めたのだ。人足がいなければ築城は不可能である。勝家の制しも耳には届かず、部隊は大混乱と化してしまった。

「お、お前ら、逃げるな〜!!」

こうなつては、いくら勝家でも収集がつかず……結果、失敗に終わった。

落ち込んで戻った勝家は、信奈に平伏して惨状を報告。

「うう……申し訳ありません。姫さまあ」

「うくん……そう簡単にはいかないわね」

勝家は相当悔しかったようで、既に半泣き状態だった。さらに勝家は「あたし、腹を斬ります！」と言い出す始末。

「まあまあ、勝家はがんばったよ。後は任せろ」

晴也は勝家の肩に、ポンと手を置いた。辛い時に男から優しくされると言うのは効くものである。しかも、男とは戦以外でのプライベートでの付き合いがなく免疫がない勝家にとってはなおさらだ。

「ハルううう!!」

「うわっ?!抱きつくな!」

勝家は晴也に抱きついた。勝家は加減を知らない馬鹿力。殺人級のハグをしてくるのだ。全力で抱きついてくる勝家に、晴也の体は悲鳴を上げる。

「痛い痛い!体が軋んでるよ!」

晴也の体からボキボキと嫌な音が鳴り始める。いくら言っても、勝家は「は、初めて男に抱きついた!」とニヤケていて意味がわからない。遂に晴也は「ぎゃああああ!!」

と悲鳴を上げた。

「ああ、もう！うるさいわね!!」

我慢を切らした信奈に蹴られ、晴也はそれを利用してなんとか勝家の呪縛から脱出した。

「で？なに？あんた、策でもあるの？」

「イタタ……一応な」

「悪いけど、守備兵は三千程度しか貸せないわよ」

まだあんたが完璧に信用されている訳じゃないんだから……と付け足した。織田家中には晴也のを尊敬する者もいれば、疎む者もいる。それでも晴也は気にしなかったが。

「いらん。俺と川並衆だけで十分だ」

「はあ？あんた、川賊なんかと手を組んでるんだっけ。どっちにしても小勢に変わりわないわ」

「まあ、そこんところは自分で補うよ」

「へえ……で、策っていうのは？」

「ああ、一夜城だ」

「いい、一夜城!」

家臣たちから驚きの声と同時に無謀だと言う声上がる。だが、そんな声を聞いても晴也は自身満々に答えた。

「一晩の内に城を建てれば、邪魔なんか出来ねえよ」

信奈は呆れたようにため息をつき、すこし微笑んだ。

「いいわ。あんたに任せる」

「わるいな。そして、もう一つ……秘策があるんだが……」

晴也は家臣たちにもその作戦を説明した。作戦内容は失敗すれば信奈の命が危うくなる。とても危険な賭けであった。

「そ、そんな上手くいくはずが……」

「ありえん……一歩間違えれば、全滅の危機ではないか!」

家臣たちから反発を受ける中、信奈だけがおもしろそうにうなづいた。

「おもしろいわね。その賭け、乗るわ!」

「悪いな、恩に着るぜ」

「その代わりに……あ、あんまり無茶するんじゃないわよ……」

「え、聞こえな」

顔を赤くした信奈の回し蹴りが飛んできたのは、言うまでもない。

晴也は見慣れたボロボロの我が家に戻り、五右衛門たち川並衆を招集した。もちろん川並衆だけではないが。

「酷いじゃないですか。わたしもお城行きたかったですよ」

「そ、そんなことしたら、信奈さまが驚いちゃいます」

「……確かに」

美濃から付いてきた幽霊・ゆら。そして晴也が調略した天才軍師・竹中半兵衛。そして同じ信奈お気に入りへの犬千代。

「おまえ、ここが安心するっていつてたじゃん」

「ええ。まあ、そうですけど」

そう言つて由来は頬を膨らませた。こいつは町娘らしく、こういう少し汚いぐらいのところがち着くらしい。

「そろそろ、俺たちを侍にしてくれよ。坊主」

と川並衆が晴也にガンを飛ばし、すごんでみせた。無論、晴也はその程度でビビるよ

うな玉ではない。

「ああ。話は俺が通す。だからこの仕事、絶対生きて成し遂げるぞ！」

「おお!!と男たちの気合を入れ直す。晴也はニヤリと笑うと本題に入った。

「んで、作戦を説明するぜ」

晴也は川並衆にも同じように作戦を説明した。

「……って言うことだ、悪い。半兵衛、五右衛門。頼まれてくれるか？」

この作戦には二人は欠かせない。二人は黙ってうなづく、足早に家から出て行つた。

「す、すげえな」

「まさに博打勝負……」

と流石の川並衆からも緊張が走る。

「どうする。やっぱやめるか？」

晴也は最後の確認にもう一度、意志確認を行った。

「やめねえ。俺たちが親分をお守りせず、誰が守るってんだ！」

「そうだ！親分のお肌には！」

「傷ひとつ！」

「おわせねえ！」

流石、天下のロリコン集団。晴也は嬉しそうに微笑んだ。

「すまん……皆の命、俺に貸してくれっ！」

最後に、晴也は深々と頭を下げた。

晴也たち川並衆は、電光石火の勢いで木曾川を渡った。そして事前に説明した『ツィバイフォー工法』を使う。現代では当たり前だが、建物の部品を別の場所で作り、それを現地に運ぶ。後は組み立てて終了だ。この方法はたしかに短時間で城や砦を建てられるが、防御力が問題だ。責められれば簡単に崩れ去ってしまうかもしれない。

「急げっ！義龍に気づかれたら終わりと思え！」

気づかれたら終わりと言う極限の緊張感。人間、命懸けになればなんでも出来るというのは本当らしく、川並衆はこれまで以上の作業スピードをみせた。そして、作業は予想外なほど順調に進む。

幸運なことに墨侯には深い霧が立ち込み、稲葉山城からはまだ見えていない。

もう少しで完成！……だが、夜が開けると同時に、霧がなくなり稲葉山城から丸見えになってしまった。

ほぼ完成している一夜城をみた義龍は急ぎ自らも出陣し、迂回せず木曾川を船で抜けてきた義龍軍は怒涛の勢いで押し寄せた。この拠点の重要さを理解しているからこそだろう。

（まだだ……！まだ、早過ぎる！）

晴也は櫓から飛び降り、五右衛門から貰ったたどんを投げながら斬り込む。今、五右衛門も半兵衛も別行動となっているため、ここにはいない。

なんとか敵を木刀で薙ぎ払い、暴れまくった。

「……まだか、半兵衛！」

そう呟いた時だった。

「た、竹中半兵衛！参りました！」

式神軍団を率いる竹中半兵衛が到着。しかも、半兵衛だけではなかった。

「稲葉？伊守一鉄良道！晴也どののお味方いたす！」

「氏家ト全直元も、晴也どのにお味方いたす！」

半兵衛には美濃三人衆の二人の調略を頼んだ。安藤を含め、これで美濃三人衆全員が織田に降ることになった。二人は『今孔明』と呼ばれる半兵衛を崇拜している。その半

兵衛がペコペコと頭を下げれば、もちろん選択の余地はない。二人の裏切りにより、義龍軍からも裏切り者が出始めた。これで、両軍の戦力はほぼ互角。しかし、士気は明らかに晴也軍が有利。それでも義龍は諦めず、六尺五寸の体を使い足軽を薙ぎ払う。

「まだまだ！まだ儂は!!」

槍は扱いは勝家並である義龍は、自らも敵陣に斬り込む。それに釣られ、美濃勢も士気を取り戻し始めた。これでは両軍も被害が計り知れない……そう思われた時。

「斎藤義龍！ わたしはここよー」

なんと大将・織田信奈が木曾川の向こう岸に立っているのではないか。しかも取り巻き兵士たちはそれほど数ではなかった。唯一、厄介そうなのは信奈に近くに立っている『鬼柴田』のみであろう。義龍にとっては、これはまさに千載一遇のチャンス。

「皆の者、続け！あのうつけ姫の首さえ取れば、この戦は勝ちだぞー」

義龍は晴也たちを無視し、乗ってきた船に乗り込み、川を渡り始めた。義龍軍も大将首を取るという最高の手柄を立てるため急ぎ船に乗り込み、後を追う。

……晴也はまず胸をなでおろした。ここで木曾川を迂回されて責められたら、どうしようかと考えていた。

「鉄砲隊！撃てえ!!」

まず一手目。

信奈の鉄砲隊が、向かってくる義龍軍を迎撃するため火を吹く。木曾川の流れは激しく、落ちないようにするのがやつとであった義龍軍は、抵抗することも出来ず、鉄砲の餌食となつていく。

「晴也どの、遅くなりました」

晴也に下へ、多くの弓矢部隊を率いて長秀が到着。晴也が黙つてうなづくくと、長秀部隊は川岸に立つ。

「弓矢部隊、放てっ！」

これが二手目。

鉄砲にはやや劣るものの、絶好的的になつている義龍軍には多大な威力を發揮する。長秀部隊は義龍軍の背後から矢を放つ。前には鉄砲隊、後ろには弓矢部隊。激流の中では身動きが出来ず、早く向こう岸について信奈と戦うしかなかった。

「落ち着け！ あのうつけ姫の首さえ取れば！」

それでも義龍はまだ諦めなかった。もう少しで向こう岸に渡れる……そう思った時、近くの船が爆発を起こし始めた。

「な、なんだこれは!?!」

そして最後の三手目。

それは『炮烙筏』だった。炮烙筏とは炮烙玉の応用品である。触れれば爆発するとい

う代物。これは光秀と五右衛門に頼んだ仕事である。上流からどんどん流れてくる炮烙筏に、義龍軍の船は次々と沈んでいく。激流の中では炮烙筏は脅威と言えるだろう。

前方からは信奈率いる鉄砲隊。

後方からは長秀率いる弓矢部隊。

横からは船を沈没させる炮烙筏。

「くっ！稲葉山城からの援軍はどうした!!」

義龍は稲葉山城にも守備兵をたつぷりと残していた。信奈が稲葉山城と墨俣の二つに兵力を割けてくると踏んでいたからだ。もしその予測が外れ、自分が劣勢に陥った場合は援軍を出すように指示していたはずだ。なぜ、援軍が来ないのか。義龍は稲葉山城は見やった。

「あ、浅井だと……!」

なんと稲葉山城は浅井の旗印によって取り囲まれていたのだ。信奈は同盟国となった近江に援護を申し出ていた。「あくまで、援護だけでいいわよ」と言われ、あまり数はいなかったが、尾張と近江の二国から責められている。そう思っただけで、義龍軍は士気をなくしていた。それに浅井の包囲網を潜り抜け、主君を助けに行くような主君思いの家臣は残念ながら義龍軍にはいなかった。

「……終わり……か」

義龍と数人の足輕は既に信奈側の川岸に渡り終えたが、義龍軍はもう散り散りとなつており戦どころではなかった。義龍は手に持つ長槍を手放し、降伏を宣言した。

その後、主が降伏した稲葉山城の兵士たちも織田に降伏した。

こうして信奈は、悲願の美濃統一を成し遂げたのだつた。

信奈は早速奪つたばかりの稲葉山城を居城に置き、戦後処理を始めていた。

「で、斎藤義龍。なにか言うことはある？」

「儂はそなたに敗れたのだ。首を落とせば良い」

大分、稲葉山城で会つた時とは感じが変わったな……と晴也は思った。あの時は常に余裕がなく、力を欲していたようだったが……敗戦して、逆に開き直れたのだろうか。

「そうじゃ。そやつは顔に似合わず知恵者。後々、天下盗りの障害となるだろう」

と道三も口を挟んできた。

「めんどくさいわね。仲良く隠居すれば？」

「ありえん!!」

信奈の問いに数秒経たずに道三と義龍が同時に声を荒げた。晴也は「意外と気が合

うじやないか」と思わず笑いを溢してしまい、道三と義龍の二人に睨まれてしまった。

「もういいわ。義龍は、放逐する」

「な、なんだと!?!」

またしても道三と義龍の声が被り、遂に晴也は吹き出してしまった。隣に座っていた光秀からエルボーを食らい、なんとか声を封じ込める。

「情けをかける気か……」

「ならん!こやつを今逃せば、そなたの命を狙うは明白ぞ!」

「うるさいわね!決めるのはわたしよ!」

「お、愚か者めっ!」

道三はそれだけ言い捨てると体を震わせ、信奈たちの前から姿を消した。

「親父どのの言う通りだ……どうなっても知らぬぞ」

義龍も堂々と広間から立ち去っていった。険悪な空気が広間全体を包み込む。

「もう……気が短いわね」

おまえにだけは言われたくないな、と晴也は思った。

稲葉山城からの帰り道、清洲へ戻る街道で、野良犬を撫でてゐる義龍を見つけた。大男と野良犬と言うのは思った以上にシユールな光景だった。

「おい、義龍……」

義龍は「ぬおっ!？」と飛び跳ねた。そして恥ずかしそうに顔を出し真つ赤にさせた。稲葉山城の時と同様に、まさにだるまだ。義龍は背を向き、顔を隠す。

そして落ち着きを取り戻し、晴也へと振り返った。

「儂は……負けた。なぜだ?」

「おまえは、色々背負い過ぎたんだよ。土岐氏の世継ぎ? 道三は本当の父じゃない? そんなことどうでもいいだろうが。大切なのは、自分自身の心だろ」

晴也は親指を立ててトントンと自分の胸を叩いた。

「心……」

「ああ。それにな、おまえが気にしてる器っていうのは、意識して身につけるものじゃねえ」

「な、なら、どうしろと!」

「知らん。とりあえずおまえは今、一国の主じゃねえんだ。答えは自分で見つけてみる」
それだけ言うと、晴也は黙って歩き出した。しかし、不意に歩みを止める。

「もし……居場所がないなら俺の下へ来いよ。少し見る位置を変えるだけで、今まで見えなかったものが見えてくるはずだ」

晴也は振り返り、義龍に手を差し伸べた。

海のような心の広さ……全てを飲み込む器……これが……

「器か……」

「あ？ なんだって？」

「……ふん。儂を使うのは難しいぞ」

義龍は、晴也の手を取った。

——こうして義龍は斎藤義龍ではなく、一人の武士として、晴也の仲間となったのだ。

第十五話 未練は人それぞれだ

私たちが必ず経験するものの一つ『未練』。未練とは、後から「こうしておけば良かった」と考える気持ちだ。未練は人を過去に縛りつける。今現在やっていることに、集中出来なくさせるのだ。いくら未練を感じても、タイムマシンでもない限りそれを完全に払拭することは不可能だ。私の人生、振り向けば未練だらけだ。だったら、開き直って生きてくしかないだろう。それに、未練だって無駄なものではない。次こそは……と、人を確実に学習させているのだから。

「さて、どうすっかな」

「うむ……」

五月雨晴也は迷っていた。そう、新たな仲間になった『斎藤義龍』をどうするかにつ

いてだ。いや、もちろん仲間にするのは確定。しかし、家に戻るために清州へ向かって、義龍が清洲にいるとなれば、色々と面倒な騒ぎが起こりそうだ。かと言って、こいつを放っておく訳にもいかない。義龍は現代で言う有名人や芸能人の類なのだろう。こいつが下手な真似をしたら、今度こそ打ち首となるのは明白。しかも、放逐された義龍が晴也の仲間になっていることがバレるのも非常に不味い。こいつが大手を振って町を歩くためには……

「有名人……そうだ……！ 変装だ!!」

「変装……？」

そう、よく現代の有名人がサングラスや帽子、マスクなどを使って顔を隠すのと同じように、義龍にもそれをすれば良い。

「……清州はいいのか？」

「いいんだよ、いつでも行けるんだから」

そう言つて義龍の肩をポンポンと叩いた。

……と言う訳で、晴也と義龍は美濃の城下町へ舞い戻り、評判の良い越後屋の暖簾を潜っていた。店内には晴也たち以外の客がいないようで、好都合である。

「なんか選べよ。金は余るほどあるから」

今のところ金に困ることは皆無だ。なぜなら晴也には、完全に会得した晴也流の金儲け術がある。

「うむ……これはどうだ」

義龍は売られている商品の一つ。三河の松平元康が付けているような、高級そうな南蛮風眼鏡を手を取った。手に取るだけなら良かったのだが……

パリンッ！

力が強過ぎたらしく、レンズを粉々に粉碎してしまった。

「ぬ、しまった」

「しまった……じゃねえよっ！誰が金払うと思ってるんだ、誰が！」

「ちよつと、お客さん」

ニタリと、引き攣った笑いをしている店の主に、もちろん反論など出来る訳もなく

……

「「すいません」」

結局、商品の代金を払うことになってしまった。やはり見た目通り、中々の値段だっ

た……。

「てめえ……」

「こ、これはどうだ!?!」

次に義龍は、色々な意味で痛そうな眼帯を手を取った。

「眼帯……?」

「ああ、それは奥州にいる……えっと、伊達なんたら眼帯らしいんだよ」

奥州……伊達?……伊達政宗のか!?!と一瞬釘付けとなったが、その割には小汚くて作りが荒い。一目でわかる、模造品の類だ。しかし、やはりこの世界では政宗は女体化しているのだろうか。

「とりあえず、付けてみれば?」

晴也の言われるがままに、義龍は眼帯を装着した。しかし、義龍は顔が大きい割に目が小さい。片目を隠した程度では、バレてしまうのは確実だろう。

「却下」

「むう……」

次に義龍は、左右対称に金色の龍が描かれている紅色の仮面を手を取った。今までよりは、随分まともそうだ。

「お!お客さん、お目が高いねえ。それは『龍面鬼』って言う名の仮面なんだよ。なんで

も、龍の如き力を得るらしいんだよねえ」

嘘くさい話だな、と晴也が義龍に耳打ちする。だが義龍は興味津々と言った感じだった。

「五月雨よ！あれだ！あれこそ儂が求めていた一品……!!」

余程この仮面が気に入ったらしい。はしやぐ義龍をみて、それでも元一国の主かよ……とツツコミのを我慢し、代わりに短い溜息を吐いた。

「うーん、まあ、いいか」

ちなみに、この仮面が予想を遥かに超える値段で、俺の財布がすっからかんになってしまったことについては、なにも言うまい。

「ど、どうだ!？」

「お、結構いいじゃん。似合ってるよ」

これはお世辞ではなく、本気で似合っていた。義龍自身も自らのコンプレックスの一つである落書き顔を隠せて嬉しそうだ。これで顔からバレる心配はなくなった。唯一心配なのは、その体だ。義龍は六尺五寸の大男。背丈でバレる心配もない訳ではないのだ。

そんな心配をしながら城下町を歩き始めて間もなく……

「おお、ハル〜!」

「げっ!?! 勝家!?!」

なんと勝家を取り巻きの侍たちを連れて歩いてきた。大方、信奈に城下町の治安維持でも任されたのだろうか。しかし、これは間が悪過ぎる。

「ん? 誰だその大男?」

予想通り、晴也の隣に立っている大男に目をやった。やはりその凶体だけでも目立つてしまうようだ……

「え、えつと……こ、こいつは俺の仲間だ」

義龍も不味いと思ったのか、顔を下に向けていた。幾ら仮面を付けていても、稲葉山

城で会ったばかりなのだ。流石の勝家でも気づいてしまうかもしれない。

「ふくん。どこかで見たような……」

そう言つて勝家は、義龍に近づいていく。義龍は「逃げようか」と目で訴えてきたが「逃げて、その凶体じゃ捕まるだろ」と同じく目で訴える。

とにかく、なにかしなければ……

「か、勝家！」

晴也は義龍の前に立ち、勝家の肩を掴んだ。

「な、なな、なんだよ!？」

「いや、えくと、あの……ええい！俺だけを見てろっ!!」

……結局、俺だけを見てろと言う意味を色々と履き違えた勝家に、顔を真つ赤にしてぶん殴られた。勝家は機関車の暴走して走り去り、取り巻きの侍たちも急いで後を追って行った。

「いつてえ……」

少し腫れてしまった顔をさする。今度勝家に会ったら、女の子はぶん殴るんじゃないかとビンタなんだよ、と教えて上げることになろう。

「すまぬな」

「気にすんな。おまえはもう仲間だからな」

こう言う恥ずかしい言葉を、躊躇わず堂々と言えるのが、晴也の長所とも短所とも言えるところだろう。

「ところで……どこに向かっておるのだ？」

「半兵衛の屋敷だ。そこでおまえを、完全に俺の仲間にする」

そう言つて晴也は、面白そうに微笑んだ。

半兵衛の屋敷に着いた晴也と義龍はもちろん、在宅中の半兵衛に会った。この屋敷は美濃奪取の際に、半兵衛の屋敷として返ってきていた。感が良い半兵衛は仮面を被つていても義龍の正体に気づき、前回と同じように全式神を呼び出そうとした。それを晴也が命懸けで止めた後、義龍と半兵衛を向かい合わせた。

「半兵衛よ。すまんかった」

「えっ?」

半兵衛の予想を裏切り、義龍は畳に自分の額を押し付けるように、深々と頭を下げた。「わ、わたしが裏切ったから……」

「いや、そなたを使いこなせなかつた儂の責任だ。本当にすまぬ」

またしても、義龍は頭を下げた。あまりの変貌振りに、半兵衛は自分の目を疑っていたが、晴也が嬉しそうに微笑んでいるのを見て薄々納得した。

「は、晴也さん。これは……?」

「義龍を俺の仲間にする。つてことは、おまえの仲間にもなるんだぜ、半兵衛?」

半兵衛は一瞬驚愕の色を浮かべたが、今の義龍をみてうなづいた。

「そうですね。義龍さまは、わたしたちの……な、仲間です」

その言葉を聞き、義龍は感激の涙を浮かべる。

「よし、皆入れっ!」

晴也がパンパンも手を叩くと、襖が開き、五右衛門率いる川並衆と犬千代が流れ込んできた。

「元一国の主だがなんだが知らねえが、よろしく頼むぜ!」

「そうだ!一緒に晴也の坊主と親分を支えていこうぜ!」

「齋藤氏、よろしくでござる」

「……よろしく」

事前に晴也が命じて待機させていた川並衆、そして五右衛門と犬千代が義龍を取り囲む。皆、新たな仲間を喜んでるようだった。そんな光景をみて義龍はなにが起きたかわからない様子だったが、やがて静かにうなづいた。

「この齋藤義龍!名を『龍面鬼』と改め、五月雨晴也どのお味方申す!!」

川並衆から歓声が上がる。半兵衛も五右衛門も、納得したようにうなづいた。なにも殺し合いばかりが戦ではない。そう痛感した晴也だった。

その夜、半兵衛の屋敷では義龍の仲間入りを祝って宴会が行われた。義龍は酔いに酔って、まさかの腹踊りを披露し、川並衆を楽しませていた。上下関係がない宴会は初めてだったらしく、義龍は直ぐに酔ってしまったのだ。だが皆楽しそうだ。それだけで十分。

「晴也さんはすごいですね」

隣に座っている半兵衛がそう呟いた。顔が赤くなっているのは、酒気に当てられたせいだろうか。

「いや、すごくねえよ。俺は道を示したただけだ。進んだのはあいつだよ」

晴也が微笑むのをみて、半兵衛はより一層顔を赤くさせる。半兵衛の気持ちや憧れや尊敬だけではないことを、まだ晴也はわかっていない。

「どうしたんだよ、半兵衛？ さっきから顔が赤いぞ……？」

「な、なんでも……ありません」

半兵衛は自分のものどかしい気持ちを感じながらも、それを上手く伝えられないことを悔やむ。

「……晴也」

同じく隣に座っている犬千代が袖を引っ張る。頬を膨らませているのはなぜだろう。

「おう、なんだ？」

「……なんでもない」

半兵衛と同じように顔を赤くさせ、顔を逸らす。俺、なにかしたんじゃないか？ と晴也は今までの出来事を振り返るが、残念ながら心当たりはない。

「晴也氏、斎……龍面鬼はこれからどうするでござるか？」

更に、晴也の前に五右衛門が座った。

「ああ、川並衆に入れてやってくれ、もちろん、一番の下っ端でいいから」

「御意」

「いつもすまないな、五右衛門。おまえがいてくれて、本当に助かるよ」

そう言つて晴也は笑顔を見せた。それを真正面で受けてしまい、五右衛門の顔がみるみる赤くなつていく。

「あう……」

「なんだよ、おまえも顔が赤いぞ？ どうした」

「な、ななな、なでもないでござやるうう」

いつも以上に嘸みまくつた五右衛門は、さらに顔を赤らめていた。

「なんだよ、おまえら酒に弱いんだなあ」

ロリ三人を見事にあしらう晴也に、遂にキレたロリコン集団の川並衆が襲いかかるのも、言うまでもないことだろう。

「くそお……どうして俺が殴られるしかねえんだよ」

勝家の鉄拳による腫れがまだ引かないと言うのに、川並衆から殴られまくり、さらに腫れが増えていた。なんとかその場から逃げたして、屋敷を出ていた。とりあえず、散歩まがいに屋敷の周りを歩き始めた。その屋敷の周りで町娘姿でふわふわと浮かんでいる幽霊を見つけた。

「ん……ゆら」

声をかけようと思ったが、ゆらの表情をみて、それは止めた。いつも笑顔の彼女とは違っていた。なにかを恨むような、血走った目をしていたのだ。そんな目を見てしまつたら、ふわふわと低空飛行で飛んでいく由来を追わずにはいられなかった。

「あいつ……」

晴也はゆらを追い、城下町まで歩いてきていた。夜中であつたため、幸いにも誰にも会わずにここまで来られた。しかし、途端に彼女は足を止めた。一瞬、バレてしまったかと覚悟したが、どうもそうではないようだ。

「ゆら……?」

思わず口から声が漏れ、ゆらが振り向く。

「え……晴也さん?」

ゆらは、いつもの表情に戻っていた。しかし、ここまで来たら知らぬ振りには出来ない。

「黙ってつけていたのは悪いが……なにやってるんだ、おまえ」

ゆらはしばらく無言で考えていたが、意を決したように口を開いた。

「あの男ですよ」

「……え?」

「あの男が……わたしを殺したんです……」

そう言つて由来は、ひょうたんを抱えて、よたよたと歩く一人の男を指さした。

「おまえ……馬に引かれたんじゃねえのか?」

「すみません。嘘です……」

「おまえ、それじゃ未練ってのは……」

ゆらは悲しそうに顔で、うなづいた。

ゆらは、事情を話してくれた。

ゆらの父親は由来が産まれる前に他界していて、家はゆらの母親の二人で住んでいた。ある日、母親と共に野菜を買うために外出していたらしい。その時に、酔っていたあの男にぶつかり、なにも弁論させたくないまま斬られてしまったそうだ。母親の必死の看病も虚しく、ゆらは息を引き取った。

「こんなわたしじゃ……なにも出来ないんです」

そう言ってゆらは涙を流した。

「……、」

その涙をみた晴也は、黙って男の下に足を進めた。無論、木刀を抜刀して……だ。後ろからゆらがなにか言ったが、晴也には届かない。

「ん……なんだよ、おま……グガッ!？」

男は続けて言葉を出せなかった。晴也の木刀が、男の腹わたをえぐっていたからだ。
「死ね」

男は苦痛を苛まれながらも、なんとか刀を抜いた。だが、晴也は容赦なく木刀で男の首を打ち、男は刀を落としてしまう。いつもの晴也なら、それを足で蹴飛ばして、抵抗出来ないようにするだけだった。

「ぐはあっ!？」

だが、この時の晴也はそれを自らで拾い上げ、男の肩に突き刺していた。余談だが、その気になれば心臓を一突きすることが出来ただろう。

「な、なぜわたしを……」

男は苦痛により酔いが冷めたらしい。

「てめえが酔って殺した女に頼まれたからな」

そう言って晴也は男の肩に刺さっている刀をぐりぐりとねじ込み始めた。

「がああああああ!! 許してくれ! あの時のことは悪かったと思っっているんだ!! わたしだって、子供がいるんだ!! 許してくれえ!!」

大声で叫ぶ男だったが、残念ながら誰もそこを通りかからなかったし、晴也は止めもない。しかし、晴也にとってある意味一番厄介な相手が駆けつけて来た。

「お、お父ちゃん!!」

「せ、誠太っ！逃げろっ！」

まだ小学五年生くらいだろうか。上手く状況を把握出来ないものの、自分の父親が窮地に立っていることはわかった。男の子供だと思われる男の子は、晴也に飛びかかった。

「お、お父ちゃんを離せよっ！」

「知るか」

無論、晴也より全然小さい子供が晴也を止められる訳もなく、晴也は男の子を蹴飛ばした。

「おまえが悪いんじゃないよ。悪いのはこの男だ。残念だったな」

男の肩から大量に出血し、男は気を失った。だが、まだ命の灯火は消えていない。晴也は刀を抜かない。

「お、お父ちゃん!!」

地面に這いつくばる男の子は何度も何度も晴也に飛びかかり、何度も何度も蹴飛ばされた。遂に男の子も、鼻から血を流しながら気絶した。

「も、もう止めてよっ!!」

そこに、ゆらの声が響く。

「なに言ってるんだよ。おまえの未練をなくしてやろうって言ってるんだぞ」

「……違う……わたしの未練は……違う!!」

そう言つて晴也を止めよとするが、無論、晴也に触れも触られることも出来ない由来では止めることは出来ない。

「こいつを許すのか?」

「許さない……許さないけど……殺さなくたっていい!!わたしの仇なんか、取ってもらわなくてもいい!!」

「だったら……おまえの未練はなんだ?!!」

「わ、わたしの未練は――――」

夜が明け、朝となる――――

ここはとある民家。

「これを……」

五月雨晴也は、そこにいた。

「へ、これは……!!」

晴也が手渡した物、それは由来が言ったことを書き示した手紙。執筆者は晴也だが、書かれていた言葉を正しく愛しき娘・ゆらのものであった。この手紙は由来の気持ちが表示されていた。

もしかしたら……仇討ちしてくれ、と書いてあるかもしれない。

もしかしたら……復讐なんかしないで、と書いてあるかもしれない。

どちらにしても、ここで手紙の内容を書くのは無粋なことである。

「む、娘は……!!」

「……はい」

母親は、全てを悟ったように大粒の涙を流した。

「ありがとうございます」

「後、これが生きるものに必要な全てとは言いませんが……」

そう言つて晴也は、今まで自力で集めた財産の半分以上である百両を、母親の前に置いた。

「へ、こんなに……」

「彼女からの願いでもあります『お母さんが元気に暮らせるように……』と」

その言葉に母親は涙を止めずにうなづき、頭を下げた。

「失礼しました……」

晴也は頭を下げ、家を出て行く。それと入れ違いに、肩に治療が施されている男と、小さな男の子が入ってきた。

「本当に……申し訳ございませんでした……!!」

男は家自体には上がらず、入り口の地面に頭を擦り付ける。そして男の子も、精一杯頭を下げていた。

俺は結局、この三人がどうなったのかは知らない。

もしかしたら……母親は男を絶対に許さず、仇討ちをするのかもしれない。

もしかしたら……男は酒を断絶し、その子供とよくゆらの家に顔を出すようになったのかもしれない。

ただわかることは、ゆらが幸せに笑える結果だった……と言うことだけだ。

第十六話 天下布武の名の下に

私たちは常に『猿マネ』して生きている。理想の自分を作り上げ、それを演じているに過ぎない。私たち人間は、決して本当の自分を見せない。常に理想の自分を追い求め、その理想像を創り出し、それそっくりりに『猿マネ』する。それがいつしか『猿マネ』ではなく、本当の自分となっていく。私たちは、本当の自分をどこかへ捨ててしまったのかもしれない。

「これで……良かったのか？」

晴也の問いに、一人の幽霊がうなづく。

「ここは半兵衛の屋敷……晴也を含め、半兵衛、犬千代、そしてゆらぎいた。

「ありがとう、ございしました」

ゆらは一人一人に振り向き、丁寧に頭を下げ、いつものようにニコリと笑った。もう彼女に未練などない。由来の魂をこの地に縛りつけていた未練という鎖は、もう断ち切られたのだ。

「ぐすん……ゆ、ゆらさん」

「半兵衛ちゃん。今までありがとね！」

ゆらは今にも泣き出しそうな半兵衛の頭を撫でた。もちろん、触れられはしない。だが、確かな温もりを半兵衛は感じていた。

「……いきなり突ついて、ごめん」

犬千代が申し訳なさそうに頭を下げた。

「あはははっ！ そんなこと気にしないでいいよ！」

由来の笑顔に、犬千代も安心して笑みを溢した。もしかしたら、これが犬千代なりの場を和ませる冗談だったのかもしれない。しかし、時は残酷だ。ゆらの体が見る見る内に透明になっていく。それを見た半兵衛が泣き出し、続いて犬千代までもが涙を流していた。ゆらも、そんな二人を悲しそうに見つめる。

「お、おい、ゆら……？」

「はい！ それじゃ、晴也さん。お先に、あの世で待ってます！」

「ちよ、ちよっと！ 縁起でもないこと言わないでくれ！」

「冗談ですよ」とゆらは苦笑する。「こんな時に冗談言うなよ」と晴也も思わず涙ぐむ。ゆらは最後に、晴也たちに向かつて親指をぐつと立てた。そして笑顔のまま、霧のように、静かに消えていった。

それからしばらく経つても泣き止まない二人の頭を、晴也は優しく撫でていた。

間もなくして、三人は稲葉山城に呼ばれた。二人の心の状態が心配だったが、半兵衛も犬千代も、もうしつかりと立ち直ったようだ。ゆらも、ただ無惨に死んだ訳じゃない。彼女自身、満足して逝けたのなら幾分か心が和らぐ。晴也もしつかりと気持ちの整理をし、信奈が待つ広間へと向かう。広間では他の家臣たちも勢揃いしていた。晴也たちが

到着すると信奈は満足そうになづき、高らかに宣言した。

「いよいよ上洛よ！京に上り、天下に号令をかける！」

『天下布武』

乱れたこの世を、統一する。

悲願の美濃を手に入れた信奈による、堂々とした天下盗り宣言だった。勝家は「腕が鳴る！」とぶんぶんと肩を回し、長秀は「これからが本番ですね」と溜息を吐きながら、いつも通りの笑顔だった。……などなど、家臣たちは気合十分。

「そして、この城を『岐阜の城』と改名するわ！井の口は『岐阜の町』よ!!」

信奈は『岐阜』に改名するというお触れ書きを、小姓の一人に手渡した。信奈の意図を察した晴也は意地悪そうに、隣に座っている道三に微笑んだ。

「『ぎふ』の城、『ぎふ』の町……いい名前じゃないか、なあ道三？」

道三は「…………ふ、ふん！」と言つて、逃げるように広間から出ていった。その目に涙を浮かべていたのは、見なかったことにしよう。

「た、大変ですっ！」

道三と入れ違いざまに、光秀が転がり込んできた。

「なによ？騒がしいわね」

「申し訳ありません！ですが、これは織田家の運命を左右する分岐点！」

「な、なによ。もつたいぶらないで、早く言いなさいよ」

光秀が持つてきた情報。それは確かにこれからの織田家の運命を決めるものだった。その情報の内容とはこうだ。畿内を支配する松永久秀と三好一党が將軍・足利義輝を暗殺しようとした。だが、賢明と言われる足利義輝は『他日を残す』と言い残し、妹である義昭を連れて、大国である明へと亡命。これにより將軍職を代々務めてきた足利家は事実上断絶となった。また、関東の足利分家も北条の台頭により、既に権威を失っている。これにより、將軍につく者はいなくなってしまったのだ。これでは、この戦乱の世はまとまることはなくなる、と言うことだ。

「まじかよ……」

流石にこの状況は読めなかった。史実ならば、將軍・足利義輝は逃げられずに暗殺される。これにより、足利義昭は朝倉へと身を寄せるが、朝倉は三好一党を討伐する動きを見せず、痺れを切らした義昭は信長を頼る。これにより信長は上洛の大義名分を得ることとなるのだ。

しかし、義昭がいなければ大義名分もなにもあったもんじやない。

「それで、この光秀がとっておきの作戦を考えたです！」

「ふうん。おもしろいわね。言ってみなさい」

光秀は「はっ！」と自信満々に答えた。

「足利家が途絶え、次の將軍軍位継承権を持つ吉良家も今川が滅ぼしました。残るは今川家のみです。そして、今川の姫は信奈さまが人質として匿っています。いくら軽率なお方でも、血筋は高貴。担ぎ立ててしまえばこつちのものです」

義元は織田に降伏した後、ずっと人質生活をしてきたが、出家もせず豪華な着物を着て毎日毎晩大好きなお茶と蹴鞠、連歌などをしながらお姫さま気分で暮らしていた。

なるほど、確かに義元を將軍として担ぎ出せば実害はない。そして義元を新將軍として、京を荒らす松永と三好一党を成敗するという名目で上洛すれば、強敵である武田信玄や上杉謙信は迂闊に手を出せなくなる。これは格式に詳しい光秀だからこそ、思いついた案だろう。

「んじやハル、義元を呼んできなさい」

「え、なぜ俺が？」

「……義元があんたに会いたいって、見張り番の兵にせがみまくってるらしいからよ」と、少し信奈が頬を膨らましていたのを晴也は気づくことはなかった。

義元が人質生活を送っている屋敷に、晴也は足を運んだ。美濃奪取と同時に、義元も美濃へと移ってきた。桶狭間以来会ってなかった晴也だったが、相変わらず元氣そうに庭で鞠を蹴っていたので安心した。やがて、晴也に気づいた義元が駆け寄ってきた。

「晴也さくくん！」

「よお、久しぶつ!?!」

晴也が挨拶を終える前に、義元が抱きついてきた。

「な、なぜ会いにきてくれなかったのですかっ!?!」

「い、いや、色々忙しくて……」

「このわたくしを放置するなんて、ひどいですわっ!」

そう言って涙目で、晴也をポカポカと叩いた。

「こ、こいつ……こんなキャラだったか？人質になって、性格が変わったのか……？」
あまりの変貌振りに思わず瞬きをした。だが実際、義元は変わっていない。変わっているのは晴也に対する態度だけだろう。なんとか義元を引き剥がし、懐から書状を一つ取り出した。

「な、なあ義元。信奈からの贈り物があるんだ」

「？これは……」

晴也は信奈から預かってきた書状を義元に手渡した。

第一条・あんたの將軍職なんてただのお飾りよ。

第二条・天下人はわたしよ。逆らったら誰であろうと成敗するわ。

第三条……第四条……第五条……それは、第五条まで続いていた。

乱暴な筆で、まさに信奈らしい五箇条だった。

「ううう。なんでわたくしばかり」

「まあまあ、信奈だっておまえを嫌いなわけじゃないんだからさ」

「嘘ですわ！いつか邪魔になったら……わたくしを消すつもりですわ！」

確かに、信奈ならやりそうだな……。とりあえず安心させてやろうと思い、言葉を探す。

「……大丈夫だ。信奈がおまえを殺そうと思っても、俺がおまえを殺させないからな」

その場しのぎで口から出た言葉に、義元は頬を赤らめた。仕上げに晴也は言葉を付け足した。

「……將軍にさえなれば、五箇条なんていくらでも改善できるぞ」

晴也の呟きに、義元は「そうですね!」とカン高い笑い声を立てた。そして、義元は嬉しそうに自分のサインを入れてしまった。

こうして、信奈は義元を新將軍に担ぎ出すと言う大義名分を得た。

「さあ、行くわよ! 全軍、京へ!!」

次の日、準備を整えた織田軍が美濃を出発。そこへ同盟国である三河・浅井が加わり、

織田軍は総勢五万となった。三河の軍勢を率いるは、若き知将・天城颯馬。颯馬は晴也に気付くと軽く会釈した。そして良い歳なので駕籠に乗っているが、まだまだ現役の齋藤道三。さらに川並衆を率いる蜂須賀五右衛門、そして新たな仲間となった齋藤義龍、またの名を龍面鬼。ロバ？のような馬に乗って進む天才軍師・竹中半兵衛。このような晴也軍団の姿もあつた。この精鋭軍団を迎え撃つ勢力は、南近江の六角承禎。

「義姉上。観音城はかの稲葉山城に匹敵する難城です。支城を一つ一つ落とすのが上策かと」

浅井長政。お市（信澄）を嫁にした悲恋の美少年。当初は彼がお市の正体に気づき、襲ってくるのではないかと思われていたが、どうやらそうではないようだ。逆に、なにかが吹っ切れたようにさっぱりとしていた。これは義龍並の変貌振りである。お市が信澄だと知る者たちは、もしかしたら長政は男が好きなんじゃないかと言うホモ疑惑を考えたが、なんであれ協力してくれるのならば問題はない。

話を戻すと、この観音城を戦いをどうするかだ。観音城の周りにはなんと十八の支城がある。

「そんな時間はないわ！それに稲葉山城じゃない、岐阜城よ！全軍、進め!!」

長政が呆気にとられる中、信奈は気にもせず馬にまたがった。

信奈が考えた作戦は、自軍を複数の軍団に分ける、同時多方面作戦だった。

第一隊・柴田勝家——

「おおおっ！一番槍はあたしだあああっ！」

勝家率いる尾張兵が支城の一つに流れ込んでいく。使者を送りこみ、交渉でもしてくるのだろう、と安心しきっていた六角の兵たちは大混乱と化している。

第二隊・丹羽長秀——

「さあ、進みましょう」

その勢いに続き、長秀も支城の一つに攻め込む。同時攻略であるため、やはりここでも兵士たちは大混乱だった。

第三隊・明智光秀——

「気をつけやがれです。当たると死ぬです」

目を引く美貌に、似合わない種子島を軽々と使いこなす光秀。敵兵たちは「綺麗な女だなあ」などと鼻を延ばしていた。もちろん、そんな輩は光秀の正確な狙撃により黙らせられる。

第四隊・安藤伊賀守　—————

第五隊・稲葉一鉄　—————

第六隊・氏家卜全直元　—————

この『元美濃三人衆』も、無骨な美濃の兵士たちを使い城を攻略していた。元々優秀な武将たちであるため、それが信奈の下で十二分に発揮されている、

第七隊・浅井長政　—————

「浅井と六角の長き因縁……ここですつ！」

忌々しい六角との因縁を断つため、長政が奮闘。浅井勢が、混乱した六角の兵士たちと交戦。圧倒的に踏み潰した。

第八隊・天城颯馬　—————

「よし、行くぞっ！」

天城颯馬も、元康から預けられた三河の兵士たちを率いて城を攻略。

第九隊・斎藤道三————

「ふんぬっ！ 儂の力を見せてくれよう!!」

彼の力も舐めてはいけない。いくら老兵でも、的確な采配は未だ健在。

第十隊・石川数正————

「颯馬に遅れるな！ 進めっ！」

石川数正、彼女も天城颯馬と同じく元康からの援軍として加入している。彼女は勝家に似た勇将であり、自らも刀を抜刀して敵と交戦する。

第十一隊・森長可————

第十二隊・佐久間信盛————

第十三隊・林通勝————

「手柄はわしがもらう！」

「いや、わたしだ！」

「ええい、邪魔くさいわっ！」

かつては信澄を持ち上げ、謀反を起こした者たちも、今は信奈一筋。織田家の屈強な男大名たちである。

第十四隊・池田恒興————

第十五隊・佐々成政————

「男どもに遅れをとる訳にはいかない！」

更に短髪の佐々成政とポニーテールの池田恒興。二人の姫武将も負けじと奮闘する。

第十六隊・竹中半兵衛————

「ここ、ここは迂回し、左右から挟み撃ちにします」

尾張・美濃兵を少し預けられた程度なのだが、その僅かな手勢でも敵城を混乱へと陥れていた。

第十七隊・五月雨晴也————

「あくまで信奈率いる本隊が観音城を落とせば、それで決まる！無駄に命を使うなよっ

「！」

「「おおおおお!!」」

川並衆、更に道三救出の際に晴也に付き従った若い足軽たち。晴也はその先頭に立ち、味方を鼓舞しながら突き進む。

第十八隊・織田信奈————

「いくわよっ！守りを固める隙なんて、与えない!!」

更に本隊率いる信奈が六角が引きこもる本城・観音城を攻略。

なんと五万の兵を数千ずつの単位に分け、部隊を十八に分ける。これで十八の城を全て同時に攻めることが可能となった。さらに信奈は、一番に城を落とした者には褒美を与えると言言。これにより、兵士たちの士気が最高潮に上がった。

まさか全城を、しかも同時に攻められるとは夢にも思っていなかった六角承禎は、防御を固める暇さえも与えられなかった。六角は、自らの居城であるこの観音城に敵が攻め入るだろうと予測。他の支城を使つての挟撃作戦を考えていたが、その支城さえも攻

められている今では、そんな作戦は意味を持たない。

「……とてもわたしが及ぶところではない」

長政はそう呟いた。

彼はとある機会でお市である信澄の正体を知り、それ以来、二人きりの時は性別が逆転し、本当の夫婦のような仲となっている。無論、信奈の話も聞いていた。やはり独特な武勇伝ばかりで、実際はどれほどのものだろうか……と考えていたが、これほどとは。

敵わぬと見た六角は僅かな手勢と共に、命からがらに伊賀へと逐電。

信奈が落とした観音城を尻目に他の支城も抵抗を止め、次々と降伏する。こうして、世に言う『観音城の戦い』または『箕作城の戦い』とも呼ばれるこの戦いは、幕を閉じた。

第三章 天国と地獄の狭間で

第十七話 織田軍、上洛

人間には『協調性』が必要だ。学校のクラスメートとも、職場の同僚とも、協調性がなければ良い関係は築けない。そして、いくら才ある人間でもスタンドプレーばかり続けていては、いずれ必要とされなくなる。逆に、地味ながらも協調性がある者のほうが、高評価を受ける場合は少なくない。それでも、やはり周囲とどこかズレている人はいるものだ。問題なのは、それを『個性』と言べきなのか、それとも、協調性がないと言べきなのだろうか。

信奈率いる織田軍は、遂に京の都へと入った。「六角承禎が一日で滅ぼされた」と聞き、三好一党と松永久秀は逃げるように、京から兵を退いていた。なので織田軍はすんなりと、京を領地にすることができた。

最初は信奈のあらぬ噂を聞き、不安がっていた京の民たちだったが、「民に乱暴した兵は打ち首！ 銭と米を民から取り立てることも厳禁よ！」

と京の町じゅうに布告。

織田軍の兵はその言いつけ通り、いつさい民に乱暴を働かなかつた。皆、逆らえば冗談抜きで首が落とされるということを理解しているのだ。

「信奈はんは、わいら民の味方や」

「うち、ほれてもうたよ」

「織田家は美男美女ばかりいうのは、ほんまやったね」

応仁の乱以来、京の都に暮らす民は百年に渡る絶え間ない戦と略奪に苦しんでいた。大歓声を信奈が陽気に手を振って応える。そんな信奈の姿をみて、救世主の如く拝む者たち、あるいは涙を流して迎える者たちもいた。

だが、それでも未だに京は安全と言えるほど治安は回復していなかった。三好軍が盗賊まがいの様々な略奪を繰り返したことにより、民たちは飢えていたのだ。

「なあ、信奈」

「……ん？」

そんな光景をみた晴也は信奈にこっそりと耳打ち。信奈は顔を近づけられて、一瞬頬を赤く染めたが、

「いいわね、それ！やりなさい！」

と手を叩いた。

しばらくして、晴也は川並衆を呼び、巨大な鍋を運ばせた。そしてなんと、道中の真ん中で『炊き出し』を始めた。しかし炊き出しといっても、川並衆が仕入れた野菜中心の食材を切つて、洗つて、後は鍋に放りこむというひどく大雑把なものだ。しかし、無論害はないし、より多くの民に配るのには、このやり方が効率が良いと思つたからだ。やがて、どうにも香ばしい匂いに釣られて、さつきまで寝ていた者たちや飢えに苦しむ者たちが、びくつと反応する。

「よっし！皆、食え〜！」

晴也の言葉を皮切りに京の民たちが殺到。我先にと急ぐ民たちに、晴也は料理人らしい割烹着を着て、豪快に大鍋を振るまつた。

「またまだあるからな〜！慌てるなよ〜、慌てるなよ〜」

意外だったことに、今ではすっかり川並衆に溶け込んだ義龍は、不器用なはずなのが、なぜか鍋から茶碗に具材を注ぐ作業はしつかりとできていた。他の川並衆も行動を開始。茶碗を配る物、列を並ばせる者、食材を洗う者。などなど、屈強な男たちが額に汗をかきながら動いていた。

「……す〜いで〜ござるな」

当初は「我らでは無理でござる」と愚痴をこぼしていた五右衛門だったが、川並衆の思った以上の働きぶりに驚いていた。

「おい！前のやつを押すんじゃねえぞ！」

「おら、熱いからな！ゆっくり食べろよ！」

「儂にもこんなことが出来たとは……！」

確かに川並衆も初めは乗り気ではなかったが、時が経つにつれて笑みがこぼれるようになっていた。

「やつぱりな……川並衆だって、こんなやり方はできるんだよ」

汗だくになりながらも笑って作業を続ける川並衆に、晴也は微笑みながら呟いた。

「さて、俺もどんどんやらないとな……」

晴也は慣れた手つきで包丁を扱い、玉葱、大根、人参、魚などを一定の大きさに切つていった。

「それ、もらえるか？」

女の子が茶碗を持って鍋の前に立つ晴也の下へと駆け寄ってきた。

「ああ、どうぞ」

髪が禿の、巫女装束の少女だった。京都人形のように、綺麗な顔立ちをしていた。晴也はその女の子の茶碗に鍋の具を注いだ。

「ありがとう」

表情は変わらず無表情だが、少し口元が和らいだ気がした。

(なんとというか……不思議な子だな……)

そして炊き出しが終わり、飢えていた民たちは生きる活力を取り戻していた。炊き出

しに参加した民たちは、頭を下げたり、拝んだりして帰っていった。かなり忙しかったからだろうか。いつの間にか、もう夕刻となっていたので急いで片付けを始めた。

「……ん、君は……」

民たちが立ち去って行く中、さっきの女の子が晴也をじつ見て立っていた。親からはぐれでもしたのだろうか……と思い、声をかけようとしたが

「おい!!ちよつと待てよ!!」

男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「あ、ちよつと」

女の子はその方向に走って行ってしまった。晴也もなにか不味い予感を感じて、川並衆に後片付けを任せ、その声の方向へと走った。

晴也が駆けつけるとそこには、片目に眼帯をした幼い女の子と金髪で碧い目のシス

ターが、山賊?のような男たちに囲まれていた。男たちはニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべながら、二人に近づいていく。珍しい南蛮人だから、という理由で絡まれたのだろうか。

「ええい、近寄るな!この十二使徒再臨魔界全殺(ボンテンマルモカクアリタイスゴイソード)を喰らわずぞ!!」

眼帯の女の子が刀を抜くが、どうにもちんまりとしていて、恐怖は微塵も感じられない。

「へへっ!南蛮の女は初めてだなあ!」

「俺はあのパードレだ!」

「それじゃ俺は、ガキをもらおう!」

晴也が止めようとした瞬間。

「ならぬ!!」

さっきの巫女少女が声を荒げた。「ああ!」と男たちの目線が、その子へと向かう。だが、巫女少女は決して退かなかった。

「ひのものとのみなら、はじをしれ!」

なぜだかわからないが、その子が発した声に、威圧感に似たなにかを感じられた。思わず男たちが後ずさり。とてもじゃないが、小さな女の子とは思えないほどの迫力だっ

た。晴也も隣に立つ。

「全くだ。みつともなさすぎるぜ、あんたたち」

「う、うるせえ!!」

キレた男の拳が晴也の顔面へと飛ぶ。晴也は拳を避け、相手の胸ぐらを掴んで投げ飛ばした。

「ほら、さつさとかかってこいよ」

「おお、やるじゃないか!この梵天丸も負けてはおれん!!」

晴也の勢いに続けと、梵天丸という女の子も男たちを蹴散らし始めた。シスターがそれを悲しそうに押んでいたが、今はそんな状況ではない。晴也と梵天丸により、男たちは数秒後には地面に伏していた。

その後、晴也は梵天丸という子にひどく気に入られてしまった。シスターにも「お礼をさせて下さい」といわれ、石造りの協会である南蛮寺へと案内された。巫女少女は「もういかなくは。たのしかった、ありがとう」と言い、そそくさと帰ってしまった。なぜか帰り間際に『握手』を求められた。断る理由もないのですが、ひどく心がざわついた。奇妙な感覚だった。

「めずらしいな。これが南蛮寺ってやつか」

「はい。先ほどは助けていただき、ありがとうございます」

流暢な日本語を話すシスターは、ぺこりと頭を下げた。さっきの戦闘では気づかなかったが、この子のスタイルは色々やばい。晴也でさえ、思わず凝視してしまったそれ。今まで見てきた女性の中では、一番の勝家さえも超える巨乳。しかも、体全体が細いから、それがより際立っている。

「ええと、ハルヤさん？わたしはここで司祭を務めさせていただいています。ルイズ・フロイスと申します。先年、ポルトガルから参りました。よろしく願います」

「こちらこそ。俺は五月雨晴也、織田家の武将だ」

「ククク……注意しろフロイス。この男もフロイスの乳目当てに違いない」

そして晴也の膝の上で座っているこの眼帯つ子を梵天丸という。特に説明を求めなくても、自分自身で名乗っているのだから。

「いや、別にそういうわけじゃないが……」

と、完全に否定することはできない。男なら、あの胸に目を奪われるのは当然だろう。むしろ、奪われないほうがおかしい。

「そ、それはその……ええと、む、胸が不自然に大きくてすいません……」

そんな謝り方はみたことないんだが……

「お、大きいことは、何事にもいいことだぞ！」

そう言つて、とりあえず励ます。晴也自体は別に貧乳派でも巨乳派でもない。歳のわりに小さいと悩みを持つ半兵衛や、逆に大き過ぎると悩みを持つ勝家から何度か相談を受けていたが、正直、なぜそこまで胸に固執するのか、よくわからなかった。

「そ、そうですか？ジパングに来てからというもの、皆さんから『牛のような胸』と言われ、『牛の神様』と呼ばれるようになってしまったのですが……」

と、フロイスが涙ぐむ。

「うくん。男は皆、どちらかといえば……巨乳が好きだと思うけど……」

そういつて、記憶を巡らす。確か、胸が大きい女性に男性は弱いと聞いたことがある。

「でも……ヨーロッパでは、胸の大きな女性は悪魔の使いだと……」

「現代だったら、悪魔じゃなくて天使の使いなんだろうけどなあ」

「というか、こんなに一生懸命な女の子を悪魔呼ばわりなんて……ヨーロッパはどうなっているんだ。」

「ゲンダイ？」

「神を信じるフロイスなら、信じてくれるかもしれないな。実はな、俺は未来の日本から来たんだ」

「まあ、未来から、ですか」

「フロイスは特に驚きもせず信じてくれた。いや、本当に信じているのかはわからないが……。」

「ああ。この時代から四百年先くらいの未来だ」

「おお、五月雨はいい歳してかわいそうに」

「いやいや、おまえには言われたくないぞ」

そう言って、梵天丸の頭をポンポンと叩いた。

「まあとにかく、フロイスはもつと自信を持つていいんじゃないか？」

「そ、そんな……僧侶の皆さんも『心を乱される』と目をつぶってしまわれるのですよ……。」

かわいそうに、フロイスも生きる時代を間違えたのかもしれない……と僅かに仲間

意識が芽生えてきた。

「それはフロイスが魅力的だからだよ。それは悪いことじゃないぞ？俺が暮らしていた世界では、男の大半が巨乳好きだったはずだ」

少なくとも、日本男性の八割は巨乳好きだったはず。だからといって、別に貧乳が悪いとは言わない。貧乳こそ至宝だ！というやつもみたことあるし。

「そ、そうなのですか？」

「ああ。要するに美意識の問題なんだ。女にとつて、胸が大き過ぎるなんて羨ましい悩みだと思う。だから、あんまり気にするな。むしろ威張ったっていいんだ」

「い、いばる？」

「おう。文字通り、堂々と胸を張ってればいいんだよ」

そういつて晴也はどんと、自分の胸を叩いた。フロイスはポカんと、あっけに取られたように口を開いていた。

「そんなこと言われたのは初めてです……」

と、フロイスが頬を赤らめながら、晴也の顔を上目遣いにちらりと見つめてきた。梵天丸は「ほほう」と感心したように声を出す。

「五月雨。おまえ、変なやつだな」

「そうかな、眼帯丸ほどじゃないと思うぞ」

「眼帯丸ではない！梵天丸だっ！」

梵天丸は晴也の膝の上を降りて、ギャーギャーと騒ぎ始めた。

「そもそも、なぜ眼帯をつけてるんだ？」

「ククク。我がびいすとだからよ」

梵天丸は片眼につけた眼帯を指さした。よく見ると、6・6・6と刻印してあった。全く意味がわからなかったが、『ヨハネの目次録』に出てくる怪物ですよ、とフロイスが教えてくれた。

「へへ。見せてみるよ」

晴也が手を伸ばすと、梵天丸は咄嗟に眼帯をしているほうの眼を手で覆った。

「と、取ると恐ろしいことが……五月雨が怖がる。この梵天丸を、恐れるようになる……」

「大丈夫。ハルヤさんは怖がらないですよ」

フロイスが梵天丸の頭を優しく撫でる。まるでお母さんのようだな、と思った。

「そうそう。いいからみせてみる、怖がらないから」

「あつ、やめ」

晴也が眼帯を外してみると、眼帯をしていない右目の瞳は茶色。そして眼帯をしていない右目の瞳の色がワインレッド、赤かった。

「み、見るなっ！呪われた魔眼だぞ！」

梵天丸は恥をさらけ出したように震えていた。しかし、晴也は大して驚きもせずに着いてきた。

「お、これがオツド・アイってやつなのかな」

「お……おつどあい？」

「瞳の色が左右で違うやつのことをオツド・アイって言うんだ。確か、かつこよく『邪気眼』なんていうやつもいたな」

現代にはカラーコンタクトするやつもいたような気がする。天然のオツド・アイは珍しいだろう。

「邪気眼……き、気持ち悪くないのか、五月雨」

「は？なんでだよ？」

晴也が不思議そうに、はてなマークを浮かべる。

「この梵天丸は、父上の実の子ではない。母親が、南蛮人との密通で出来た子だ。皆、我が崇られたと嘆く。味方してくれるのは、お供の小十郎だけだ」

なるほど、だから金髪でオツド・アイなのか。こんなに小さいのに、色々と苦勞してゐるんだ……と晴也は思った。

「馬鹿だな。それは崇りじゃねーよ。南蛮人のDNAが入ってるんだから、当たり前だ

ろ」

といつても、まだこの時代は遺伝的なことについてなにも解明してないんだよな……と少し時代の不便利を感じた。

「本当か？」

「本当だ。おまえも、それは威張っていいものなのになあ」

フロイスも梵天丸も、他者に誇れる立派なものを持っている。現代だったら、二人とも人気者になっていてもおかしくない。

「こ、これは呪いだ……」

梵天丸は怪訝な顔つきで言う。なにか深いトラウマがあるのだろうか。

「なに言ってるんだよ。かっこいいじゃん。少し、そういうの憧れるよ」

「か、かっこいい？」

「おう。かっこいいぜ、梵天丸」

晴也は笑って梵天丸の頭をわさわさつと撫でた。梵天丸は照れたようにうつむいた。しかし、すぐになにかを閃いたように、ポンと手を叩いた。

「閃いた！『独眼竜政宗』を超す通り名を!!」

「……え？」

独眼竜……政宗。晴也はそれに聞き覚えがあった。奥州の戦国大名であり伊達家

の第十七代当主。とある無双ゲームには「馬鹿め！」などが口癖で登場。また、どこかではゲームでは「Let's Party!!」などの時代背景がよくわからない英語台詞を吐きながら、六爪流を使う独眼竜として登場。それ以外にも色々ネタキャラとして扱われながら、なぜかイケメン設定が多い伊達政宗。

「我こそは奥州の覇者、『邪気眼竜政宗』だ!!」

（やってしまった！この中二病に、なんていうことを吹き込んでしまったんだ。眼帯をしている時点で気づくべきだった。オッド・アイの伊達政宗。時代が狂っちゃう。いや、いまでも十分狂ってるが……）

「俺、なにかとんでもないことをしてしまったのか……」

「いえ。ハルヤさんは、とても良いことをされましたよ。わたしも大き過ぎる胸を恥たりせずにがんばります」

少し頬を赤らめたフロイスが微笑んだ。それを見た晴也も、自然と笑みが溢れた。

「ああ。そうだな。周りのやつがどうこう言っても、自分は自分だ。わざわざ恥じたり、変える必要はないさ」

その後、日没が近づいているので帰ろうかと思ったが、梵天丸に『ヨハネの目次録』を

朗読してくれとせがまれ、フロイスからは夕食の誘いも受けてしまい、結局、今夜は南
蛮寺で過ごすこととなった。

第十八話 黄金の都

「……………」『何か得るためには、何かを捨てなければならぬ』

これは至極当たり前の事。故に決断力のない者は、どちらも得ることが出来ない。だが、真に才ある者ならば、どちらも捨てずに得てしまうのだろう。

南蛮寺で一夜を過ごした晴也は、朝早くに南蛮寺を後にした。梵天丸とフロイスからもう少し欲しいとせがまれたが、やはり信奈たちがどうなっているか気になったため、再会を約束して別れた。そこまでは良かったが……

「ハル……この丸いお菓子はなに？」

「……お菓子じゃなくて、たこ焼きだよ」

「へえ、食べたいわ!」

「はあ……仕方ねえな」

なぜこんな状況に……。

信奈は、義元を將軍にするために御所へ訪問。しかし、関白・近衛前久は義元の將軍宣下を拒否。確かに、將軍宣下の権利を持つ公家衆が義元を傀儡に使つての傀儡幕府で信奈が実権を握るのを邪魔するのは当然だ。そして無理難題。「今月のうちに、錢十二万貫文を御所に納めよ」との条件を出した。現代で略すと、一流企業の取締役が稼ぐ収入の百年分。まあ、織田家の家臣たち全員が十年間タダ働きをすれば、なんとか……という感じだ。しかし、今月に支払わなくてはいけない。しかも、今月といっても後一週間しかない。

そこで信奈は『黄金の都市』と呼ばれるこの『境』に目をつけた。そして信奈は「お忍びだから」といって、町娘に変装して晴也と共に境の町に。

「ほら信……じゃくて、吉」

「うわっ! 熱いわね、たこ焼きって」

道端のお座敷に座り、信奈と共にゆったりと過ごしていた。

「おいおい。ふーふーって冷ませよ」

「なんでわたしが……あつ」

信奈はポンつと小さな手を叩いた。

「あ、あんたが食べさせてよ」

「……は？」

「ほら、早くっ！」

信奈が顔を近づけてきた。やはり姫大名の顔を忘れているからだろうか。妙に馴れ馴れしい。

「仕方ねえ……ふーふー。ほら、食べ」

「あむっ……うん。中々いけるじゃない！」

そういつて信奈は笑った。やはり安心しきっているからだろうか、顔つきが柔らかい。こつちが本当の信奈なのだろうか。

「あつ、おい。青海苔付いてる」

晴也は信奈の口元に付いている青海苔を指先で取り、ペロリと舐めた。

「な、なななにするのよっ!？」

「は? いや、もつたいないじゃん」

「こ、この変態っ!!」

「なんでっ!？」

なぜか信奈は顔を赤くさせた。今だに年頃の女の子についての理解が乏しい晴也では、理解出来なかった。

「あつ、ハル！見て見て、あれはなに？」

笑顔ではしゃぐ信奈の先には、従来の真ん中をのろとろと進む一頭の巨大生物。それは、晴也でも誰でも、現代人なら見に覚えがある。

「お、像じゃん」

「像？なに、あの長いもの」

「ああ。あれは鼻だ。あれで遠くの餌を採って、口に運ぶんだよ」

「へえ、なるほどね」

南蛮に興味がある信奈にとっては、凄く魅力的なのだろう。この世界では、既に大航海時代。ポルトガルやイスパニア。その他にもシャムや明、琉球などからの南蛮貿易が盛んだ。そして、この境は南蛮貿易の一大拠点。ここ境には、世界から集まった金がある。信奈はまだ、將軍宣下を諦めてはいない。

「ハル、あつちの動物なに？」

次に信奈が指さした生き物は、背中に大きなこぶがある動物。

「砂漠の動物、ラクダだ。あのこぶの中には栄養を蓄えているんだ。南蛮の砂漠つてのは広いからな。あのこぶのおかげで、砂漠を飲まず食わずで何日も歩いていける」

「へえ。あんたたって本当になんでも知ってるのね」

「現代ではこれが当たり前なんだよ」

「いいわね。わたしも、そんな時代に行ってみたいわ」

そうだな、と晴也は微笑んだ。確かに信奈にとつては現代は相当の魅力であるに違いない。だが、信奈はこの時代だからこそ輝けるのだろう。やがて信奈は歩き疲れたと
いって、近くの茶屋で休憩することとなった。

「この堺には、大切な思い出があるわ……」

「思い出？」

「そうよ。わたしが初恋の人と一緒に歩いた町」

そう言うと、信奈はちらりと晴也のほうを見たが、どこかのサルのように「ムキーン」と嫉妬せず、相変わらず「へえ〜」という生半可な答えしか返ってこない。信奈はつまらなそうにため息を吐いた。ちなみにこの信奈の初恋話は十年前、父親とこの堺にきた時のことだ。しかも相手はハードレ。

「で、なにかツテでもあるのか？」

「ええ。わたしがいつも種子島を買ってる納屋の主人・『今井宗久』よ」

その後、晴也と信奈は今井宗久が営む納屋へと到着した。

「おひいさま。えらい久しぶりです」

今井宗久。髪には若干白いものが交じっているが、体は衰えを知らない屈強な肉体を保っていた。顔は岩石のように固そうだ。まさに堅物といった感じだ。そして、目が悪いのだろう。南蛮渡来の片眼鏡をかけている。

「ええ。久しぶりね、宗久」

どうぞ、と宗久は自分が点てた粗茶と店の独占物であるたこ焼きを出してきた。

「実は相談があるの」

「十二万貫文、でっしやる」

「なんだ、知ってたの。なら話は早いわね……宗久、お願い！将軍宣下が通れば、天下統一が一步近づくのよ！協力して！」

信奈は両手を合わせた。だが、宗久は頭を振った。

「織田家は常連客ですが、それは無理ですわ」

「なんで？ たこ焼きで大儲けしてるんでしょ？」

今井宗久はたこ焼きの独占権を持つている。たこ焼きを売ることが出来るのは納屋だけだ。それ故、他の会合衆よりも儲けが多い。

「十二万貫文も出したら、もう納屋は終わりですわ」

一応あるのはあるらしい。まあ、そんな額を出したら納屋は倒産するだろうが。うう、と信奈は頭を捻った。あつ、と晴也は閃いたようにぽんつと手を叩いた。

「だったら……買い取ってくれないか？」

不意に、晴也が口を開いた。

「買い取る？……あんさんは？」

「五月雨晴也だ。あんたのことはよく知ってるよ」

『織田信長公の野望』の野望で言うのと、よく取引に使われる納屋の主人だ。鉄砲や弾丸だけでなく、季節の変わり目に茶器を売りに来る。史実では、会合衆と信長の武力衝突を止めた人物でもある。

「それがしを？」

宗久は不思議そうに首を捻った。

「こいつ、未来から来たんですって」

信奈は胡散臭そうに言ったが、宗久は「ほう……」と眼を光らせた。未来から来たということを信じる、というより興味を持った感じだった。

「して、買い取ると言うのは」

「ああ。俺が新たな「たこ焼き」を作る。その権利を買ってくれないか？」

またしても宗久は眼を光らせた。

「新たなたこ焼き……」

「ああ……悪いが、まだ店のたこ焼きは『完成してない』ぜ」

一瞬、ピクリと眉をひそめたが、ふはははは！と宗久は破顔。度量の高さがうかがえる、大きな笑い声をたてた。

「それがしのたこ焼きが、まだ未完と？」

「そうだ。悪いがまだまだ、このたこ焼きは進化出来る」

「進化……」

またしても宗久は、大きな笑い声をたてた。馬鹿にしている笑いではなく、おもしろい、といった笑いだ。

「おもしろい。なら見せてもらいましょうか『新味のたこ焼き』を」

「ああ、任せろ！」

晴也は笑って親指を突き立てた。宗久は満足そうにうなづく。

「まあ、今日は遅いでっしやろ。それがしの屋敷にお泊りいただくわけには？」

まあいいかしら……と信奈がうなづいた。

「それでは、たこ焼き披露はいつに？」

「そうだな……明後日でいいか？」

もちろん、と宗久はうなづいた。

そして夜、晴也と信奈は宗久の屋敷に泊まることとなり、客人用の部屋へと案内された。ありがたいことに布団まで敷いてある。……それは良いが、なぜか二つ布団が敷いてあった。しかも、近い。

「ちよ、ちよつと待て、おっさん。これじゃあ、俺と信奈の部屋が同じじゃないか」

「丁度、空きがないんですわ」

ふふふ、と宗久が含みを持った笑いをした。

「なら、俺はそこらの宿屋でいいし、なんなら廊下で寝たっていい」

いくら朴念仁の晴也でも、年頃の男と女が一緒に同じ部屋で寝るのが不味いことくらいわかってる。ましてや、主君である信奈となんてもつてのほかだ。

「あら、ハル。わたしになにかするつもりなの？」

いやらしいわね、と信奈はニヤケた。大げさに両手で体を隠している。

「いや、なにもしないけど……」

「だったら良いじゃない」

「でもなあ……」

「ハルは女の子と寝ると、襲いかかる変態野郎なの？」

くっ、と晴也は齒噛みをする。妙に信奈の得意げな顔が苛つく。

「わかったよ……寝ればいいんだろ、寝れば」

思わずそう言ってしまった。晴也はふん、といって布団に入った。それに続き信奈も自分の布団に入る。宗久はニヤニヤと笑いながら部屋を出ていった。

……しばらく経つ。

「……なんで俺の布団に入ってるんだ、信奈」

しばらく経つても寝付けない晴也の布団には、なぜか信奈も入っていた。

「だって、寒いし。こっちのほうがあつたかいじゃない」

「まだ冬じゃないだろ」

「もう、うるさいわね。寝かしてよ」

そういつて信奈は目を閉じた。晴也が「お、おい、ちよつと」と声をかけるが、間もなく信奈から微かな寝息が聞こえ始めた。

「すーすー」

「……くっ」

流石に不味い、一つの布団に二人はきつ過ぎる。下手したら信奈の吐息がかかるほど。晴也は気持ちを落ち着かせようと深呼吸した。

「そうだ、信奈側の布団に入れればいいんだ」

晴也は布団から、そろりと信奈を起こさないようにと出て、信奈のほうの布団へ入った。まだ生温かいのが気になるが、さっきの状況よりは数倍マシだろう。

「ふー。これで寝れる」

晴也は安心して目をつぶった。だが、しばらくしてもなぜか寝付けない。違和感というかなんというか、奇妙な感覚に襲われる。思わず目を開ける。

「またかよ……」

目の前には信奈がいた。しかも、さつきよりも近い。

「……た……い……」

信奈の小さな手が、晴也の袖を掴んでいた。

「ん？」

「あったかい……」

信奈の口から、そんな言葉がもれた。

「……仕方ないな」

晴也はなんとか寝ることにしたが、

「……っ」

信奈の胸元はすっかりはだけてしまっている。見る角度を変えると、危ういところまで見えてしまいそうだ。

「の……のぶな」

胸元を直してもらおうと声をかけたが、信奈が起きる気配はない。布団から出ようと思ったが、下手に体を動かせば信奈を起こしかねない。

「なんだよ、この拷問……」

晴也は思わず、大きな溜息を吐いた。これが晴也じゃなく、某サルなら飛びついていそう。気にせず寝よう！と前向きな考えで目を閉じるが、

「あ……ん……っ……ふう……っ……」

少しもぞもぞと体を動かさず信奈。体を動かそうとして軽く弾んだ声でさえ、やけに色っぽく聞こえてしまう。晴也の目はすっかり冴えてしまった。

「もう、勘弁してくれよ……」

早朝。

「あー、眠い」

晴也は朝を迎えた頃、一人布団から抜け出し、納屋を出て堺の市場を歩いていた。明日のたこ焼き披露のための材料を集めるためだ。

「卵黄と酢、か。ここならなんでもありそうだな」

まだ朝早くだというのに、市場には人が溢れていた。

「五右衛門、本当にこの市場が一番安いんだな？」

「左様でござる」

隣には五右衛門も歩いている。五右衛門には堺の市場の相場をあらかじめ調べてもらい、安いところを探してもらった。

「後、川並衆も集合をかけたといってくれ」

「川並衆の男たちに料理は無理でござる」

「いいからいいから、頼むぜ！」

そういうと晴也は人混みに紛れて行った。

次の日・たこ焼き披露日

開口神社の境内に、信奈に宗久、そして割烹着を着て屋台の前に立つ晴也。応援に、半

兵衛に五右衛門に犬千代が駆けつけてくれた。川並衆が数人來ている。

「五月雨はん、これは？」

川並衆を不審に思い、宗久が口を開いた。

「ああ、気にしないでくれ。サービスだからな」

「サーびす？」

「まあ、それは後でな。それじゃ、いくぜっ！」

それから数十分後——

「出来たっ！」

晴也が声を出すと、宗久や川並衆からおおっ！と歓声があがる。

「ほらっ」

晴也は信奈と宗久の下に、たこ焼きを差し出した。だが、そのたこ焼きの姿を見て、二

人の顔は真つ青になった。

「これは、揚げ過ぎちやいますか？」

「なに、この白いねばねば……」

信奈は気持ち悪そうに体を震わせ、宗久は引きつった笑いをしている。その間にも、晴也は川並衆や五右衛門たちにも一皿ずつ渡していった。

「まあ、『揚げたこ焼き』だからな。その白いのは『マヨネーズ』だ。卵黄と油に酢を混ぜただけの代物だけだな」

晴也は、たこ焼きはソースではなくマヨネーズ派だ。なぜソースはあるのに、マヨネーズはないんだ、と不思議に思っていた。揚げたこ焼きは、現代でたまたま覚えていたレシピを思い出したものだ。

「真夜姉酢……？」

「おひいさま、とりあえず食うてみまひよ」

皆、嫌そうな顔をしながら晴也が作ったマヨネーズつき揚げたこ焼きを、ぱくり。しばしの沈黙。そして、最初に口を開いたのは宗久だった。

「なんちゆう……なんちゆうもんを……」

「……え？」

なんとあの今井宗久が、ボロボロと大粒の涙をこぼし始めた。やばい、口に合わな

かったかな……と晴也は嫌な汗をかいた。

「不味い……かな？」

「違う、逆や！美味過ぎるんや！」

一斉に、試食を終えた面々から歓声があがる。

「こ、これは美味いぜ、坊主！」

「くすんくすん。と、とつても美味しいです」

「あ、あちあちあち。でも、おいちいでござる！」

「……犬千代、おかわり」

などなど、揚げたご焼きとマヨネーズは大絶賛。

「ハル、本当に美味しいわね。もう一個ちょうだい！」

「まあ待て、もう一個あるんだからな」

そういつて晴也は、もう一つの新たなたご焼きを差し出した。これが、晴也にとっては本当にオススメの一品だ。

「五月雨はん。外見はなにも……」

「まあ、食ってみろ」

宗久はいささか落胆した色を見せたが、ぱくりと一口食べると。

「な、なんちゆう……なんちゆうもんを……!!」

またしても宗久は、ボロボロと大粒の涙を流した。それにつられて信奈たちも、ぱくりぱくりと食べ始める。

「その中に入っているのはマヨネーズじゃないぜ。クリームチーズ。名付けて、『たこチーズ』だっ！」

南蛮からの貿易が盛んな境には、外国の食料も手に入る。だが、それでも見つからなかったもので、市場から買ったレモンやらなにやらを使って自己流で作ってみたものだ。またしても、試食した者たちから歓声があがる。

「うう……生きてて良かったぜ！」

「さ、さっぱりしてて……美味しいです！」

「はむはむ……おいひいでござる！」

「……おかわり」

晴也特製のたこチーズも大絶賛。中身にクリームチーズを加えたただけだが。というか、このたこチーズも現代で覚えたレシピをうるおぼえて作ったただけだ。

「こ、これは美味過ぎるわね……」

「良かった良かった。二つとも気に入ってもらえて」

晴也はふー、と大きな息を吐いた。

「で、いくらだ？」

晴也の言葉に、急に宗久の顔きつくくなる。

「そうでんな……二万貫文でどうでっしゃろ？」

近衛に出すのは十二万貫文だ。半分以上足りていない。信奈が口を出そうとしたが、晴也はそれを止める。

「おいおい、こっちは調味料のマヨネーズ、さらに揚げたこ焼き、そしてたこチーズの三品だけ？ たこ焼きの種類があと二種類も増えて、最高の調味料であるマヨネーズも手に入るんだ。もつと増えてもいいだろう？」

晴也の言葉に、宗久は眉をひそませる。

「逆に言えば……三品でっしゃろ？」

「くっ……」

確かに、逆に言えば三品で二万貫文を取ろうとしているのだ。普通に考えれば、これ

ほどうまい話はないだろう。

「たこ焼きの独占権はあんたにあるんだよな？」

「左様」

「なら、『たこ焼き』じゃなくて、『揚げたこ焼き』や『たこチーズ』は売っていいんじゃないか？」

むむつ、宗久は口を尖らせた。そうだ、宗久が持っているのはたこ焼きの独占権だけだ。というか、まずたこ焼きは今までの一種類しかない、という考えでの独占権だろう。ならば、つけ込む隙はあるはずだ。

「それは屁理屈ですわ」

宗久は呆れたようにニヤリと笑ったが、僅かに目が泳いでいる。

「だが、その屁理屈が通つたらどうするよ？」

「揚げたこ焼きは、たこ焼きという名が入ってますわな」

「なら、たこチーズだ。この話が三万貫文で片付くなら、他の会合衆にこの話を持ってつてもいいんじゃないか。例えば、津田宗及とかにな」

天王寺屋店主・津田宗及。今井宗久の商売敵であり好敵手だ。その名を出すと、今井宗久は目を光らせた。

「そもそもな。俺はたこ焼きであり、たこ焼きではないものを作る」

「!? どういう……」

流石に宗久は驚いたようだ。身を乗り出してゐる。

「言つただろ? 俺は未来から来てるんだよ。未来ではな、たこ焼きと外見も味も、似過ぎているつてくらいのお食べ物があるんだ。そして、俺はそれを作れる」

「……っ!!」

たこ焼きの独占権で成り立つてる納屋には、それと似ていて同程度の美味しさを持つ食べ物が出れば、間違いなく痛手となる。

「だからな、そいつを津田宗及に売つてだ、それにマヨネーズやらクリームチーズやら付ける。それを売る権利を、津田宗及に買つてもらおう。もちろん、他の会合衆にその権利を買つてもらおうのもいいな。さて、宗久。新しいものと古いもの、どちらの勢いが強いかな、あんたにはわかるはずだ」

そう、これまでと違つた新しい考えを持つ、織田信奈のように。

「五月雨はんがいうそのたこ焼きと良く似た、特製の名物を作り、その権利を会合衆に買わせると……いうわけでんな?」

「ああ。おそらく、たこ焼きの権利を欲しがる会合衆全員にその権利を買つてもらえば、明らかかなに二万貫文で以上の大金になるはずだ」

晴也がいうそのたこ焼きに似たものを他に売り込めば、古参となるたこ焼き勢いは間

違いなく弱まる。なのでそうされると、宗久はかなり困るはずだ。

「あんたが、もつとこの新味たこ焼きを高値で買ってくれるのなら、俺の言うその名物は、誰にも口外しないことにしよう」

「なるほど……わかりましたわ。なら、三万貫文でどうです？」

マヨネーズ、揚げたこ焼き、たこチーズで一万貫文ずつ。といった感じだろうか。だがそれでも、晴也は満足していない。

「悪いが、俺は料理はこの二つのだこ焼きだけじゃないんだぜ。他にも、たこ焼きに並ぶ名物が作れるんだ」

「なんとっ!？」

宗久は驚いた。もし晴也がたこ焼きに並ぶ新たな名物を作り、他の会合衆に売れば、たこ焼きは過去のものとなってしまう。

「……脅しでっか？」

「さあな。さて、いくらだ。宗久」

むう……と宗久は頭を悩ませる。三万貫文では、まだ駄目だ。

「四万貫文……これで、どうや」

「頼む、宗久。もう一万貫文だけ、頼む。信奈は必ず天下を取る。そしたら、あんたは日本一……いや、世界一の商人になれるぜ」

その言葉にチラリと宗久は信奈を見やる。確かに若き頃に見た時から、なにか他者とは違うものを感じていた。

「……そうでんな。おひいさまなら」

宗久は意を決したように立ち上がった。

「わかりました。五万貫文で手を打ちましょう」

ありがたい！と晴也は宗久の手を取って喜んだ。そして晴也は川並衆に「頼んだ」と手で合図し、川並衆は全員町のほうへ走っていった。

「宗久。これは俺からのサービスだ。川並衆には、新味たこ焼きの宣伝を境の町中にももらってる。これで、あんたの店には客が殺到するぞ」

「……五月雨はん。おおきに」

「いや、流石に無理言ったからな。これぐらいはするさ」

とにかく、と晴也は一拍置いた。

「これでどうにかなる……!」

晴也はよしっ!とガッツポーズしたが、

「でも、まだ七万貫文も足りないじゃない」

隣で晴也と宗久のやり取りを見ていた信奈が口を開いた。そうだ、確かにまだ半分以上足りていない。

「大丈夫だよ。五右衛門、ちゃんと『集めてある』な?」
「もちろんでござる」

「よし、それじゃあ行くか!」

晴也は町のほうへと走っていく。それに続いて、五右衛門や半兵衛に犬千代も後を追っていった。あつという間に彼らの姿は見えなくなった。残った信奈と宗久は顔を見合わせる。

「全く……ハルはなにを考えてるんだが」

少し頬を膨らませている信奈に、宗久は目を光らせた。

「おひいさま。さては、五月雨はんにホの字でんな?」

「な、なななにいつてるのよ!」

ビクッと信奈は体を震わせ、明らかに動揺し始めた。

「あのお方なら、おひいさまにお似合いかと」

「う、うるさい!」

信奈は顔を真っ赤にして、晴也たちが行ったほうに走っていった。宗久はそれをおもしろそうに笑う。やがて信奈の姿が見えなくなり、宗久は一息吐いた。

「若さ、ちゆうもんか……」

まだ、わいの野望は終わってへんかったな……。

第十九話 天下の大泥棒、参上!

——人は、生きていれば必ず、壁にぶち当たる。

人生という道を歩けば、壁に当たるのは至極当然だ。それは人それぞれ。あなたにとつては壁でも、私にとつては、なんの壁でもない場合があり、逆に私にとつての壁が、あなたにとつては、なんの壁ではない場合も当然ある。それは個性だ。なんで、あの人にはあんなに上手く出来るのに、私はこうも上手くいかないんだ、なんて考える必要などない。逆に、自分に出来て、その人には出来ないことがある。必ずある。だから、他者より出来ない、という考えは捨て、私はこれが苦手だな、と考える。そうすれば、幾分か心が晴れる筈だ。

「は、晴也さん。これは……?」

晴也たちの目の前には、山積みになっている多くの紙があった。どれも、人相書きや銭の金額が描かれていた。

「手配書だ。賞金首である盗賊たちのな」

そう言うと、晴也は手配書一枚を手にとった。どうやら、晴也は多額の報酬金がかけられている盗賊たちに目をつけたらしい。本当なら、堺の町には傭兵が雇われており、盗みの心配は無いはずなのだが、松永久秀と三好三人衆が足利將軍家を滅ぼした騒動により、治安が悪化。雇われている傭兵の中には逃げ出してしまふ者たちも少なくなかった。その隙について、盗みが一挙に増えてしまっていた。

「どれも凶悪な奴らばかりだが、その分、報酬金もかなり高い。この手配書の盗賊、全て役所に突き出せば、金は集まるはずだ」

なるほど、と皆がうなづく。ですが、と半兵衛が口を開いた。

「かなり危険じゃありませんか? もしかしたら、返り討ちに……」

「大丈夫! 俺らの他に、川並衆も手を貸してくれるし、なりより、これだけの面子が揃えば、まず盗賊なんかには負けないはずだ」

自信ありげに話す晴也に、半兵衛は今だに不安そうだったが、やがて納得したように

うなづいた。

確かに、現在・織田家最強と唄われる五月雨晴也。その他にも若き天才忍者・蜂須賀五右衛門。同じく若き天才軍師・竹中半兵衛。更に、槍使い天才・前田犬千代。それに川並衆が加われば、盗賊など敵ではないはず。

よし、と晴也は立ち上がった。

「それじゃ、一つずつ確実に行くぞ!」

その自信はどこから来るんだ、と言いた気な彼女たちだったが、結局、晴也に付いて行くことになった。

それから晴也たちは、洞窟や洞穴など、盗賊たちの住処を強襲。事前に、五右衛門に調べさせていた。

「な、なんだお前ら!?!」

「おらあ！ 大人しくお縄につきやがれ！」

織田家の家紋は、盗賊たちに見せていない。後々、織田家の仕業だと、盗賊たち全員を敵にすることは少し厄介だ。「なんだ、ガキじゃねえか」と嗤い、油断する盗賊たちだが、

「……ガキじゃない」

「それでござる」

「お、大人しくしてください」

五右衛門や犬千代が、油断した敵を確実に倒していく。もちろん、引つ捕らえるので、全て峰打ちだ。半兵衛も、式神を使って応戦する。応戦というか、ほぼ一方的だった。川並衆は、気絶した敵をお縄にかけている。「ええい、暴れるでないわっ！」と義龍はともかく、山賊の川並衆が盗賊を捕まえるなんて、おかしな光景だった。

「お前が頭か？」

「くそが！ てめえら、生きて帰れると思うなよ!!」

流石に盗賊の親分、ということでも中々強かったが、日々、勝家や犬千代と稽古を重ねている晴也にとつては、敵ではない。その場を逃げていく盗賊と、その場で戦う兵士との違いは大きい。

「五月雨流・陽炎包」

「え、ま、待てっ!？」

あつという間に盗賊の刀が叩き落された。親玉の盗賊は、なにか言い訳をしようとして口を動かしていたが、既に晴也は木刀を振り下ろしていた。

「おし、次だ、次!」

盗賊たちを役所に引き渡した。後に、その盗賊たちに盗みを行われた商人が駆けつけるそうだ。その後、報酬をもらう手はずになっている。だが、報酬を受け取りは後にし、晴也たちは次の賞金首を狙っていた。

盗賊たちのアジトと言える場所は、五右衛門の調査によって明らかになっている。晴也たちは電光石火の勢いで、盗賊団一つ一つを確実に潰していった。

その調子であつという間に『二日』が過ぎ、約束の期限まで残り二日。

「も、もう無理だあ〜！」

結局、金は想像以上に集まつたが、もう、限界に近い。川並衆も体力の限界というやつだろう。無論、晴也自身も半兵衛たちもだ。それを見た五右衛門は、うむむ、と頭を捻り始めた。

「か、かくなる上は……いや、しかし」

どうした、と晴也が声をかける。

「実は……」

その後、五右衛門が珍しく長文を話した。もちろん、いつもの噛み噛み口調でなにがなんだがわからないので、翻訳する。

『もう、報酬金があり得ない額になっている盗賊がいます。そして、盗賊なら金銀財宝を沢山所持しています。その盗賊たちを捕まえるか、財宝を盗れば、もしかしたら残りの金はどうにかなるかもしれない』

とのことだ。

どうにも、今までの盗賊たちのように上手くはいかなそうだ。だが、今の晴也たちにはすぎる他ないだろう。

「……いい案だな」

「しかし、奴らは手強いでござる」

「手強い? 強いのか?」

もちろん、と五右衛門は大きくなづいた。

「我ら川並衆とは、犬猿の仲でござる」

「親分、それは」

川並衆がなにかを言おうとしていたが、五右衛門が睨んで止めてしまった。

「そうか……川並衆と、犬猿の仲……か」

「奴らとは一度だけ争ったでござあう」

遂に噛んでしまった、と五右衛門が頭を抱えたが、晴也は特に気に止めていない。

「それで? どうなった?」

「そこで同じ獲物を求めて争ったでござあある」

結果は引き分け、と川並衆の一人が口に出すと、五右衛門はあからさまに嫌な顔に

なつた。なるほど、川並衆と同等なのか。それは手強い。

「そいつらの頭は？」

晴也が聞くと、五右衛門はいかにも恨めしそうに声を出した。

『五郎吉』(ごろうきち)という子供が束ぬていとうじよくで「ごじやる」

五郎吉?、と晴也の頭になにかが引つかかった。確か、誰かの幼名だったような気がするんだが、思い出せない。いや、というか子供が頭なのか。川並衆しかりだが。

「うゝん。まあ、いいか。それじゃ、そいつらの居る場所に案内してくれ」

御意、と五右衛門が顔を引き締めた。それほど因縁深い相手なのだろうか。

「なんだ、こゝか」

意外にも、その盗賊団の住処近くにあつた。珍しくもない、普通の洞穴だ。といつても、もう日が暮れてしまつてゐる。だが十二万貫を渡す期限は明日。もたもたしてゐる

訳にはいかない。

意を決して、晴也たちがその洞穴に乗り込もうとした、その時。

「お、川並衆の奴らじゃねえか。よお、久しいな」

逆に、洞穴から蔵つい盗賊たちが出てきた。晴也は咄嗟に、木刀に手をかけた。しかし、川並衆は胸を張って前に出た。

「おう。お前ら、元氣そうだな」

川並衆は笑って手を振り、盗賊たちも笑って振り返した。

「あれ? お前ら、仲良いのかよ?」

五右衛門の説明とは裏腹に、やけに打ち解け合っている様子だった。晴也の言葉を聞いて、川並衆と相手の盗賊たちが一斉に口を開いた。

「ああ。それは、そっちとこっちの親分たちのせいだ……」

はあ? と思わず声をもらしてしまった。犬千代も半兵衛も、首を捻る。唯一、川並衆の新入りで、事情知らない義龍は、大きなイビキをかいて、木陰のそばで寝ていた。やがて、ものすごい速さで、転がるように女の子が洞穴から出てきた。

「あ!?! なにいつてやがるんだ!」

その女の子は、ぶかぶかの狼の被り物を被り、その小さな胸にはサラシを巻いていた。歳は、

五右衛門と同じくらいだろうか。

女の子は、だんつ、と地団駄を踏んだ。そして、右手を突き出し、左手は後方に、そして首を捻った。まるで、歌舞伎のようだ。

「おうおうおう！ この石川衆の頭！ 五郎吉こと、石川五右衛門とは……………あたいのことだあああい!!」

その言葉に乗り、おおお！ とその石川衆？の奴らが、拳を突き上げた。

「い、石川五右衛門!？」

誰？ と犬千代たちが眩く中、晴也だけが驚いていた。

もちろん、嘘ではなく、それは事実だった。石川五右衛門……………安土桃山時代に出没した盗賊。都市部である京都を中心に荒らしまわり、天下人である豊臣秀吉の手勢に捕えられ、家族や仲間と共に、事実かはわからないが、釜茹でという形で処刑された。……………

ということになっている。無論、それだけではない。

石川五右衛門については様々な伝説がある。「手下や仲間と共に、義賊として暴れまわった」「名古屋城や大阪城の、金の鯨を盗もうとした」などが有名である。まあいづれにしても、現代でも、謎が解き明かされない人物だ。

「だからな、あたい等は盗賊じゃないんだよ。義賊さ、義賊！」

「あー、わかつたわかつた」

晴也たちは、盗賊団の拠点である洞穴に案内され、飯を振舞われていた。というか、川並衆と相手の義賊？たちとお祭り騒ぎだ。

そして驚いたことが、やはり石川五右衛門は義賊だったことだ。もしかして、いるとしたら、女じゃないか、という目論見は大体できていた。

当時は豊臣政権が圧政や朝鮮出兵の失敗で嫌われていた。のらりくらりと逃げるその様に、民たちは夢を見たのだろう。というのが、晴也の考えだった。事実、五右衛門が捕まった後、五右衛門の家を搜索したところ、銭があまり見つからなかったらしいが、それは女に貢いでいたから……という説もある。

しかし事實は、石川五右衛門は本当の義賊だった。

どうやら、この石川衆と呼ばれる盗賊……いや、義賊たちは、公家のような銭を独占し、民の生活を苦しめているやつらの、財宝や宝を盗んでいるらしい。そして、奪った

宝を高値で売りさばいて、その売った銭を貧しい民たちに配っているらしい。確かに、ここにくる前、京の町民から少し話しは聞いていたが、ただの気まぐれな盗賊だろう、と思っていた。

「なあ、お前らが義賊だつてことはわかったから、協力してくれつて」

晴也は事情を話して、協力を仰いでいた。なぜか川並衆全員（義龍を除く）が、こいつらは話しがわかると、事情を話すことを進めてきたからだ。それに、民たちに人気がある義賊なら、いささか織田軍と関係があると云われても、そこまで不味い事態にはならないはずだ。

「うくん、だつてなあ」

五郎吉は、唇を噛みながら五右衛門のほうをみた。

「なんだ、五右衛門……蜂須賀五右衛門のことが気になるのか？」

「ああ、そうだ。苛つく！なんで、あいつとあたいの名が一緒なんだ!!」

「……は？」

「おかげで、こつちは今だに改名できねえ！そのせいで、いまだに幼名の『五郎吉』で通つてるんだぜ！」

ああ、なるほど。五郎吉とは石川五右衛門の幼名だったか。すっかり忘れていた。

「そうだ……お前ら、確かお宝を恵んで欲しいんだよな？」

「ん、ああ……というか、売りさばいてばかりなら、宝や財宝はないんじゃないか?」
 「大丈夫だ。前代の頭が残した遺産はたっぷりある。しかも、どれも超が付く程の高級品だ」

先代……か。

確か、石川五右衛門は、伊久知城という城を本拠とした豪族石川氏の出であるとする説があつた筈だ。石川氏は守護大名である一色氏の家老職を務めていたが、天正十年に、一色義定の代の頃、石川左衛門尉秀門（五右衛門の父）は豊臣秀吉の命を受けた細川藤孝の手により謀殺され、そのすぐ後に伊久知城も落城した。落城の際、秀門二男である五良右衛門が落ち延び、後に石川五右衛門となつたとされている。

そして、もう一つの説。石川五右衛門は伊賀流忍者の抜け忍であり、伊賀を出て、その後盗賊になつたという説。

どちらも、断定はできない説である。本当は、どちらでもないのだろうか。

しかし、相手が義賊でなく盗賊だったら、間違いなくお縄にしてやろうと思つていたが……。どうやら、こいつらは他の盗賊たちとなにかが違う。どこが、とは言えないが、川並衆とどこか似ている。

「譲つてもらえないか……?」

「だったら、あいつと勝負させろっ!」

そう言うと、五郎吉は五右衛門を指さした。むっ、と五右衛門は怪訝な顔つきになる。「もし、そいつが勝つたら宝は全部やるよ。その代わり……」

「お、おう。なんだ？」

「あたしが勝つたら、そいつが五右衛門という名を名乗ることを禁ずるっ！」

は、と思わず声が出てしまった。そんな、名前が被るなんて、この時代ではよくあることじゃないのか。

「お前が新しい名を考えればいいんじゃないか？」

「やだやだ！五右衛門が一番しつくりくるんだっ！」

五郎吉は泣目でこつちをみてきた。思わず後退りしてしまう。それに反応して、石川衆の奴らは、親分を泣かせるなんて……と言いついそうな眼つきでこつちを睨んできた。

五郎吉の格好は、犬千代のように派手にカブイてはおり、眉毛がやや太いのが気になるが、茶髪である綺麗な髪がよく似あっている美少女だ。ロリコン集団である川並衆までもが目を奪われていた。

「ど、どうする、五右衛門？」

そそ、と静かに五郎吉から離れ、五右衛門に耳打ちした。しかし、耳打ちの意味はなかった。

「いいでござる！ 五郎吉！ 今日こそけつちやうをつきえてるでござる！」

「あはははは！ やゝい、噛んだ噛んだ〜」

「むうううううっ！」

ああ、なるほど。やつと理解した。川並衆と石川衆が犬猿の仲じゃなくて、このロリ親分二人が犬猿の仲なんだな……………。

同じロリ集団である川並衆と石川衆の奴らは仲良くできるだろうが、この二人がこうでは、どうにもいかない。

川並衆、石川衆、犬千代たち、そして晴也の溜息が重なった。

「いざ、勝負っ！」

結局、対決となつてしまった。

勝負はどちらかが負けを認めるまで。制限は特になし。死んでも文句は言えないらしい。そして、勝負は外で行う。

「いぐぐいぐるっ！」

五右衛門の武器は特に変わってない。手裏剣やらクナイやらを投げたり、短刀で斬りつけたりしている。しかし、五郎吉はそれを全て避けている。

「おらおらおらー！」

一方、五郎吉の武器は……

「斬・鉄・剣！」

そう、『あの』斬鉄剣だ。これもまた、現代では色々なネタとして使われていた。

どこぞの怪盗の一味である石川五右衛門の十三代末裔が使っていたり、『織田信長公の野望』では足利義輝の必殺技。攻城戦時に「斬鉄剣！」という叫びとともに、城門を一撃で破壊することができる。などなど、どれも、なんでも斬れる刀と評される程、強力に扱われている。

「そんなもの、当たらないでござる！」

しかし、五右衛門が普通に短刀で弾いているところをみると、それほどの斬れ味はないようで、安心した。流石に小さな五郎吉が使うので、短刀よりやや長い位の長さだ。

「ああ、もう！ 当たれっ！」

二人のスピードはかなり早かったが、時間が経つにつれ、更に速くなった。晴也が服部半蔵と戦った時ほどではないにしろ、かなりのスピードだ。

「これで……!」

「隙ありだつ!」

五右衛門は、通常より大きい、巨大たどんを投げようとしたが、五郎吉はそれを見逃さずに刀を振るつた。それを避けると、五右衛門は姿勢を崩してしまった。

巨大たどんが、ころころと、火がついている状態で、二人の真上を舞う。

「……あ」

二人はすっかり硬直して、動けない。

「あぶないっ!」

誰かが叫んだ。半兵衛だろうか。だが、その声とほぼ同時に晴也は二人の間に割って入っていた。

(いけるか……!?)

晴也はたどんが舞う位置まで飛ぶと、くるりと空中回転。そして、脚を広げた。

「届けえええええ!!」

晴也はたどんめがけて、オーバーキックを繰り出した。ギリギリ、爪先で当たった。すごいスピードで、たどんが飛ぶ。三人から十分離れた位置まで飛んでくれた。

そして、間もなく、大きな轟音が鳴り響いた。

よし! と晴也はそれを見届けると、顔面から地面に落ちてしまった。

「いててて……お前ら、大丈夫か？」

晴也は泥がついた顔を拭うと、座り込んでいる二人をみた。怪我はなさそうで、安心した。

「……も、申し訳ない」

「あ、ああ……」

大丈夫ですかい、と川並衆と石川衆が二人に駆け寄り、晴也の下へは、犬千代と半兵衛が駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか？」

「おう、まあな」

「……無茶し過ぎ」

つーん、と口を尖らす犬千代に、涙目な半兵衛。晴也は二人の頭を撫でると、立ち上がった。

「ふうく。火薬強すぎるぞ、五右衛門。もう少しで大惨事だ」

「も、申し訳ないでござる……」

五右衛門は縮まって頭を下げた。

「ま、無事ならいい」

五右衛門の頭を、わさわさと撫でた。うにゆう、と五右衛門は声をもらし、顔が真っ

赤になつていた。

そんな様子を見た五郎吉は、

「……わかつたぞ」

そう呟き、立ち上がった。

「一千のお宝より、一のお宝……この意味が、今わかつた……!」

五郎吉は顔真つ赤にして、興奮を抑えられないように、ぶんぶんと腕を回した。

「ん、どうした?」

「お宝は、全て持つてけ! だから、お宝を一つ、あたにくれ!」

「宝なんて、ないぞ」

五郎吉は、ふっふっふ、と妙な笑い方をした。自然と晴也は後退りした。

「お宝は……お前だああああ!!」

五郎吉は晴也の袖を掴むと、思いつきり晴也に抱きついた。

「ちよ、おい!!」

「お、親分!!」

「あたいは見つけたぞおお! 将来のお宝を!!」

ええええ!! と五郎吉以外の全員が声を荒げた。五右衛門含め、半兵衛と犬千代は、

むむ、と口を尖らせた。

「は、晴也さんは渡しません！」

「……そうだそうだー」

「しゃ、しゃみだれうじはせつしゃのあるじでじやる！」

犬千代たちが、ぶーぶー、とブーイングを送った。五郎吉の顔がどんどん真っ赤になる。

「なんだとおおお!!」

「お、おい、煽るな煽るな！」

もう、面倒だつ、と五郎吉は地面に降り、地団駄を踏んだ。

「石川衆！ この……将来の……あたいの……お、お、夫を捕まえろおおお!!」

「えええええ!!」

そ、そんな……と石川衆は膝から崩れ落ち、絶望したかのように顔を伏せた。

「うう……おねがいだよお……」

すると、五郎吉は涙声でそう言った。間もなく、石川衆は一斉に立ち上がり、晴也を睨みつけた。

「え、俺……?」

「こいつを……捕まえろおおお!!……そして、殺す!!!」

「くつ、この、ロリコン共がああああ!!」

晴也は絶叫しながら逃げ出し、石川衆と五郎吉も後を追い始めた。

ポツンと、半兵衛たちと川並衆が取り残された。

「と、とりあえず……」

「……盗っちやおう」

「で、ごごるな」

どうせそう簡単に、晴也は捕まらないだろう、と信頼?していた半兵衛たちと川並衆は、洞穴の金銀財宝をありったけ持って、京へと帰った。

そして、多くの金銀財宝を金に換え、見事に七万貫文、丁度だった。

期限最終日、朝方。

半兵衛たちは十二万貫文を信奈に届け、信奈は直ぐにやま役所へと約束した金額を収めた。

まさか、田舎侍が……と近衛前久は、唇を噛むことしかできなかった。

第二十話 五月雨晴也の憂鬱

「……『我慢』とは人類に必須な力である。おそらくこの世界の人々全員が我慢することを止めたら、必ず人類は滅亡する。我慢は至る所で必要だ。外を出れば他人の目を気にし、自分という仮面を崩さないように、自らの欲望を封じて行動を制限している。我慢するかしないかで、自らの運命が大きく変わる事もある。故に、我慢は人類に多大な影響を及ぼす大切な力なのだろう。」

「はあはあ……つ、疲れたあ」

石川五右衛門こと五郎吉率いる石川衆が散々追いかけて回してくれたおかげで、もう

すっかり夜が明けてしまっている。晴也は疲労した体を癒すように、地面に寝転んだ。しばらく息を整え、ゆっくりと立ち上がる。

周りを見渡すと、遠目で堺の町を確認できた。良かった。そこまで京から離れてはいないようだ。

「はやく戻ろう……」

おそらく半兵衛たちが、石川衆のお宝を換金して、信奈にその金を渡しただろう。少しセコいやり方だが、仕方がない。出来れば……いや、石川衆には必ず礼をする事にしよう。

とりあえず帰ろう、と晴也は第一歩を踏み出そうと思つたが。

「あのお……」

え、と晴也が振り向くと年老いた老婆が立っていた。

おかしい。人の気配が全く感じられなかった。

「…なんですか?」

「荷物を持つてもらえませんかねえ」

老婆は背中に、中身が詰まっていそうな大きな風呂敷を背負っていた。それだけではなく、両手にも、中身がはち切れんばかりの風呂敷を持っていた。これでは、年老いた女性にはかなりキツイだろう。

「ああ。いいですよ」

別に急ぐ必要はない。石川衆の奴等に見つかるとかもしれないが、晴也は目の前で困っている人を放っておける程、賢い性格はしていなかった。

「よいしょつ……と」

晴也は女性の両手から荷物を預かった。

「悪いねえ。かなり重いよ？」

「いえ、大丈夫です」

晴也は軽く、会釈するように微笑んだ。

すると、老婆は薄い唇を不気味に曲げると、何かを見定めるような目で晴也を見つめた。

「ほほう……」と声を洩らすと、ゆっくりと後ろを向いた。

「それじゃ、後をつけてきておくれよ……？」

はい、と返事をした晴也だったが、なぜか嫌な予感がしてならなかった。晴也は振り切るように頭を振ると、老婆の後を黙ってついていった。

☆

「(ハハ)。 (ハハ)だよ」

「え、これって……」

老婆の家とは、町外れにあつた。家は古いようで、苔やら茎などがうじゃうじゃと巻きついている。古い……というか、ここ数年は住んでいないようにボロボロだった。

「はい。ありがとねえ」

老婆は晴也から荷物を取りあげると、家の前に置いた。

「い、いえ。失礼ですが、ここに住んでいるのですか？」

そうだよ、と老婆を嗤った。どこか狂つたように見えるのは、気のせいだろうか。晴也が唾然としてみると、老婆はおもしろそうに目を細めた。

「かわいいねえ……」

老婆は、更に狂つたように嗤った。その表情を見た瞬間、晴也は全身の毛が逆立つような、怖ろしい感覚に陥つた。体から嫌な汗が滲み出る。

「そ、そうですか……それじゃあ、俺はこの辺で……」

なぜだ？ なぜここまで俺は怯えている？ ただの変わったおばちゃんだろ？

「あれ、もう帰っちゃうのかい？ お茶でも出そうかね？」

それでは、お言葉に甘えて……そうだ、普段ならそう応えたはずだ。しかし、その言葉は出なかった。

「い、いえ、結構です」

晴也の本能が『こいつとは関わるな！』そう告げている。自分でもなぜかわからない。一体どうしたというのだ。

なぜかこの老婆と一緒にいると、息が詰まる。

「そ……れでは」

晴也は必死に声を振り絞った。「残念だねえ……」と後ろから呟いているのが聞こえた。とりあえず、安心……

「ほんつと……かわいいいどすなあ？」

「っ!!」

妙に不気味な声と共に、後ろから顔を掴まれた。誰だ、そう叫ぶ事が出来きなかった。

「っんあ!？」

冷たい指が、晴也の顔に喰い込んでいく。口に、目に、鼻に。鋭い爪が容赦なく晴也の顔を弄ぶ。

「あれまあ。変な声出しおすなあ」

声色からして、女だろうか。次第に指の力が強くなっていく。

「う、おおお!!」

晴也は後ろから相手の手首を掴むと、勢いをつけて投げ飛ばした。

「よい、しよつと」

掴んでいた相手が、宙を舞う。しつかりと見えた。若い巫女姿の女だった。女は新体操のようにくるりと舞うと、綺麗に着地した。息一つ乱れていない。対して晴也は既に女の独特な雰囲気呑まれ、息が上がっている。

「危ない。危ない。なにしますの?」

「てめえ……何者だ!」

「あらあら。さつきから一緒だったじゃありませんか……ねえ?」

女は顔を手で覆うと、一瞬にしてさつき別れを言った老婆の顔になっていた。

「ど、どういう事だ!?!」

晴也の質問には応えず、女は顔を元の若く白い顔に戻し、不気味に嗤った。晴也は自分で情けないと思うほどに怯えていた。それでも本能的に体が動き、腰に差してある

木刀を抜刀……出来なかった。

「な、ない……!?!」

「あらあら。しつかり持つてないと駄目どすえ」

腰に差してあつた木刀は、女の手握られていた。女は長い舌で、ぺろり、と木刀を舐める。思わず血の気が引いている。

「か、返しやがれ!」

「本当、かわいいどすなあ。かわいい過ぎて、かわいい過ぎて、かわいい過ぎて……」

—————『萎えますわ』。

女は唾うのを止め、晴也を睨みつけた。その視線に、晴也は金縛りにでもあつたかのようにな動けなくなつてしまった。自然と額に汗が浮かぶ。

「質問。そんなに〃自分を殺して〃、楽しいどすかえ?」

「……ど、どういう意味だ」

そのまんまの意味どす、と女は晴也に向かつて歩み始めた。

「俺は……自分を殺してなんかない!」

「……あなたは一見、なんでもそつなくこなし、織田の家臣たちの信頼を得て、織田信奈

を天下人に担ぎ上げているかように見える。しかし……本当は」

「……………」『彼女たちを自分の時代に戻る為の“道具”として扱っているに過ぎない』

「道具？ 元の時代？ なに言ってるやがる……！」

「あらあら。自分では気づいていない？」

女は晴也の真正面に立ち、目を覗き込んだ。女の瞳は細かったが、その黒い瞳は、呑み込まれてしまうと錯覚する程に黒過ぎていた。

「くっ……」

「このままじゃ、元の時代になんて戻れませんよ？ ただの自己満足な偽善なんかして

いてはね？」

「おまえ、俺が未来から来たことを……!?!」

「いい加減、素直になつたらどうですか？」

女は人差し指で、晴也の額を軽く押した。その瞬間、晴也は眠気に襲われた。体から力が抜け、膝をつく。女はそれを見下ろし、小さく息を吐いて去ろうとしたが、晴也は朦朧とした意識の中で女の足を掴んだ。

「……………て……………めえ……………なに……………も……………の」

「ふふ。そうどすなあ……………『阿国』……………と呼んで下さいな」

その言葉を聞くと、晴也は倒れこんだ。『阿国』は晴也の手を振り払うと、手に持った木刀を静かに置いた。

「それと……………」

そして木刀の近くに、ある『札』を置いた。

「さて……………いれぎゆらあ……………」 なこの子は上手く歴史を曲げられるか……………見ものどすなあ」

まあ、それでも……………と阿国は微笑んだ。

「『あの子』よりは骨がありそうでなにより……………」

☆

……眠過ぎる。

「五月雨氏、五月雨氏」

「……晴也、起きる」

「み、皆さん。折角、晴也さんが寝ているのに……」

「あはははは！ ハルどの、起きるのですぞ〜！」

……眠い。

「汗をかいてますね……き、着替えさせないと」

「……脱がそう」

「皆でハルどのの身ぐるみを剥ぎましょうぞ！」

「じゃ、じゃみだれうじの裸が……裸が！」

……寝かせてくれ。

「しかし……晴也さんの裸……」

「……ゴツゴツしてそう」

「早く！ 早く脱がせましょうぞ！」

「じゃじゃじゃみだれうじの裸が……裸がああああ!!」

……、

「なにか口を動かしましたぞ！」

「……なにになに？」

「ぬ、脱がしてくれ？」

「ぬあああああ！　　しや、しやみだれうじのは」

「ああもう！！　　うるっせえ！！」

☆

「なるほど……俺は林の中で倒れてたのか」

晴也は着替えを済ませ、半兵衛たちに話を伺っていた。晴也たちが今いるこの屋敷は、元は中々の名門貴族が住んでいた屋敷だ。だが、将軍が逃げ出した際に治安の悪化

を怖れ、自らも京を離れたのであろう。誰も住んではいなく、それではもつたいないと晴也が買い取った屋敷だ。とにかく広いので、これなら川並衆を含めた晴也軍団全員が住むことが出来る。

「はい、晴也さんの木刀と札が近くに落ちていました」

夢、ではないだろう。こんなに明確に印象に残る夢など無い。

「……札つて?」

「はい。これです」

半兵衛は札を晴也に見せた。大きく紅い字で『護』という文字が描いてある。ただそれだけなのだが、なぜか怖ろしく感じる。

「なんなんだ、この札?」

「おそらく、なにか魔除けのような物だと思います。わたしが持っている札とは違うようですし」

そうか、と晴也は溜息を吐いた。あまりにも謎が多過ぎる。

「あの阿国つて女は一体何者なんだ?」「俺がこいつらを道具として扱っているだど?」

「この札は?」「俺がこの時代にタイムトリップしたことについて、なにか知っている?」

わからない。いくら考えても、なにもわからなかった。しかし、なぜかあの女の言葉は、妙に心に突っかかる。

「……………道具」

俺がこいつらを……………

「……………晴也？」

犬千代が心配そうに、晴也の顔を覗き込む。

「あ、ああ、悪いな」

考えていても仕方ない。振り切るように頭を振った。

「それにしてもお前ら、よくやってくれたな！」

晴也は犬千代、半兵衛、五右衛門、そしてなぜかねねもいたので、ねねを含めた全員の頭をわさわさつと撫でた。ねねは純粹に笑っていたが、それ以外の全員の顔が赤くなっていたのは言うまでもないだろう。

「もしかして……………また宴とかやるのか？」

「そうらしいですぞ。先ほど勝家どのが『宴だ宴だ〜！』と飛び回っていましたからな」織田軍はどうにも、なにか良いことがあると直ぐに、宴だ宴だ、と盛り上がる。別に駄目ではないが、宴会はそれなりに金がかかる。織田家の皆はよく食うからだ。それにこの状況で宴をしてしまうと、上洛した、天下に王手をかけた、という緊張感を解いてしまうのも事実。あまりやり過ぎると逆効果になることも皆無ではない。

「まあ……いいか。助けてくれてありがとな。んじゃ……」

「どこに行くのですか?」

「……散歩だよ」

半兵衛たちは、晴也が石川衆から逃げている時に疲労で倒れたと思っ
ている。阿国のことは、下手に説明しないほうがいい。おそらく混乱させるだけだろう。

晴也は立ち上がり、部屋から出ていった。残った半兵衛たちは、うくん、と頭を捻っている。

「なんでしよう……いつもの晴也さんではなかったような……」

「……確かに」

☆

「ああもう……なんなんだよ……」

晴也は気晴らしに堺の町を歩いた。さすが黄金都市と言われるだけあって、朝早くにも関わらず、人で賑わっていた。だが、気分は晴れるどころか曇るばかり。自然と溜息が積もっていった。晴也でさえ、俺らしくないな、と感じているのだ。

「申し訳ありません。いつもありがとうございます」

ん、と晴也は立ち止まった。やけに聞き覚えのある声が聴こえた。幻聴だろうか、と思ったがそうではなかった。

「いいことよ。織田家はお得意さまでっからな」

「ありがとうございます。それでは」

長秀だった。僅かな小姓と共に、店の店主であろう白髪混じりの男に頭を下げている。店の看板を見ると、大きな文字で『酒屋』と書かれている。

「長秀さん……?」

晴也がそう呟くと、長秀もこちらに気づいたようで、こっちに近寄ってきた。

「……は、晴也どの。どうしてここに?」

それはこっちの台詞ですよ、と晴也。

「いえ、宴会には酒が大量に必要ですから。店主と交渉して、安くしてもらっていたので

す」

「お得意さまって……もしかして……いつも長秀さん自らが交渉を？」

はい、まあ……と長秀は少し恥ずかしそうに苦笑した。

確かに長秀さんは口が達者そうだから、意外と交渉ごとには向いてるのかもしれないが……。

「大変……ですね」

長秀さんは地味ながらも確実な成果をあげてくれる。もし、織田家に長秀さんがいなかったら、ここまで来ることは出来なかつただろう。力で押し切る勝家と知力で支える長秀さんがいたからこそ、織田家はここまで生き残つてこられたのかもしれない……と晴也は改めてありがたみを感じていた。

「晴也どのこそ、なにか悩みが？ 浮かない様子ですが……」

「え、あ、いえ、大丈夫です！」

「そうですか？ なら良いのですが」

「それより、もう宴会が始まるんですよ？ 俺は行けないって、皆に言つといて下さい！」

長秀がなにかを言う前に、晴也は頭を下げ、さっさと走り去ってしまった。

☆

夕陽が沈み始めた頃、晴也は町の外れを歩いていた。

「どういふことだよ……」

晴也は先程、阿国ことあの老婆と会った場所を訪れていた。しかし、そこにはボロボロ家などなく、まるでそれが幻であったように消えていた。

おそらくなんらかのトリックの一種だろうか。この時代には、半兵衛以外にも陰陽師やら幻術遣いやら、オカルトな者たちが少なからずいるらしい。この時代は自分が知っている時代であり、自分が知らない時代でもある。それなら、もう現代で培った常識なんて殺したほうがいいのかも说不定。

『そう、他人をいかなる場合も殺してはならない、という現代では当たり前でも、この世界では酷く馬鹿げているその常識を—————』

「……って、俺はなに考えてるんだ」

拳をつくって、一度自分の頭を叩いた。

「しやあねえ。気分転換に宴会でも行くかな」

憂鬱な自分を叱咤し、足を進めた。

☆

宴会は清水寺の庭園で行われている。既に飲めや唄えやの大騒ぎ。その騒音は、清水寺に近づくにつれ大きくなっていく。足軽たちは戦という地獄を忘れ、短いながらも幸せな時間を過ごす。その幸せな時間をあと何度もうけられるのか、それは己しだいであ

る。

庭園で大騒ぎしている中、僅かな人数で清水寺本堂では織田家重臣たちの宴会が行われていた。

「……だそうです」

「ええっ！ ハル来ないの!？」

長秀は信奈に、晴也が宴会に顔を出さないことを伝えた。すると信奈に一瞬、悲しそうな顔を見せたが、直ぐに「あのバカハルっ！ 今度会ったらただじゃおかないわ！」なんて怒っている。

そしてもう一人。共に織田家を支えた長秀の戦友である勝家にもそのことを伝える。

「なんだとお！………久しぶりにハルと会えると思ったのに」

この調子だ。とても『鬼柴田』と敵から恐れられているとは思えない。晴也のことになると、恋愛下手な、ただのぶつきらぼうな女の子へと化けてしまう。

「……、」

長秀はこれに怖れを抱いていた。晴也が織田家に入ってから、まだ半年も経っていないというのに、足軽を含めた織田家家臣たちへの影響力は凄まじい。

足軽たちからは破格の出世を遂げている『希望の星』と見られ、また家臣たちからは『信奈のストッパー役』として頼られたり、そして晴也軍団は戦の要とまで見られていた

りするのだ。

そして、本人は気づいていないだろうが、勝家と信奈自身………
「……、」

このままではいいのだろうか？

このままでは、もし晴也が戦死した際、下手したら信奈まで後を追ってしまうのではないだろうか。勝家もそうだ。あんなにデレデレな勝家を、長秀は前まで見たことがなかった。そうだ、あり得なくはない。二人とも、既に晴也には並々ならぬ感情を心に秘めているだろう。晴也とて一人の人間。戦から必ずしもいつも無事に帰ってこられると言うわけではないはずだ。

「どうするべきか………」

そんな悩みを抱え込み、長秀は一人、宴会の場を離れた。

☆

「ほら、あんちゃん。そろそろ店じまいだよ」

「うゝ、せめて日が暮れるまで待つて下さい……」

晴也は宴会に向かう、はずだった。だが、行く途中にそんな気分はどこへやら、失せてしまった。そのため、清水寺の近くにあった茶屋でお茶をすすっていた。

「はあく……って、何回溜息吐いてんだよ俺……」

今日で今月分の溜息は吐き出したのかもしれない。晴也は自分が情けなく思い、頭を抱えた。なんでここまで憂鬱な気分になるのか、自分でもわからない。あの阿国の言葉が余程精神に喰い込んだのだろうか。

やはり俺は————

「は、晴也どの……?」

あ、と晴也が顔を上げると、そこには心配そうな顔つきの長秀がいた。なんでそんな顔をしているのか、原因は自分だった。

「ど、どうしたんですか？」

「え……あ、やば」

気づかない内に、頬に涙がつたっていた。晴也は急いで手で拭う。

「晴也どの……一体どうしたのですか？」

「な、なんでもないですよ。それより、長秀さんはなんでここに？」

「わたしはただの散歩に……って、話を逸らさないで下さい！」

意外にも本気の長秀に、思わず晴也は「す、すいません」と反射的に謝ってしまった。

「で、どうしたのです？」

「いや、なんか怖くなっちゃって……」

「なにがですか？」

「俺は元の時代に戻るか、です」

そうだ、今でこそ織田家の一家臣として名が通っているが、初めはただの草履取り。しかも未来から来たなんて理解不明なことを言い、初めは一部の家臣たちから、

「なんだ、あのほら吹きは？」「おそらく、姫さまに気に入られようとしてるんだ」「いやらしいみやあ」

なんて言われていた。

五月雨晴也は帰る場所がある。見知らぬ土地、見知らぬ人、見知らぬ歴史の流れ、そ

れに流され、なんとかここまで来た。それまで決して楽だった訳ではない。死ぬと思う時が多々あったはずだ。それでも、なんとか生きてきた。それまでに溜まっていた不安や絶望が、なにかの拍子に溢れてしまったのだろう。

「全く……零点です」

「むぐつ!? な、長秀さん!?!」

そう思うと、自然と晴也を胸に抱き寄せていた。

「いいですよ」

「え?」

「泣いても……いいです」

「でも……」

「今は、わたしを母と思って下さい」

そうだ、自分の悩みなんて比べ物にならないくらいに、晴也は大きな悩みを抱えているのだ。

晴也はしばらくなにかを言いかけていたが、やがて長秀の胸に体を預けた。

「……すいません」

「いえ、大丈夫です」

長秀の胸は勝家やフロイスには劣るものの、柔らかく、豊満とっていい胸だった。

思わず体が熱くなる。だが、それは長秀もであった。長秀とてまだ若い。そして、男に体を触らせたことなど、元服してから一度もなかった。故に長秀の体も自然と熱くなる。それは仕方のないことだ。男と女なら至極当然。

「つう……」

しばらく経つてもまだ長秀は恥ずかしいようで、自らの胸元に顔を埋めている晴也を見た。

晴也は……

「……すく……すく」

寝ていた。

「ええ!？」

長秀は驚いていたが、晴也はもうすっかり眠っている。それほどまでに気持ちが悪かったであろう。

「まったくもう……これ、零点です……」

なぜか一人で興奮している自分が恥ずかしくなり、長秀はより顔を赤らめた。

「いや、でも……」

誰にも聞こえないような小さい声で「ま、満点……かな」と呟っていた。

だが、そんな甘酸っぱい時間は決して長くは続かなかつた。

「……万千代お？」

「……な、長秀ええ!？」

まさに二匹の鬼と化した主君と戦友が、がさがさと茂みの中から現れた。長秀は顔を最高潮に赤らめ、どうにか弁解しようとしたが、焦り過ぎているためにいつものようには口が回らない。

「え、と、これは……」

「むうう……な、長秀さん……」

不意に晴也が起きた……訳ではなく、寝言を吐いた。この時、とにかく長秀は焦っていたため、晴也を頼る他になにもいい案が浮かばなかつた。

「そうだ、晴也どのからもなにか言つて下さい!」

藁にも縋る思いで、言葉を待つた。

「長秀さん……気持ちいいです……」

これこそ零点です……と長秀はこれから降りかかるであろう災難を嘆いた。

第二十一話 南蛮寺強襲

——人類には怠け者が必要だ。科学が進歩していくのは、怠け者がより簡単な方法を、または、より便利な道具を次々と生み出すからだ。もつと簡単に、もつと楽にと模索してくれるおかげで、この世界は出来ているのかもしれない。

夜の冷たい風が身に染みる中、長秀はそんな寒さもものともしないように、自分の体が熱くなっていることに気づいた。それは晴也を抱いているからだろうか、それとも見られてはいけない主君に見られてしまったからだろうか。どちらにしても、冷や汗が滲み出ていることに変わりはない。長秀が口ごもっていると、信奈から先に口を開いた。

「まったく……万千代も油断ならないわね！」

「も、申し訳ありません！」

恥らいながらも頭を下げる長秀。いっそ、長秀の胸の中に顔を渦めている変態を蹴つ飛ばしてやろうかと思つたが、止めた。代わりに、晴也の頭をそつと撫でた。

「まあ、こいつも疲れてるのよね……」

「もしや姫さま、さっきの話を……？」

ええ、とうなづいた。それを見た長秀はほつと胸を撫で下ろした。さっきの話を聞いてくれていたのだつたら、この状況について色々と弁解できる。

「盗み聞きをするつもりはなかったわ。ただ、二人の話し声が聞こえたから……」

「そ、そうですか……」

信奈は長秀が座っているお座敷の隣に腰掛けた。

「本当……変なやつよね。こいつって……」

「そう、ですね」

信奈は晴也の気持ち良さそうな寝顔を見ると、頬を赤らめながら、そつと微笑んだ。それを見た長秀は、少し自分が哀れに感じてしまった。主君が恋しているであろう男を、一家臣である自分が好きになる。そんなことはあり得ないし、あつてはならないことだ。

「ちよつと、六！　いつまでそんなところにいるのよ!!」

ひっそりと影を落として、木陰に座る勝家。今にも泣き出しそうなジト目でこちらを睨んでいる。

「だつてえ……長秀が〜！」

「そ、その誤解は忒点です！ わたしはただ……！」

「もう！ あんたたちうるさいわよ!!」

信奈が一喝し、長秀も勝家も直ぐに口を詰むんだ。ここら辺は、流石の織田家当主と
いったところだろうか。

「姫さま。夜風が当たります……。清水寺に戻りましょう」

「そうね……でも、こいつはどうするの？」

困りました、と長秀が首を傾げた。とにかく、すっかり寝息を立ているこの男をどうにかしなければいけない。

三人が悩んでいると、茂みから、がざがざとなにかが動く音がした。その瞬間、勝家と長秀は信奈の前へと体を出した。長秀がお座敷から立ち上がっているため、晴也は支えを失って倒れこんでいる。だが、それでも目は覚まさなかつた。

「姫さま、お下がりにください」

「曲者か……!?!」

一瞬にして和やかな雰囲気が一変。三人とも、思わず息を呑んだ。その茂みから出

てきた人物とは……………

「の、信奈さまああ!!」

「え!? 十兵衛!?!」

見目麗しい美少女。明智十兵衛光秀であった。十兵衛はなぜか涙目で、その広い額には汗をかいている。

「ど、どうしたのよ十兵衛? ……というか久しぶりね」

「酷いです! わたしがせつせつとお金を稼いでいる間に!!」

「……………は?」

「た、たつたの三満貫ですが、集めてきたんです! 十二満貫は無理でしたが……………これだけでも届けましょう!!」

と光秀が必死に訴えるが、明らかに話がかみ合っていない。信奈と十兵衛の話に割って入るように、長秀は口を開いた。

「なるほど……………明智どのは勘違いをしているようですね」

長秀の言葉に、光秀の目が丸くなる。

「……………ど、どういうことですか?」

「既にやまと御所には、晴也どのたちが集めた十二満貫が届けてあります」

期限切れギリギリだったのが、晴也がなんならかの方法で集めたであろう銭は、犬千代

たちが届けてくれた。そして晴れて、今川義元が將軍宣下を行う許可を取ることが出来たのだ。

「あ…………え…………？」

そ、そんな…………と光秀が膝から崩れ落ちた。

「あんた、なんでハルが銭を届けたこと知らないのよ？」

「それが…………諸国を走り回り、銭を集めてましたです…………」

くう…晴也先輩に先を越されるなんて…………と光秀はもう涙目。

「まったく…………まあ、いいわ。とりあえず清水寺に戻りましょうか…………でも、十兵衛には罰としてそいつを持つてもらおうわ」

「そいつ…………？」

信奈は、座敷で横になって寝ている晴也を指さした。

「ええええええええ!! なんで先輩がここにっ!？」

「ほら、早く持つてきなさいよ」



翌朝、晴也は清水寺の庭園にある倉庫で目を覚ました。何度か出入りしたことがある為、見覚えがあった。

「あれ……？ どうして清水寺に……」

とりあえず、昨晚のことを思い返してみた。思い出すと「ああ、俺ってあの後寝ちまつたのか……」と後悔した。どうせなら、もう少しあのままで良かった。もったいない、と溜息を吐いた。

「ハル、大変だあああ！」

「……ん？」

その声と共に、勢いよく扉が開かれた。朝日の眩しい陽射しが入ってくる。そして開けた犯人である勝家は、転がるように倉庫の中へと入って来た。

「た、たたた大変なんだ！」

相当に焦っているようで、上手く呂律が回っていない。

「お、落ち着け勝家。……なにがあつた？」

勝家は一旦深呼吸をし、深刻に告げた。

「た、武田と上杉が……!!」

☆

勝家が言うには『武田上杉が和睦をし、連合を組んで美濃へと侵攻してくる』という話だった。

清水寺の外へと出ると、既に入り口である門周辺には騎馬隊や足軽部隊が編成されて

おり、出撃準備万端といった感じであった。長秀は晴也に気づくと、馬から降りて駆け寄ってきた。一瞬、両者も昨日のことで気不味くなって沈黙したが、今はそんな状況ではなかった。

「……晴也どの、勝家どのから聞いておりますか？」

「あ、ああ。武田上杉が和睦したって……」

「はい。川中島で和睦し、武田上杉の連合軍が美濃に侵攻してくる模様です」

「ありえねえ……」

あり得るはずがない。史実でも宿敵とされる武田上杉が和睦、ましてや連合軍なんて夢物語だ。しかし、もし事実ならこれほど最強の部隊はないだろう。『甲斐の虎』である武田信玄に『越後の龍』である上杉謙信が率いる連合軍。その二人が率いる連合軍なんて……戦国マニアとしては鳥肌が立つほど見てみたいが……とてもじゃないが敵に回すなんて怖ろし過ぎる。

「でも、この清水寺はどうするんですか？　いくら美濃に侵攻してくると言っても、そう簡単にはここを明け渡すのは……」

確かに信奈の性格なら十中八九、美濃へと軍を向かわせるだろう。義父である叡、齋藤道三を見捨てるなんて信奈には無理だ。だが、だからといってこの清水寺をすんなりと空にしてしまうのはリスクが高い。もし畏だった場合、敵に攻め込まれば直ぐにこ

の清水寺は落とされてしまいうだろう。籠城をしようにも、城ではなく寺なのだ。

「ハルは十兵衛と、この清水寺に残るのよ」

振り向くと、まだ防具を身につけていない、うつけ姿の信奈が歩いて来た。

「……信奈、だがな」

「晴也先輩〜！」

晴也が続けて言葉を繋ごうとしたが、光秀の声によりかき消されてしまった。なんだよ大事な時に、と少し怒り気味に光秀のほうを振り返った。

「なんだよ？」

「これ、先輩宛だそうです」

光秀は手に持っている書状を晴也に手渡した。

「誰からだ？」

「さ、さあ……会合衆の一人……とか？」

「なんで疑問を疑問で返すんだよ。まあいい、見てみるか」

晴也は澁々書状の中身を見た。その内容に、思わず晴也の目が見開く。光秀が「どうしました？」と書状の内容を見ようと思ったが、直ぐに晴也に閉ざされてしまった。

「……ちよつと行ってくる」

「……え？」

それだけ言うと、晴也は誰も乗っていない馬へと飛び乗った。

☆

「皆さん、大丈夫ですよ。落ち着いて下さいね」

ここは南蛮寺。キリスト信者とパードレであるフロイスたちは、祭壇の前で座り込んでいた。当たり前だ。金で雇われたであろう、種子島や日本刀を担いだ強面の傭兵たちが、この南蛮寺を占拠していた。

フロイスは悲しげに眉をひそめて「神よ……この者たちに罪はないのです」と呟きながらロザリオを握りしめていた。

そんな健気なフロイスを見て、一人の男が近づいてくる。

「いい女だなあ……楽しんでそうだな」

ひつ、とフロイスは体を震わせた。すると大将格であろう虚無僧は、ずいぶんと使いこなしてきたであろう傷だらけの種子島を、男の頭に突きつけた。

「おい、妙なことはするな。こいつらは大事なエサなんだからな？」

「……へ、へい。すみません、善住坊の兄貴」

種子島を担いだ、虚無僧姿の暗殺者。名は、『杉谷善十坊』。善十坊はある目的の為、金で傭兵たちを雇っていた。

善十坊が種子島を下ろすと、男は胸を撫で下ろした。

「……フロイスはん。大丈夫でつか？」

「は、はい。ありがとうございます。宗久さん」

すると、宗久はゆっくり頷いた。この南蛮寺は、南蛮に興味がある『今井宗久』がよく足を運ぶ場所である。しかし、自分が納屋の主人・今井宗久であることには、傭兵たちは気づいていない。信者の一人と思われているだろう。

「……エサ？」

宗久はさつきの大將格の男……確か、善住坊とか言われていた男の言葉を思い出した。あの男は、自分たちのことを『大事なエサ』と言っていた。自分たちを利用して、誰かをおびき寄せようとしているのだろうか。

「兄貴！ 来ましたぜ！」

外を見張っている傭兵たちから声上がる。

すると善十坊は種子島を担ぎ、南蛮寺を出た。南蛮寺に籠っていた他の傭兵たちも後に続く。

「……ふん。来たか」

こちらに向かつて、馬を急がせる目当ての男。『五月雨晴也』。善十坊はニヤリと口を歪ませた。傭兵たちも「馬鹿な奴だ」と言わんばかりに嗤う。まさか、あんな簡単な手紙に釣られるとは。

晴也は馬から飛び降りると、すかさず木刀を抜刀した。善十坊は歪んだ笑みを浮かべながら、晴也に近づく。

「よう、五月雨晴也。俺は杉谷善十坊だ。短い間だが、宜しくな」

「……おまえか、こんな手紙を送ったのは」

「ああ、まさかこんな簡単に釣られるとはな。情報が確かで良かったぜ」
手紙の内容とは簡単なものだった。

『五月雨晴也。我々は南蛮寺を占拠している。貴様が来なければ、パードレに信者、一人残らず殺す。無論、一人で来なかつた場合もだ』

苛ついたのか、晴也はその書状を破り捨てた。そして自らを落ち着かせるように、静

かに息を吐く。

「つたく、めんどくせえな。真正面から来ればいいだろ？」

「……悪いが、それは無理だ」

善十坊が手を上げて合図すると、傭兵の一人が南蛮寺から一人の女……フロイスを連れてきた。善十坊は懐から短刀を取り出し、フロイスの白く細い首元へと突きつける。

「は、晴也さんっ！」

「フロイス……！」

「人質つてやつだ。おら、木刀を捨てろ」

晴也は躊躇せずに木刀を地面に投げ捨てた。「馬鹿が」と善十坊が呟くと、続いて傭兵たちが晴也の周りを取り囲んだ。かなりの数である。いくら晴也でも、この数を拳一つで切り抜けるのは無理だ。いや、数が問題なのではない。

一番の問題は、人質が取られていることだろう。晴也は降参したように両手を上げた。傭兵の一人が、晴也を縄で縛り上げる。

「おい、俺たちをどうする気だ？」

「簡単だ。おまえらにはエサになつてもらおう」

「……エサ？」

「ああ、織田信奈の……な」

☆

舞台変わって、清水寺。少し時を遡る。

「もう、なんなのよハル！」

晴也の様子がおかしかったのを見て、なにかを察した信奈は、部隊を二つに分けた。まず一陣が長秀や勝家率いる主力部隊。これを美濃へと先行させる。そして第二陣が信奈率いる部隊である。嫌な予感がした信奈は、晴也の帰りを待つことにした。だが、一向に帰って来ない。このままでは埒があかず、道三が気がかりな信奈は、出陣しようか迷っていた。

そんな時、薄っすらと妖美な声が信奈の耳に入る。

「な、なにっ!？」

反射的に周りを見渡すが、美しい『紅色の蝶』が舞っているだけだ。もう一度、よく耳を凝らしてみる。やはり、なにかが聞こえる。それは確かに、女性の声色だった。更にもう一度、自らが呼吸する音さえも殺して、必死にその声を拾った。

すると、確かに聞こえた。

「うそ……そんな……」

衝撃的な内容が信奈の耳に入ってきた。信奈はしばらく唾然としたが、時は一刻を争う。自らの唇を噛みしめると、意を決したように光秀を呼んだ。すると光秀は、待つてましたと言わんばかりの早さで信奈の下へと推参した。

「はい! 信奈さま、この十兵衛になにかご用でしょうか!」

久しぶりに呼んでもらったのが嬉しかったのか、光秀は嬉しそうに微笑んでいる。しかし、そんな気持ちもいざ知らず、信奈は光秀の肩に手を置いた。

「十兵衛、こここの部隊はあんたに預けるわ。ここは任せたわよ」

「はい! ……つて、ええっ!？」

光秀がなにかを言う前に、信奈は馬に跨っていた。

「後は頼んだわ!」

と言い残し、清水寺から走り去ってしまった。そんな様子を見ていた犬千代と半兵衛

はなにかを察し、お互いに顔を見合わせた。

「……犬千代たちも行く？」

「は、はい！」

犬千代は直ぐさま馬へと飛び乗り、半兵衛は札を一枚取り出した。その札からは、馬というかロバのような式神が飛び出し、半兵衛はその上に飛び乗った。

そして二人は急ぎ、信奈を追った。

「ど、どういうことですか……？」

残った光秀は一人、不安気に呟いた。

☆

「さて、織田信奈は来るかな……」

善十坊は南蛮寺の近くの民家へと忍び込み、狙撃の準備をしていた。どんな獲物でも百発百中で済ましてきた自分なら、まず失敗は無いと確信していた。

もし失敗した場合も、この近辺には多くの傭兵たちを忍ばせている。狙撃に失敗しても、傭兵たちが信奈に襲いかかるだけだ。

そして南蛮寺では、晴也を始め人質であるフロイスたちも縄で縛られ、身動きが取れなくなっている。

『おまえらには織田信奈を釣るエサになってもらう、ただそれだけだ。なに、安心しろ。織田信奈を殺した後は、おまえらも仲良く殺してやる』

……と善十坊は言っていた。信奈を釣るエサにされるなんて死んでも御免だが、フロイスたちを人質に取られていては手も足も出ない。信者には、フロイスから南蛮の文化を教えてもらっている子供たちもいるのだ。それこそ死んでも守るしかないだろう。

だがしかし、そもそもこいつらの目的はなんだ。信奈を殺して、なんのメリットが

ある。散々悩んでも、わからない。どこかの大名なら信奈が消したいと考えてもおかしくないが、こいつらはただの傭兵の筈だ。

ということは、誰かに頼まれてもしたのか……？

「五月雨はん。五月雨はん」

「うるさいな……つて、なんであんたがここに!？」

晴也の後ろで、豪快な笑い声を立てている男。晴也が現代のたこ焼きを売った納屋の主人、今井宗久である。宗久は笑い終えると、晴也にずいずいと近づき、小声で話し始めた。

「偶然、ここでフロイスはんの南蛮の話を聞いとつただけです」

「そ、そうか……」

そう応えると、宗久は更に晴也に密着し、小声で呟いた。

「……これを見てくださいな」

宗久は袖の中からキラリと光るもの、およそ人差し指程度の長さしかない、小さな短刀を袖口から取り出した。

「お、おい。それ……」

「商売やるんは、戦と同じでつせ……?」

たこ焼きの独占権を持つ、宗久のことだ。おそらく、周りの商売人からも少なからず

恨みを買っているのだろう。宗久は傭兵たちにバレないように動き、晴也の背中にびつたりと張り付いた。そして縄を切ろうとしたが。

「……ちよつと待つてくれ」

晴也はしばらく悩んだ。今の自分には木刀が無いし、体の自由も効かない状態だ。しかし、今ここで下手な行動をとれば、フロイスたちの命が危ない。それに、この南蛮寺の敵を倒しても、外にも敵はうじやうじやという。それでは、返つてフロイスたちを危険に晒してしまうのではないだろうか。信者は大半が年寄り、そしてまだ年若き子供ばかりだった。

自分一人で、フロイスたちを守り切れるという自信はない。だが動かなくては、信奈がここに来て、善十坊に狙撃されてしまう。自分の命ならともかく、他人の命がかかっているのだ。そう考えると、晴也は柄にもなくビビってしまった。これでは、正に八方塞がりである。

そんな時。

「う、うああああああん!!」

人質となっている子供たちの中でも最年少であろう、小さな女の子が突然泣き出してしまった。当たり前だが、こんな状況で子供に泣くなと言う方が無理だ。フロイスや周りの子供たちが「大丈夫、大丈夫」となだめているが、その泣き声が止む気配は無い。

「うわあああああ！ 早く家に帰りたんだよおお!!」

少女の泣き声に呼応し、更に男の子までもが泣き始めてしまった。

そんな泣き声に、遂に我慢出来なくなった男の二人組が、その子供たちのほうに近づいた。一人の男は冷静そうに細い目で泣く子供を見ているが、もう一人の太った男の方は、痺れを切らしいるのが目に見えてわかる。

「うるせえんだよ！ このクソガキがあ!!」

と太った男は怒鳴り散らす、正に火に油。女の子の泣き声は止むどころか大きくなってしまった。

だがやはり、子供たちの泣き声は止まず、男の怒りは益々込み上がる。このままでは不味い。この二人組の男は、善十坊の選りすぐりの傭兵だろう。女子供だろうが、平然と殺してしまう筈だ。

晴也は南蛮寺の中をぐるりと見渡す。幸いにも善十坊の命令のおかげで、南蛮寺内にいる敵は二人だけだ。しかし、このまま放つて置いては子供たちの身が危ない。

晴也は覚悟を決めた。

「宗久、頼む……!」

そう言うと、宗久は黙って頷き、袖口から短刀を自らの手元に落とした。そして宗久は静かに息を吐くと、黙々と晴也の縄を切り始めた。傭兵たちが怒鳴っているおかげ

で、縄を切っている音はすっかりかき消されていた。

おそらく、あんな細い短刀でこの縄を斬るのにはまだ時間がかかる筈だ。その間に男二人をどう倒すか、作戦を考えることにした。

しかし……

「五月雨はん。斬れましで」

「はやっ!?!」

作戦なんて考えている暇などなかった。太った男が、泣くのを止めない男の子の胸ぐらを掴んでいる。

「このガキがッ!!」

男が拳を振り上げる。それと同時に、晴也は立ち上がった。

「子供相手になにしてんだよ!!」

先ずは、走り込んで飛び膝蹴り。丁度良いことに、男は晴也の声に反応してこちらを向いていた為、膝が顔面に抉りこんでいた。太った男は、万歳をするように倒れた。

「……っ!?! おまえっ!」

もう一人の男が武器を取る前に、晴也は一步で男の懐へと飛び込む。晴也はその男に向かつて拳を振り上げる。男はとっさに己の手で、側頭部を守るようにガードした。しかし、それは晴也のフェイク。

「が……アア!？」

殴りではなく足技。男は足を踏みつけられていた。晴也は男の足の親指に全体重を乗せる。男は壮絶な激痛に、後ろへ下がろうとするが、足が踏まれている。男は思わず踏みつけられた自分の足に視線を落とした。

だが、それは男のミス。

「どこ見てんだよ……!」

真下に落とした自分の視線の死角になるように、真上から晴也の頭突きが振り下ろされた。その硬い額が、無防備な男の頭蓋骨を強打する。男の視界がぐらりと揺らぐが、晴也は止まらない。

「おらあああ!!」

晴也の拳が水平にカーブする軌道で、男のこめかみを狙う。足は踏まれていて、避けることはできない。男はとっさに己の手で側頭部を守るようにガードしたが、それもフェイクだった。

晴也の拳は、回り込むように男の後頭部に向かっていた。後頭部は、脳に直接ダメージを与えやすい。ということ、後遺症が残りやすい。故に、ボクシングや空手などのスポーツでは狙ってはいけない反則技に認定される程の急所である。

「ぐ、がアア!？」

ガツン！ と壮絶な衝撃。

その瞬間、男の体全身の力が抜け、沈み込むように崩れ落ちた。

「はあはあ……………どうだ……………」

とりあえず、これで南蛮寺内の敵は一掃……

『このツツ！ クソがアアアアアア!!!』

……………出来ていなかったようだ。

先程、晴也が飛び膝蹴りで沈めた男だった。しかし、立ち上がったこと以上に驚いたのは、その男が持っている物である。

……………硝煙の臭い。

「このガキ……………殺すウウ!!」

そう、男が持っているのは種子島。

男が持つ種子島の銃口は、間違いなく晴也に向いていた。あまりにも予想外過ぎて、晴也は動けなかった。すると、男はニヤリと口を歪ませた。

「……………やば」

種子島が火を噴く。

南蛮寺には、大轟音が鳴り響いていた。

第二十二話 清水寺の戦い

「……世の中には幸福も不幸もない。全てはその場の考え方によって変わってしまうものだ。幸福なときに不幸になれるし、不幸な時には幸福になれる。所詮は自分の事だ。考え方を変えるだけで、全ては変わっていく。」

「……もう少しだわ」

信奈は清水寺から馬を飛ばし続け、既に南蛮寺近くまできていた。もし『あの言葉』が本当だとすれば、晴也が危ない。あの言葉、とは清水寺で聞いた奇妙な声のことだ。ど

うやら、自分だけにしか聞こえていなかったようだが……

『南蛮寺にて五月雨晴也、パードレ、信者を人質にとっている。助けたければ織田信奈、南蛮寺まで来い——』

こんなところで晴也に死なれてもらっては困るのだ。もつともつともつと手柄を立てさせて、押しも押されぬ織田家の家老へ。そして、やがては一国一城の主。更には、天下統一の為に繰り出される地方方面軍をまるごと率いて、天下統一の最大の功労者に。

その暁には、御所から目もくらむような高い官位に晴也を昇らせて……それでも……この国が無理なのであれば、大きな船を造って、日本を飛び出せばいい。狭い日本を飛び出して、広い海へと。そうすれば、誰にも文句は言えない筈だ。自分と……晴也との……。

「つて、なに考えてんのよわたし!?!」

信奈は自らの妙な想いを振り切るように、頭を振った。

☆

「……………ふん、来たか」

そう呟くと、善十坊は種子島を構えた。まだ遠いが、信奈の姿ははっきりと見えた。しかし、まだ遠い。しつかりと殺さなければならぬ。今まで自分は、どんな相手でも一発で仕留めてきたのだ。今回も同様、無駄玉を撃つ気は一切無い。南蛮寺近くの空き家に潜んでいる善十坊は、種子島で狙いを定め始めた。もう少し、もう少し近づいてくれれば……………。

—————そんな時、南蛮寺から大轟音。

「っ!?! なんだと……………」

その轟音に驚き、信奈の馬は足を止めてしまっていた。そして信奈の後ろから、半兵衛と犬千代が駆けつけてきた。半兵衛はすかさず札を取り出し、犬千代は信奈の前に出る。

「の、信奈さまー！」

「……危ぶない」

「なっ!? なんであんたたちがいるのよ!？」

犬千代と半兵衛の二人は、信奈を守るように前に出ていた。そして、物陰に隠れている。善十坊は舌打ちをし、民家から飛び出した。先程の銃声……おそらく傭兵たちが人質を銃殺したのだろうか。だが、そんなこと知ったことではない。南蛮寺でなにが起きていようと、織田信奈さえ殺せばいいのだ。この暗殺を成功させれば、ありえないほどの大金が自分の下に流れ込んでくる。そういう話になっている。

それに、織田信奈がこのまま天下を取れば、おそらく戦が無い平和となってしまうだろう。それは困る。自分のような傭兵は、この時代でなければ生きられない。今更、別の道など歩めない。

善十坊は息を殺し、草むらに紛れ、織田信奈の下へと見つからぬように近づく。もう少し……もう少し……よし。この位置なら狙える。下手に失敗して逃げられるのは不味い。少し遠いが、自分の腕には絶対の自信があった。

「これで……！」

心を落ち着かせ、種子島を構える。そして信奈の額へと狙いを定める。そして、ゆっくりと引き金を……

「織田信奈は……やらせんっ！」

「ぐほお!？」

突如、後ろから強烈な体当たりを受けた。そのまま一転。善十坊は顔に付いた泥を払いながら、直ぐさま立ち上がった。すると目の前には、龍の仮面を付けた六尺五寸の大男が立っていた。それだけで、善十坊は威圧されてしまった。

「な、なんだおまえ……！」

「貴様が杉谷善十坊か。儂の名は龍面鬼、手合わせ願おう」

そう言うと、龍面鬼は腰の刀を抜刀した。

「お、おまえ……織田のっ」

善十坊がそう言葉を繋げる前に、龍面鬼は刀を振るった。間一髪、善十坊は転がるように避ける。

「儂は……織田の者などではない」

「じゃ、じゃあなんで……！」

「我が友の為……織田信奈には、ここで死んでもらっては困るのでな」

これは織田信奈の為などではない。我が友の為。そう自分に言い聞かせ、龍面鬼こと斎藤義龍は、憎き相手を守る為に立ちふさがる。

☆

死んだ。絶対に死んだ。避けられない。俺、五月雨晴也の人生はここで終わりだ。当たり前だが、銃弾より速く動ける人間など存在しないのだ。いや、存在したとしても、それは間違いなく人間じゃないだろう。ま、そんな思考も無駄だ。もうすぐ俺は死ぬんだから。心残りはある。この時代にも、現代にも。いや、それにしても銃殺か。普通に嫌だな。死ぬほど痛いんだろうな……いや、そりゃ死ぬんだから当たり前か。悪いな、

秀吉さん。あんたの代わりは、俺には荷が重すぎるらしい。

———そんな思考をぶち壊すように、酷く甘ったるい声が聞こえた。

「ほら、いつまで目を閉じているのだ？」

「……え？」

ゆつくりと目を開ける。そこには、倒れている男の上に堂々と立っている少女……石川五右衛門こと、『五郎吉』がいた。しかし、いつもの様な大胆不敵な格好ではなく、こらの子供たちが着そうな服を着込んでいた。そして、なぜか得意気な顔をしている。よく見ると倒れている男は白目を向き、口からは泡を噴いていた。どうやら、完全に気絶しているようだ。

「いやあく本当に危なかったな。おまえ、少し遅かったら間違いなく死んでたぞ？」

「え、ど、どうしてだ……？」

ほら、と五郎吉は晴也の後ろを指さした。振り返ると、その壁には小さな穴があった。銃弾の跡だ。ということは、おそらく五郎吉が銃の軌道をズラしてくれたのだろ

う。

「フロイス、壁に穴開けちまったが許してくれよお？」

「はい。それくらいは別に気にしなくても大丈夫です」

「え、フロイスと知り合いなのか？」

ああ、と五郎吉はうなづいていた。フロイスもうなづいているし、本当らしい。

「あたいは南蛮寺に良く来るからなあ」

「そ、そうなのか……。そしにしても、本当助かったぜ。ありがとな」

「ん、あ、ああ……」

五郎吉は頬を染め、恥ずかしそうにそっぽを向いた。そして、ゆっくりと溜息を吐いて口を開いた。

「……ふん。最初、おまえが人質に加わった時は驚いたぞ」

「……おまえ、人質になつたのか？」

「まあな。おまえに話しかけようとしたけど……ちよつと試したかつたんだよ」

「試す？」

すると五郎吉は不気味に笑いながら、なにかを見透かすように言った。

「そう、あんたがこんなところで気を小さくする男なのか。あたいの目は間違つてなかつたのか……つてな」

「……そ、そうか」

「まあ、まだ色々と言いたいことがあるが、話は後でだッ！」

五郎吉の言う通り、先程の銃声により、信奈暗殺の為に近くに潜んでいた傭兵たちが集まってきていた。急がなければ、どっちにしろ皆死ぬ。晴也は五郎吉から短刀を受け取り、いち早く人質たちの縄を解き始める。その間に、五郎吉は南蛮寺から飛び出した。「つて、おい！ 危ねえぞ!!」

晴也の制止しを無視し、五郎吉は堂々と立っていた。既に南蛮寺の周りには沢山の傭兵たちが取り囲んでいた。傭兵たちは、突如出てきた五郎吉に面食らっていた。

「な、なんだ、このガキ……?」

「ど、どういうことだ?」

やれやれ、と五郎吉は面倒くさそうに頭を搔く。そして思いつきり息を吸い込み、それを叫んだ。

「石川衆ツツツ!!!」

「「おおおおお!!!」」

その叫びに呼応し、近くの民家や茂みの中から、石川衆の屈強な男たちが声を荒げながら続々と飛び出してきた。そして飛び出すと同時に、面食らっている傭兵たちをなぎ倒していく。

「野郎どもオ！ こいつらをぶっ潰す!!」

「「おおおおお!!」」

正直に言おう。石川衆や川並衆の大將である五右衛門と五郎吉はほぼ同等だ。だが、それを除いて石川衆と川並衆が戦い合ったとしよう。川並衆よりは僅かに人数が少ないが、まず間違いなく石川衆が勝つだろう。京で義賊をするというのは、尾張や駿河なんかで盗みをするのとは訳が違うのだ。

「オラア！ 早くこいつらをぶっ潰すぞオオオ!!」

「な、なんなんだよ!! こいつら!!」

そんな石川衆の猛撃により、傭兵たちは何も出来ずに潰されていく。いくら善十坊の選りすぐりの傭兵たちだろうと、所詮は傭兵。義賊として、決して易しくない修羅場を潜ってきた石川衆とでは比べものにならなかった。

「俺の出る幕はない……かな」

おそらく、石川衆が傭兵たちを倒すのも時間の問題だろう。なら、その間に南蛮寺で捕らわれている宗久たちを解放しようとした時。

「晴也よー」

その声と共に、草むらの中から義龍が現れた。なぜか肩には、ぐつたりと気絶して縄で縛られている善十坊を担いでいた。

「義龍!? おまえ、どうしてここに!?!」

「儂はここで残っているように、五右衛門殿から仰せつかったのだ」

晴也は川並衆にとある任務を与えていた。とても重要な任務である為、川並衆の全力を使ってくれと言った筈なのだ。

「ていうか、なんで善十坊を担いでるんだ……?」

義龍は担いでいた善十坊を乱暴に下ろし、口を開いた。

「こいつを捕まえて、色々と問いただしのだが……晴也よ、不味いことになっておる」

「不味いこと?」

「ああ、実はな……」

☆

「なっ!? それ本当かつ!?!」

うむ、と義龍は首を縦に振った。義龍の話が本当ならば、この状況は非常に不味い。急いで清水寺に戻らなければ……!

そう考えていると、後ろから誰かに蹴飛ばされた。

「いつてえっ!?!」

「この、心配かけるんじゃないわよ!」

信奈だった。かなり飛ばしてきたらしく、息が上がっている。良かった、どうやら無事にここまで来れたらしい。しかし、石川衆の事はどう説明するか。川並衆のような無名の川族ならともかく、石川衆は京では名の知れた連中だ。

どうしよう、と考えていたが何時の間にか石川衆の姿は一人も見当たらなくなっていた。こちらの考えを察してくれたのだろうか。しかし、ありがたい事に善十坊が雇った傭兵たちは全員地面に伏していた。

「ちよつと! どこ見てるのよ!!」

「あ、ああ。信奈、悪かったな……」

「も、もういいわよ!」

ふん、と信奈はそっぽを向いた。しかし、これで無事解決という訳にはいかない。義龍と晴也は顔を見合わせ、黙ってうなづく。流石に信奈に見られるのは不味いらしく、義龍はひっそりと晴也たちの下を離れた。それを見届けると、口を開いた。

「なあ、おまえの他には？」

「半兵衛と犬千代だけよ。二人には人質に怪我人はいないか見させてるけど」

すると、清水寺は数が少ない上により手薄になっているのか。なら、こんなところで悠長に話している場合じゃない。

「信奈、半兵衛たちと急いで清水寺に戻るぞ」

「な、なに焦ってるのよ……」

「十兵衛が危ない……！」

「ど、どういう事よ？」

話は後でだ、と晴也は早速自分が乗ってきた馬に飛び乗った。ここで説明するよりも、清水寺に行きながら説明をするほうがいいだろう。

☆

「信奈さま……一体どこに……」

信奈が清水寺を飛び出してからそれなりに時間が経つたが、未だに信奈は戻ってこない。付近を見て来るように兵に命令したが、そもそも信奈がどこに行つたのかもわからないのだ。時が経つにつれて、不安ばかりがつのつていった。

「まさか……この十兵衛が使えないから嫌になつて……」

そうだ、思えば自分は全然役に立っていない。今川義元を將軍にする為に必死に集めた銭も、自分より身分が下である筈の晴也は、その数十倍以上のお金を既に調達してしまつていた。晴也先輩さえいれば、私はいらんのではないだろうか。そもそも、先輩さえいなければ……。そんな風に考えてしまつていた。一人寂しく悩んでいると、見張りの兵士から信じ難い知らせが飛び込んできた。

『大和の松永弾正が今川義元さまの首を狙い、一斉に京へと進軍中！』

思えば、松永弾正久秀が謀反と下克上の常習者である。このような事態に陥る可能性もあつた筈だ。しかし、織田軍の大半は武田上杉連合を迎え撃つ為に美濃へと進軍中。今ここにいる部隊では、あまりにも兵力が足りない。それだけではない。敵は一万を超

える大軍。その上、城塞ではなく、寺に籠つての防衛戦である。あまりにも状況は絶望的だった。

どうすれば……と光秀が悩んでいると、後ろから甲高い笑い声が聞こえた。

「おーほっほっほ！ まあまあ、光秀さん。頼りにしていますわよ！ お寺の周りが囲まれています、この程度の危機ぐらいあなたの知恵でどうにか出来ますわよね？」

沢山の松永の旗印が堀の外で乱舞している中でも、奥座敷で十二単を着込んで蹴鞠で遊んでいる今川義元だけが陽気だった。

しかし、そんな義元の言葉で光秀はハッとしました。そうだ、自分の役目はここで義元を守り抜くことだ。信奈は「ここをお願い」と自分に命じたのだ。その命令に背く訳にはいかない。

「御意。京を守るは、この明智光秀。命に代えましても、必ず義元さまをお守りいたします」

光秀はそう言い、ゆっくりと深呼吸した。信奈さまがいなくて良かったです、と光秀は思った。不幸中の幸いと言うやつだろう。長秀たちが清水寺に戻ってくるまで……耐え続ける。

光秀は種子島を片手に、自ら前線に立つ。そして敵の名だたる将を討ち取っていく、松永勢を怯ませていく。もはや、光秀は自らの命を投げ出す覚悟で戦っていた。しか

し、やはり一人で戦況が覆せるほど甘くはなかった。

遂には門が外側から破られた。敵兵が庭園に流れ込んでくる。その兵たちの先頭に立つ、一人の異国風の美女。

「うふ。我が名は、大和の多聞城城主——松永弾正久秀。以後、お見知りおき。まあ、すぐに末期の別れとなりますけれど」

「この女が……!?!」

妙齡、三十歳になるかならないかの熟れ頃の美女であった。肌は褐色で、この時代では珍しい清楚な短髪。一見すると、この国の人間ではなさそうだ。父か母が外国の者なのかもしれない。そして、色町の遊女のような女の色気。その豊満な身体を包む衣装は、唐風の派手なものであった。

「槍は、宝蔵院流にございます」

その母性あふれる笑顔は、まるで菩薩のようである。到底、天下の大悪人には見えなかった。しかし、それでも手に持つ武器は十文字槍。別名、鎌槍である。戦ならともかく、一対一の個人戦で槍を使うと言うのは、自らの力に自信があるのだろう。槍はひたすら前へと敵の急所に向けて直線的に突くのみ。しかし、剣は前後左右、変幻自在のものである。なので、自然と剣が有利となってくる筈だ。

「……宝蔵院流相手に種子島では勝負になりません。私も抜かせていただきます」

光秀は種子島を捨てた。所詮、鉄砲はこのような狭い場所での近接戦闘で使える武器ではない。弾を込める内に、伸びてくる十文字に心の臓を刺されるのは目に見えてい

る。
「我こそは明智十兵衛光秀。剣は——鹿島新当流、免許皆伝」

そう言うと同時に、光秀は鹿島新当流奥義である“一つの太刀”を放つ。

「なっ!？」

とつさに、十文字を構えていた久秀が後ろへ飛んだ。もし光秀が己の流派を名乗って
いなければ、久秀は斬られていただろう。久秀は、初めて驚いたかのように目を見開い
ていた。種子島の名手でもありながら、あの剣鬼將軍の足利義輝に匹敵する剣士でもあ
るといえるのか、この娘は。そして、このような天才までもおのが配下としていいのか、織
田信奈は……

「うふっ。わたくし、どうしてもあなたが見せる絶望の表情を見たくありませんわ!」
「面妖なことを……!」

じりじりと、二人の間合いが接近していく。その姿に、両軍の兵たちも戦うのを忘れ、
二人に見入ってしまった。誰も言葉を発しない。いや、発せない。達人同士の立ち
合い、おそらく勝負は初手で決まるだろう。初手を失敗すれば、確実に死ぬ。

そんな緊張感が溢れる中、久秀の厚い唇が、毒を吐くように蠢いた。

「甲賀の杉谷善十坊が、織田信奈さまを撃つたようすわ」

「っ!? なにを!」

「くすつ。あなたが五月雨晴也に渡した手紙。あれのお陰で五月雨晴也が捕まり、織田信奈さまを引き寄せられましたわ。あなたに礼を言わなければいけませんね」

え、と光秀は目を見開いた。あの手紙は、商人である津田宗久どのから渡されたもの。どうか五月雨晴也どのとお話したい、と頼まれていたのだ。

「それに、今ここがもぬけの殻になっていると知らせたのは津田宗久ですわ」

それでは、宗久どののは初めからわたしを利用するつもりだったのか……。十兵衛は、宗久が自分を屋敷に招いて、共に話をしたことを思い出していた。

『本当に、今すぐ一万貫くれるのですかっ!?』

『ええ。しかし、一つ頼みごとがあります』

『わたしにできることなら!』

『それでは……この手紙を五月雨どのにお渡し下さい。決して、手前からだとは伝えなないように願います。これさえ渡してくれるのならば、約束の一万貫は今すぐにもお渡ししますので』

『本当ですか! そのくらい、この十兵衛にお任せ下さい!』

そんな……と光秀は剣を手放した。よくよく考えれば、そんな上手い話なんてある訳がなかった。義元を將軍にする為に必死になり過ぎていたせいで、そんなことにも気づけなかった。

わたしのせいで、信奈さまが？ わたしのせいで、先輩が？

自分の存在意義が足下から崩壊したかのような、衝撃だった。

「……うふ。さようなら」

久秀はそんな隙を見逃さず、光秀の白く細い首筋へと、十文字槍が蛇のように伸びていった。

「……」だが、光秀は絶命しなかった。

「やらせるかあああつ！」

光秀と久秀の間合いの長秀に飛び込み、十文字槍をはねのけた者がいた。久秀は一旦後ろに飛び、距離をとる。しかし、それは光秀の下に駆け寄っていた。

「よく耐えたな、十兵衛」

「……え？」

光秀の頭をぐしゃぐしゃに撫でると、ゆっくりと手に持つ木刀を久秀に突きつけた。久秀は予想外の第三者の出現に、舌を打つ。

「ぶしつげな真似を……あなたは……？」

「ああ、いいところを悪かったな。だが、ここから俺、五月雨晴也が相手にさせてもらおうぜ！」

久秀は、またしても目を見開いていた。